

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（182）

主要地方道伊仙天城線道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅰ）

カメコ遺跡

（大島郡伊仙町）

2014年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書

（182）

カメコ遺跡

二〇一四年三月

鹿児島県立埋蔵文化財センター





序 文

この報告書は、主要地方道伊仙天城線道路改築事業に伴い、平成 21 年度に試掘調査を行い、平成 24 年度 11 月から 12 月にかけて本調査を実施した大島郡伊仙町に所在するカメコ遺跡の発掘調査の記録です。

カメコ遺跡では縄文時代後期から弥生時代の焼土跡をはじめ、多くの土器や石器等が発見されました。出土状況は芳しくなかったものの、状態良好な多くの土器は、今後の南島での当該期における研究を進めていく上で貴重な資料となると考えます。

本報告書が、県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に、調査にあたり御協力をいただいた大島支庁徳之島事務所、伊仙町教育委員会、関係各機関及び発掘調査に従事された地域の方々に厚くお礼を申し上げます。

平成 26 年 3 月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

所 長 井ノ上 秀 文

報 告 書 抄 録

ふりがな	かめこ							
書名	カメコ遺跡							
副書名	主要地方道伊仙天城線道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	I							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	182							
編著者名	有馬 孝一 岡本 貢一							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒 899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森 2 番 1 号 TEL 0995-48-5811							
発行年月日	西暦 2014 年 3 月 31 日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
かめこ カメコ遺跡	かごしまけん 鹿児島県 おおしまぐん いせんちょう 大島郡伊仙町 いぬたぶ 犬田布	46532	69	27° 42' 19"	128° 54' 20"	試掘 20091209 ～ 20091210 本調査 20121112 ～ 20121221	1,014	主要地方道 伊仙天城線 道路改築事 業に伴う記 録保存調査
所収遺跡名	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
カメコ遺跡	散布地	縄文時代後期 弥生時代		焼土跡		犬田布式土器 喜念 I 式土器 宇佐浜式土器 仲原式土器		
遺跡の概要	縄文時代後期から弥生時代の遺物が大量に出土した。出土状況から谷部への流れ込みと判断された。当時から、谷上部からの遺物の流入が繰り返されたと思われる、当遺跡周辺に良好な遺跡が立地している可能性を示している。							

例 言

- 1 本書は、主要地方道伊仙天城線道路改築事業に伴うカメコ遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、鹿児島県大島郡伊仙町犬田布に所在する。
- 3 発掘調査は、大島支庁建設部土木建築課（事業主体）から鹿児島県教育委員会が受託し、鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査は、平成21年度（試掘調査）と平成24年度（本調査）に実施し、整理・報告書作成作業は平成25年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターで実施した。
- 5 掲載番号は通し番号とし、本文・挿図・表・図版の番号は一致する。
- 6 遺物注記等で用いた遺跡記号は「カメコ」である。
- 7 挿図の縮尺は、挿図ごとに示した。
- 8 本書で用いたレベル数値は、海拔絶対高である。
- 9 本書で使用した方位は、すべて磁北である。
- 10 発掘調査における実測図作成及び写真撮影は、調査担当者が行った。
- 11 遺構図及び遺物分布図の作成及びトレースは有馬、岡本が整理作業員の協力を得て行った。
- 12 出土遺物の実測・トレースは、有馬・岡本が整理作業員の協力を得て行った。
- 13 出土遺物の写真撮影は、吉岡、辻、今村が行った。
- 14 本報告書に係る自然科学分析は、株式会社 加速器分析研究所が行った。
- 15 本書の編集は、有馬が担当し、執筆の分担は次のとおりである。

第1章	有馬孝一
第2章	大久保浩二
第3章 第1節・第2節	岡本貢一
第3節	有馬孝一・岡本貢一・堂込秀人
第4章	文頭に記載
第5章	有馬孝一・岡本貢一

- 16 本報告書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用を図る予定である。

凡 例

1. 土器の法量の計測にあたり，観察表内の（ ）の表記は，残存状況の良好なものについて図面上で反転復元を行い口径・底径が推測できたもの，器高については口縁からと底部からの残存高である。

2. 土器実測図調整痕表示について

調整痕種		実測図表示例	留意点
ナ デ	工具ナデ		・ 工具幅を明瞭に
	ナデ		・ ナデ幅を明瞭に
指頭圧痕			・ 指幅の明示

3. 実測図スケール

- 土器は， 1 / 2 で記載
- 石器は， 1 / 2 で記載

目 次

巻頭図版

序 文

報告書抄録

遺跡位置図

例 言

凡 例

目 次

第1章 発掘調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経緯	1
第2節 事前調査	1
第3節 本調査	1
第4節 整理・報告書作成	3
第2章 遺跡の位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 発掘調査の方法と成果	9
第1節 発掘調査の方法	9
1 調査の方法	9
2 遺構の認定と検出方法	9
第2節 層序	10
第3節 調査の成果	12
1 調査の概要	12
2 遺構	12
3 遺物	13
第4章 自然科学分析	51
第5章 総括	55

挿図目次

第1図	グリッド配置図及び周辺地形	4
第2図	周辺遺跡地図	7
第3図	標準土層	10
第4図	土層断面図	11
第5図	遺構配置図	12
第6図	焼土跡検出状況	13
第7図	遺構出土状況	14
第8図	土器分類	15
第9図	I類土器 (1)	17
第10図	I類土器 (2)	18
第11図	II類土器 (1)	19
第12図	II類土器 (2)	20
第13図	II類土器 (3)	22
第14図	II類土器 (4)	23
第15図	III類土器	24
第16図	IV類土器 (1)	25
第17図	IV類土器 (2)	26
第18図	V類土器 (1)	27
第19図	V類土器 (2)	28
第20図	VI類土器 (1)	29
第21図	VI類土器 (2)	30
第22図	VII類土器 (1)	32
第23図	VII類土器 (2)	33
第24図	VIII類土器 (1)	34
第25図	VIII類土器 (2)	35
第26図	IX類土器	36
第27図	補修孔を有する土器	37
第28図	底部 (1)	38
第29図	底部 (2)	39
第30図	その他の土器	40
第31図	石器 (1)	47
第32図	石器 (2)	48
第33図	石器 (3)	49
第34図	石器 (4)	50

表 目 次

表 1	周辺遺跡一覧表	8
表 2	土器観察表 (1)	37
表 3	土器観察表 (2)	39
表 4	土器観察表 (3)	41
表 5	土器観察表 (4)	42
表 6	土器観察表 (5)	43
表 7	土器観察表 (6)	44
表 8	土器観察表 (7)	45
表 9	石器観察表	46

図 版 目 次

図版 1	発掘調査 (1)	57
図版 2	発掘調査 (2)	58
図版 3	I 類土器	59
図版 4	II 類土器	60
図版 5	III, IV 類土器	61
図版 6	V 類土器	62
図版 7	VI 類土器	63
図版 8	VII, VIII 類土器	64
図版 9	IX 類, 補修孔, 底部 (1)	65
図版 10	底部 (2), その他の土器	66
図版 11	石器 (1)	67
図版 12	石器 (2)	68

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護・活用を図るため、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し、諸開発との調整を図ってきた。この事前協議制に基づき、鹿児島県土木部道路建設課（大島支庁徳之島事務所建設課「以下、道路建設課」）は、主要地方道伊仙天城線道路改築事業を計画し、事業地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下、文化財課）に照会した。

この計画に伴い文化財課は、事業地が周知の遺跡であるカメコ遺跡の範囲内にあることを確認した。この結果をもとに、事業区間内の埋蔵文化財の取扱いについて、道路建設課・文化財課・鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）の三者で協議を行い、埋蔵文化財の保護と事業推進の調整を図るため、事業着手前に試掘調査を実施することになった。

試掘調査は、文化財課及び埋文センターが担当することとし、平成21年12月9日から平成21年12月10日に実施した。その結果、遺物の存在を確認した。

そこで、再度三者で協議を行い、カメコ遺跡について本調査を実施することとなった。調査は埋文センターが担当し、平成24年11月12日から平成24年12月21日（実働25日間）にかけて実施した。

第2節 事前調査

1 試掘調査

本遺跡の試掘調査は平成21年12月9日から12月10日の2日間にわたり実施した。

調査体制

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課 大島支庁徳之島事務所建設課		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査統括	鹿児島県教育庁文化財課	課長	有川 昭人
調査企画	鹿児島県教育庁文化財課	課長補佐	中尾 純則
		主任文化財主事兼	
		埋蔵文化財係長	堂込 秀人
調査担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター	調査第一課長	中村 耕治

第3節 本調査

本遺跡の本調査は、平成24年11月12日から平成24年12月21日の25日間にわたり実施した。

調査体制

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課 大島支庁徳之島事務所建設課			
調査主体	鹿児島県教育委員会			
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課			
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所	長	寺田 仁志
調査企画	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次 長 兼 総 務 課 長		新小田 穰
		次長兼南の縄文調査室長		井ノ上秀文
		調 査 第 一 課 長		堂込 秀人
		調査第一課第二調査係長		大久保浩二
調査担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文 化 財 主 事		有馬 孝一
		文 化 財 主 事		岡本 貢一
事務担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター	主 幹 兼 総 務 係 長		大園 祥子

調査の経過（日誌抄より）

H24.11. 7～11. 9

事前確認及び事前打ち合わせ。プレハブ設置（日建リース工業）B・C－5～8区 重機による表土除去。

H24.11.12～11.16

調査開始。発掘機材，ベルトコンベアの搬入。B・C－7・8区 II層掘り下げ。B・C－2～6区 重機による表土除去。

H24.11.19～11.22

B・C－6～8区 II層，Ⅲa層掘り下げ。B－4・5区 II層，Ⅲa層掘り下げ。B－4～6区，II層，Ⅲa層，C－7区 Ⅲa層遺物取り上げ。堂込課長現地指導（22日）

H24.11.26～11.28

B・C－4・7・8区 Ⅲa層掘り下げ。B・C－7・8区 遺物出土状況写真撮影。

H24.12. 3～12. 7

B・C－6～8区 Ⅲa層掘り下げ。A・B－4区 下層確認トレンチ掘り下げ。B・C－6～8区 Ⅲa層遺物取り上げ。

B－7区 焼土跡検出，掘り下げ。B－5区 土層断面写真撮影，実測。B－4～6区 重機によりII層掘り下げ。

寺田所長現地指導（3，4日）東第一調査係長現地調査（3，4日）

H24.12.10～12.14

B・C－6～8区 Ⅲa層掘り下げ。B－5区 Ⅲa層掘り下げ。A・B－4区 下層確認トレンチ掘り下げ。B・C－7区 下層確認トレンチ掘り下げ。

B・C－6～8区 Ⅲa層遺物出土状況写真撮影，取り上げ。B－7区 焼土跡完掘，写真撮影，実測。C－7区 土層断面写真撮影，実測。

H23.12.17 ～ 12.21

B－4・5区 Ⅲa層掘り下げ，遺物取り上げ。A・B－4区 下層確認トレンチ掘り下げ，土層断面写真撮影，実測。

B－6区 下層確認トレンチ掘り下げ。調査範囲図作成，Ⅲb層上面コンタ図作成。発掘機材搬出。調査終了。

第4節 整理・報告書作成

本報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は，平成25年4月15日から平成26年3月7日にかけて鹿児島県立埋蔵文化財センターで行った。

出土遺物の水洗い，注記，遺構内遺物と包含層遺物の仕分け，遺物の実測・拓本，図面のトレース・レイアウトや原稿執筆等の編集作業を行った。整理・報告書作成作業に関する調査体制は以下のとおり。

作成体制（平成25年度）

事業主体 鹿児島県土木部道路建設課
大島支庁徳之島事務所建設課

調査主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

調査企画 鹿児島県立埋蔵文化財センター

調査担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター

事務担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター

所 長

次長兼総務課長

調 査 課 長

第 二 調 査 係 長

文 化 財 主 事

文 化 財 主 事

主幹兼総務係長

主 事

井ノ上秀文

新小田 穰

堂込 秀人

大久保浩二

有馬 孝一

岡本 貢一

有馬 博文

池ノ上勝太

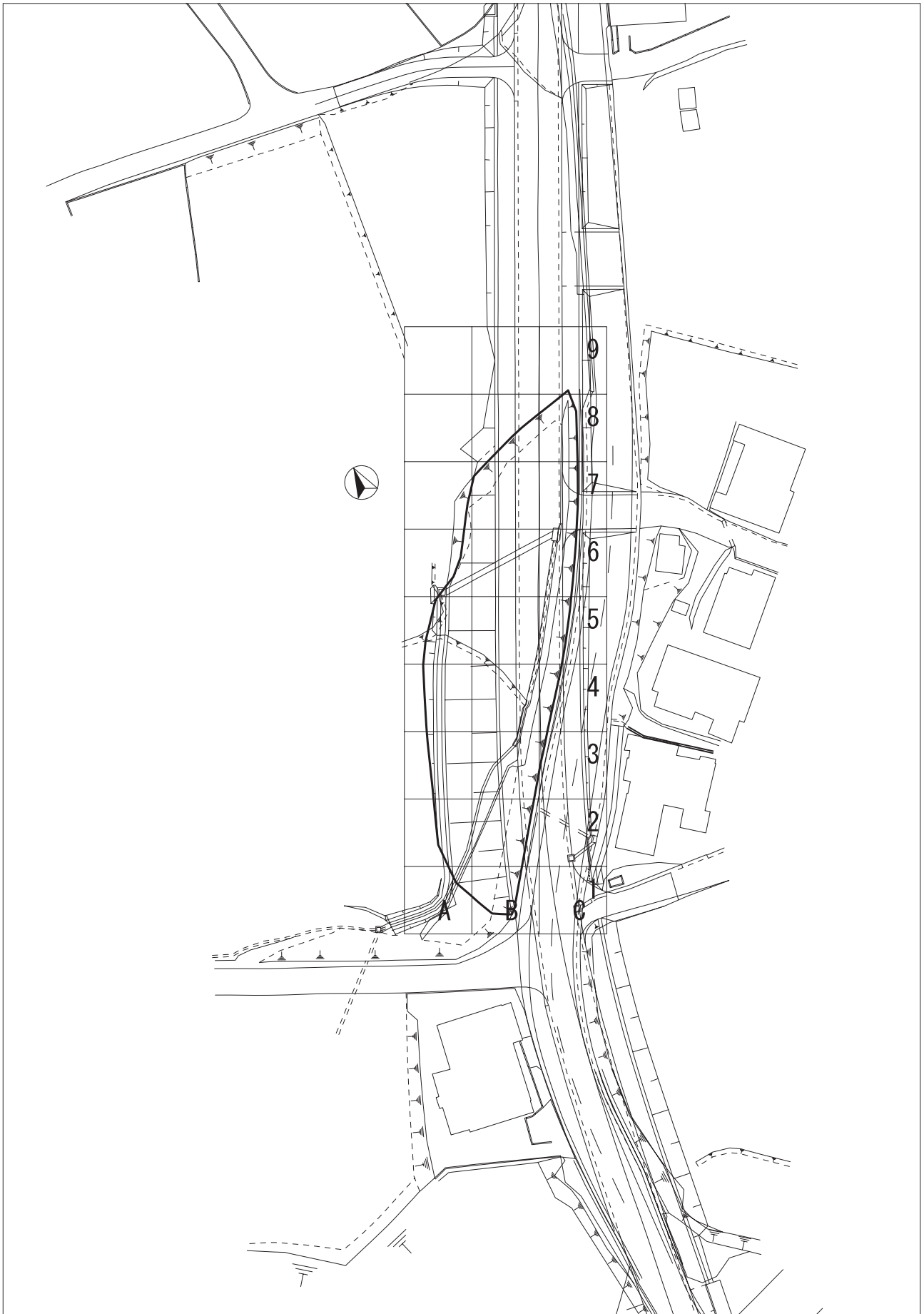
報告書作成指導委員会 平成25年11月27日

（公財）埋蔵文化財調査センターと合同で実施

報告書作成検討委員会 平成25年11月28日

堂込課長ほか 5名

井ノ上所長ほか7名



第1図 グリッド配置図及び周辺地形

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

九州から台湾にかけての洋上に連なる琉球列島は、地理的なまとまりから大隅諸島、トカラ列島、奄美諸島、沖縄諸島、先島諸島に分けられる。伊仙町のある徳之島は奄美諸島の中央部に位置し、鹿児島市から南へ533kmの洋上に位置している。見通しのよい日には北東方向に奄美大島、南西方向に沖永良部島を望むことができる。島の面積は約248km²で、中央部に標高645mの井之川岳を主峰とする花崗岩の山地が東北部から南西方向に向かって延びている。この中央の山地を取巻くように、海岸に向かって緩やかに傾斜した段丘が広がり、標高200m付近を境として、山地と隆起珊瑚礁に大別される。島の南部は隆起珊瑚礁が発達して、広大な海岸砂丘を形成している。海岸線は島の西岸がほとんど20～100mほどの断崖で海に落ち込んでいるのに対し、島の東側はほとんど全面になだらかな隆起珊瑚礁が発達している。

遺跡の所在する伊仙町は、徳之島の南西部に位置し、北東は徳之島町、北西は天城町に隣接している。町の北東部にある標高417.4mの犬田布岳から、山地やその裾野が緩やかに南へ傾斜して平坦地となり、砂丘や珊瑚礁が発達した海岸線となっている。隆起珊瑚礁の上の覆土は薄く、赤土が大雨によって流されることも多い。

本遺跡は伊仙町の北西端近くにあり、海岸線までは約500mである。北西約3kmには珊瑚の断崖が美しい景勝地として有名な犬田布岬がある。山地から南へ緩やかに下降してきた台地の端部近くにあり、特に今回の調査地点はその末端の谷地形にあたる部分と考えられる。台地一帯はほとんど開墾され、サトウキビあるいは飼料などの畑となっており、遺跡の北側は集落が形成されている。台地の覆土は薄くあちこちに隆起珊瑚礁の露頭がみられる。

第2節 歴史的環境

伊仙町は徳之島の中でも遺跡の多い所であるが、近年の発掘調査によってしだいにその様相が明らかになりつつある。

旧石器時代の遺跡としては、天城（アマンガスク）遺跡²⁰⁾があげられる。同遺跡からはチャートの剥片を素材とした台形石器を主体とする石器群が発見された。これらの石器群は組成や製作技術の観点から旧石器時代に属するものと考えられている。

南部の海岸地帯には縄文時代の貝塚が多く発見されている。喜念貝塚⁶⁶⁾、面縄貝塚群^{47, 48, 49, 50)}、犬田布貝塚¹¹⁾などがあり、これらは古くから調査され多くの遺物が確認されている。いずれも隆起珊瑚礁の横に開いた岩陰あるいはその前庭部に生活跡を残すこの地方独特の貝塚であり、後期から晩期にかけての遺跡である。

喜念貝塚⁶⁶⁾は宇宿上層式土器を主体とするが、他に宇宿下層式土器なども出ており、喜念式土器（後期）の標式遺跡としても知られる。

面縄貝塚群は4つの貝塚によって構成されており、それぞれ面縄第1～第4貝塚と呼ばれている。かなり長期にわたる貝塚群で、前期から晩期にわたっており、多種の石器、貝製品、骨製品などが出

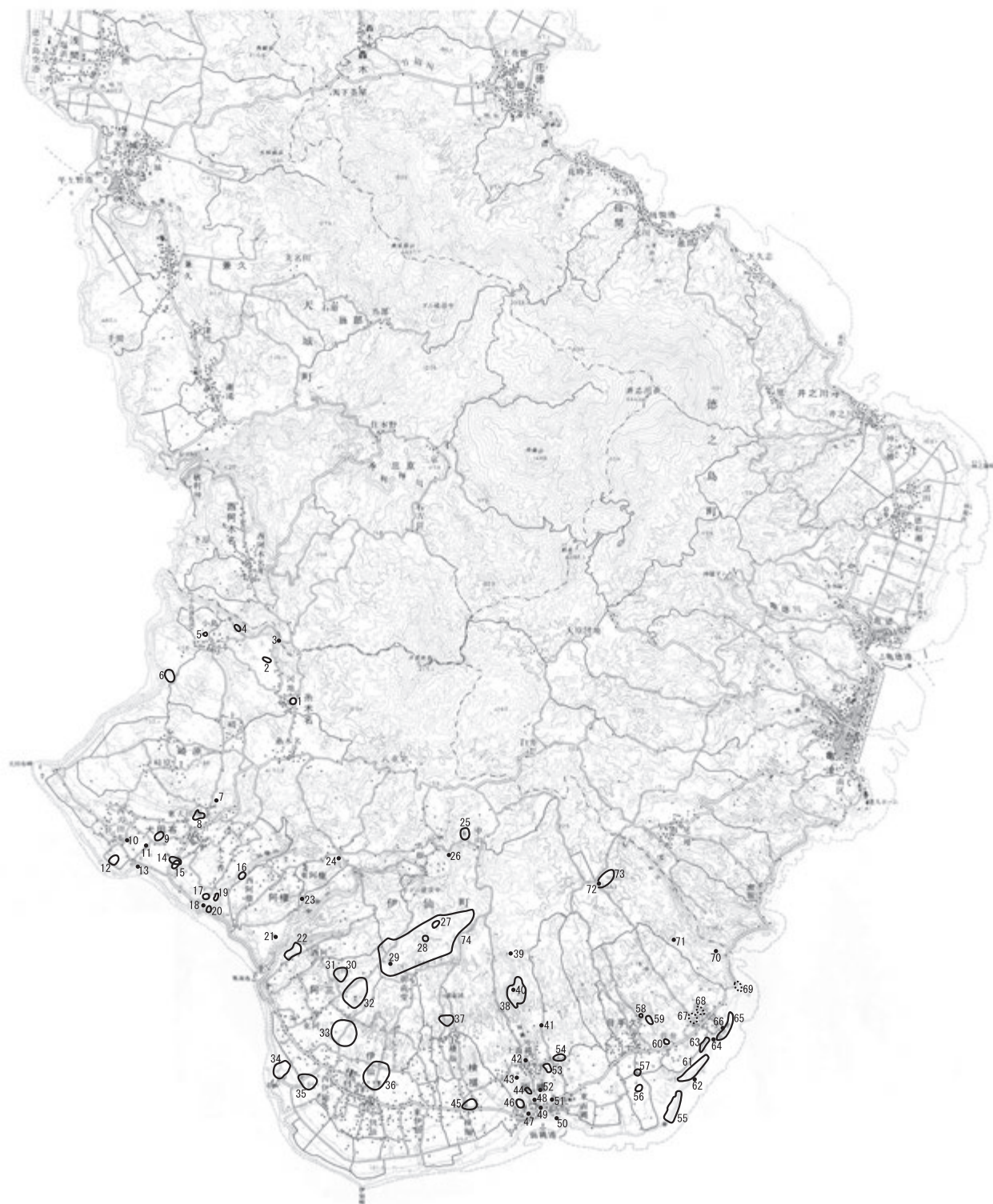
ている。ここから出土した土器は面縄東洞式土器、面縄前庭式土器などと呼ばれ、縄文土器の標式遺跡にもなっている。

カメコ遺跡¹⁴⁾に最も近いのは犬田布貝塚¹¹⁾である。ここは昭和58年に発掘調査がされ、隆起珊瑚礁の洞穴とその前庭部から多くの遺物が発見された。土器は面縄西洞式系統の土器、喜念Ⅰ式、宇宿上層式などが出ており、河口貞徳氏は面縄西洞式系統の土器を犬田布式土器と呼んでいる。石器には磨製石斧・打製石器・磨石・敲石・凹石・石皿などが出ている。貝製品には刃器（貝刃・螺貝製貝斧・スジガイ製利器）、刺突具、鏃、容器、匙、貝輪、垂飾品、錘、釣針などがある。骨製の利器・垂飾品もある。他にも石あるいは鹿角の垂飾品、かんざし、耳栓、糞石など多種のものが出ており、徳之島の縄文人の生活を復元するには格好の遺跡となっている。

この他にも東浜貝塚⁵⁰⁾、ヨヲキ洞穴²⁹⁾、喜念上原遺跡⁷³⁾などの縄文時代遺跡がある。

弥生時代～古墳時代の遺跡としては喜念原始墓⁶⁹⁾・喜念クバンシャ岩陰墓⁶⁹⁾・佐弁貝塚⁶⁴⁾・面縄第1貝塚⁴⁷⁾・面縄第3貝塚⁵¹⁾・ヨヲキ洞穴²⁹⁾などが知られている。喜念原始墓⁶⁹⁾・喜念クバンシャ岩陰墓⁶⁹⁾では多くの人骨が発見されており、南西諸島特有の抜歯風習をしていることで知られている。近くでは貝札や貝輪なども発見されている。面縄第1貝塚⁴⁷⁾では残りの良い人骨を伴う箱式石棺墓も見つかっている。これら弥生時代の遺跡では南西諸島特有の土器とともに、九州本土系の土器も出土している。また面縄第3貝塚⁵¹⁾は兼久貝塚とも呼ばれているが、ここから出た弥生時代～歴史時代の土器は兼久式土器といわれ、南西諸島の標式遺跡となっている。

特筆される中世の遺跡としては、国指定史跡であるカムイヤキ古窯跡群⁷⁴⁾があげられる。ここで焼かれた軟質の須恵器はトカラ列島から沖縄諸島にかけて広く分布しているが、近年では出水市の出水貝塚からも出土し、本土にも及ぶ広い流通圏を持つことが判明した。国庫補助を受けての重要遺跡確認調査が継続的に行われ、東西に1km以上に延びる里道に沿った九つの支群と、100基以上と想定される窯跡が確認された。調査された窯は長さが3.6～8.4mあり、焼成部の角度は31度～42度もある急傾斜の登り窯である。甕・壺・鉢・碗などを焼いており、12～13世紀頃のものだといわれている。南西諸島における生産と流通の様相を知る上で基調であるとして『徳之島カムイヤキ陶器窯跡』として平成19年2月6日に国の史跡に指定された。



第2図 周辺遺跡地図

表1 周辺遺跡一覧表

遺跡 No	遺 跡 番 号	遺 跡 名	所 在 地	時 代	地 形	備 考
1	40-56-0	河地	糸木名字河地	縄文～中世	台地	平成13年表探
2	40-51-0	ガラ竿	小島ガラ竿	旧石器～中世	台地	平成11年度分布調査, 平成13年度確認調査
3	40-1-0	上成川	糸木名上成川	縄文	丘陵	表探
4	40-55-0	大成川	小島大成川		台地	平成13年表探
5	40-50-0	後竿	小島後竿	中世	台地	平成11年分布調査
6	40-49-0	宮里原	上晴宮里原	縄文～中世	台地	表探
7	40-24-0	妙厳按司城跡	大字犬田布明眼	中世	丘陵	
8	40-38-0	アジフーB	犬田布	中世	台地	昭和63年表探
9	40-16-0	アジフー	犬田布	弥生～中世	扇状地	表探
10	40-9-0	犬田布記念碑	犬田布	弥生	扇状地	表探
11	40-4-0	犬田布貝塚	犬田布字連木竿1152番地	縄文～弥生		昭和47年発見, 昭和50・58年調査, 町埋文報(2)
12	40-54-0	宮戸原	犬田布宮戸原		台地	表探
13	40-30-0	前泊西貝塚	西犬田布	弥生	低地	表探
14	40-69-0	カメコ				
15	40-43-0	木之香B	犬田布カメコ	縄文(晩)	台地	当初「木之香」としたが, 字名が異なったため「カメコ」に改称, 平成2年分布調査
16	40-60-0	ウテンハナ	阿権	中世		
17	40-41-0	下島権	阿権太野	縄文(晩)～中世	丘陵・台地	平成2年分布調査
18	40-15-0	アマングスク	木之香太野	中世	丘陵	県埋文報(43), 表探
19	40-40-0	木之香	阿権太野	縄文～弥生	丘陵	
20	40-42-0	天城	阿権太野	旧石器, 縄文(晩), 古墳	丘陵	平成2年分布調査
21	40-74-0	鹿原				
22	40-34-0	勘花	西阿三字勘花	中世	台地	
23	40-73-0	ウツ竿				
24	40-21-0	フードグスク	阿権大当原	中世	丘陵	阿権四等三角点, 県埋文報(43), 表探
25	40-37-0	中山神社	中山	中世	台地	表探
26	40-28-0	墓地(ねーま遠留)	中山		丘陵	(町)昭和53.2.23
27	40-32-0	ウウビラ城跡	馬根	中世	山頂	
28	40-52-0	平スク	伊仙平スク	縄文	台地	表探
29	40-5-0	ヨヲキ洞穴	阿三ヨヲキ	縄文(中)～中世	低地	昭和59年発見, 昭和60年調査
30	40-25-0	あざま按司城跡	阿三字谷俣	中世	丘陵	
31	40-19-0	アザマグスク(タニ)	阿三	中世	丘陵	県埋文報(43), 表探
32	40-57-0	カン田	阿三カン田	縄文～中世	台地	平成13年表探
33	40-58-0	前田	阿三前田	縄文～中世	台地	平成13年表探
34	40-8-0	瀬田海	伊仙	弥生	扇状地	表探
35	40-7-0	下板割	伊仙下板割	弥生	扇状地	表探
36	40-23-0	ミンツキ集落跡	伊仙ミンツキ	中世	扇状地	表探
37	40-22-0	トラグスク	検福古里	中世	丘陵	県埋文報(43), 表探
38	40-75-0	恩納城跡				
39	40-26-0	恩納城跡	面縄ウガン	中世	丘陵	表探
40	40-17-0	面縄按司墓	上面縄	中世	丘陵	表探, 県埋文報(43)
41	40-70-0	東赤久				
42	40-61-0	廣力				
43	40-62-0	大セノ嶺				
44	40-63-0	中ノ当				
45	40-59-0	赤久	検福赤久	縄文	台地	平成13年表探
46	40-36-0	ヲクラチ	面縄ヲクラチ	縄文～中世	台地	平成13年表探
47	40-31-0	面縄第1貝塚	面縄兼久バル	縄文～弥生	扇状地	昭和3年発見, 昭和5・10年発掘調査, 町埋文報(1), 昭和57.9.1
48	40-3-0	面縄第4貝塚	面縄兼久661番	縄文(前・中・後)	丘陵	町埋文報(4), 「九学会報告書」(1959年)
49	40-29-0	面縄第2貝塚	面縄兼久バル	縄文(後)	砂丘	昭和5年発見, 昭和10年調査, 昭和28・29・31年試掘調査, 町埋文報(1), (町)昭和53.2.23
50	40-11-0	東浜貝塚	東面縄	弥生(後)	砂丘	表探, 「伊仙町誌」
51	40-14-0	面縄第3貝塚(兼久貝塚)	面縄兼久バル	縄文～弥生	丘陵	「九学会報告書」(1956年), 昭和54年10月～11月発掘調査
52	40-64-0	坂元				
53	40-65-0	前当り				
54	40-48-0	ミンク	面縄	古墳～中世	台地	平成10年分布調査, 表探
55	40-67-0	佐弁トマチン				
56	40-35-0	上水溜	目手久上水タマリ		台地	表探
57	40-39-0	大久保	目手久字大久保		台地	表探
58	40-68-0	中筋川風葬墓跡				
59	40-47-0	川嶺辻	目手久	中世	台地	表探
60	40-46-0	サクダ	佐弁サクダ	古代～中世	台地	
61	40-72-0	ミヤト				
62	40-53-0	佐弁(第二)	佐弁ミヤド		砂丘	昭和25年表探
63	40-71-0	東ミヤド				
64	40-10-0	佐弁貝塚	佐弁東ミヤド	弥生(後)	砂丘	表探, 「伊仙町誌」
65	40-27-0	喜念浜砂丘	喜念		砂丘	(町)昭和53.2.23
66	40-2-0	喜念貝塚	喜念兼久	縄文(後)～弥生(後)	砂丘	「人類学雑誌」16, 「南日本文化研究所」9号
67	40-44-0	ウエアタリ	喜念ウキンダリ	縄文～中世	台地	平成7年確認調査
68	40-45-0	ウシロマタ	喜念ワカバトウ	縄文～中世	台地	平成7年確認調査, 平成8年発掘調査
69	40-13-0	喜念原始墓	喜念字ムデナウ844番地	弥生	丘陵	「伊仙町誌」, 「ドルメン」4-6
70	40-6-0	本川	喜念	弥生(前)	台地	表探
71	40-20-0	ヲネガン	喜念スーパテ	中世	丘陵	県埋文報(43), 表探
72	40-33-0	喜念按司屋敷跡	喜念上泉袋	中世	山麓緩斜面	表探
73	40-12-0	喜念上原	喜念上泉袋	弥生(後)	丘陵	表探
74	40-18-0	カムイヤキ古窯跡群	阿三カムイヤキ	中世	丘陵	昭和58年6月工事中発見, 昭和59年発掘調査

第3章 発掘調査の方法と成果

第1節 発掘調査の方法

1 調査の方法

今回発掘調査を行ったカメコ遺跡は、鹿児島市から南へ533kmの洋上に位置する徳之島の伊仙町に所在する。本遺跡は伊仙町北西端近くに位置し、山地から緩やかに傾斜してきた台地の端部近くにあり、今回の調査地点はその末端に形成された谷部に立地する。

調査区のグリッドは、遺跡全体をカバーできるよう工事用杭 No47（世界測地系 $X = -586203.6725$, $Y = -58705.8419$ ）と工事用杭 No48（世界測地系 $X = -586189.3793$, $Y = -58691.8525$ ）を結んだ線及びその延長線を主軸とし No48 で主軸と直交する線を中心に設定した。

具体的には南側から北側に向かって1, 2, 3..., 西側から東側に向かってA, B...と区割りを設定した。

発掘調査は平成24年11月12日から平成24年12月21日までの作業員実働25日間で実施した。調査対象面積は1,014㎡である。調査の方法は、重機（バックホウ）によって表土を除去した後、遺物を包含する層は山鍬、ジョレンなどを使用しながら人力で掘り下げを行った。土壌の性格上、雨後はぬかるみ、晴れると地面がコンクリートのようになるところから、細かな掘り下げには手鍬を使用せざるを得ない状況で、遺構精査の時のみ、ねじり鎌を使用した。

遺物の取り上げは、残存良好なものは取り上げ番号を付し、トータルステーションにて座標及び標高を記録し、その他については層位ごとのグリッド一括で取り上げを行った。

遺物の出土は、新旧入り交じった状態で、上位の層から古い時期と解されているものが出土したり、下位の層から新しい時期と解されているものが出土したりした。また、焼土遺構も検出されており、遺物出土レベルにも若干の粗密がみられるものの、生活面として明確に捉えられる面が存在しなかった。おそらくは、周辺の覆土が流出し谷部に堆積したものと考えられる。

現在でも、大雨の時など表土の赤土が流出することが多く、地元住民の方から聞いた話によると、現在県道が通り住宅などが点在する遺跡東側に向かって谷筋があり、周辺から流出した土が集まる場所であったという。

2 遺構の認定と検出方法

検出された遺構はⅢa層で焼土が1か所のみであった。Ⅲ層上面において、暗茶褐色の地面が若干赤みを帯びた部分を確認し、検出状況の写真撮影を行った後、焼土域中心を通る直交する主軸ラインを設定し、1/4の部分について掘り下げを行った。その後、埋土状況の写真撮影を行い、図面作成後、半截して掘り下げ、さらにその半分の1/4を順次掘り下げた作業を繰り返し図面を完成し、完掘状況の写真撮影を行った。

第2節 層序

基本層序はA・B－4区に設定した深掘りトレンチを基本土層とした。遺跡内はあちこちに廃棄物投棄の掘削痕や土地境として巨大なコーラル塊を設置した跡などがみつき、かなりの部分が破壊されていた。

表土を除去すると、黒褐色粘質土のⅡ層が現れる。土中にコーラル粒が多く混じり、下位に遺物が混じる。Ⅲ層は掘削時、面的に土色の違いは把握困難であった。トレンチ断面観察によりコーラル粒含有量の多少、遺物包含の多少でわずかに、違いが見られたので5枚に分層した。

Ⅲ a層は、暗茶褐色粘質土で硬質、コーラル粒が若干混じり、遺物がわずかに混じる。

Ⅲ b層は、茶褐色粘質土で硬質、コーラル粒を多く含有し、他層と異なり比較的大きめの遺物が混じる。

Ⅲ c層は、茶褐色粘質土で硬質、コーラル粒を多く含有し、土器小片が多く混じる。色調はⅢ b層よりやや暗い。

Ⅲ d層は、茶褐色粘質土で硬質、コーラル粒を多く含有し、色調はⅢ c層よりわずかに明るい。遺物のごくわずかに混じる。

Ⅲ e層は、茶褐色粘質土で硬質、コーラル粒を多く含有するがⅢ d層よりは少ない。

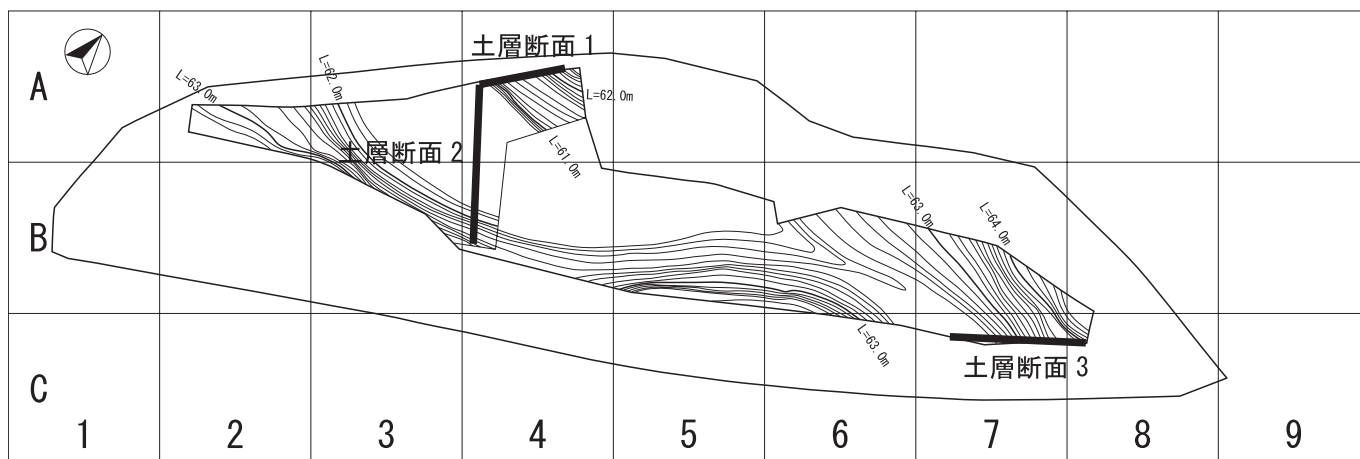
Ⅳ層は、黄茶褐色粘質土で、コーラル粒を含まず、Ⅲ各層と比較して粘質が極めて高く、ねじり鎌にべっとり粘着するほどである。

先にも述べたが、いずれの層も水分を含むと粘質が強くなり、掘り具に粘着し、掘削を行うのも困難なほどとなる。逆に、晴れると半日ほどで硬化し、ねじり鎌などでは歯が立たないほど硬質の土となる。

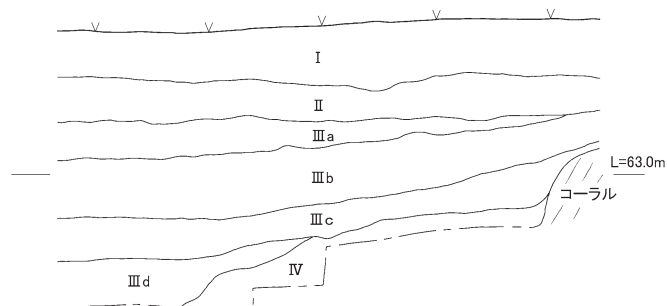
標準土層図

Ⅰ層	表土
Ⅱ層	黒褐色粘質土（コーラル粒が多く混じり、下位に遺物が混じる。）
Ⅲ a層	暗茶褐色粘質土（硬質でコーラル粒が若干混じる。遺物がわずかに混じる。）
Ⅲ b層	茶褐色粘質土（硬質でコーラル粒が多い、比較的大きい遺物が混じる。）
Ⅲ c層	茶褐色粘質土（硬質でコーラル粒が多い、土器小片が多く混じる。色調はⅢ b層よりやや暗い。）
Ⅲ d層	茶褐色粘質土（硬質でコーラル粒が多い、色調はⅢ c層よりわずかに明るい。遺物はわずかに混じる。）
Ⅲ e層	茶褐色粘質土（硬質でコーラル粒が多いが、Ⅲ d層よりは少ない。）
Ⅳ層	黄茶褐色粘質土（強粘質土で、コーラル粒を含まない。）

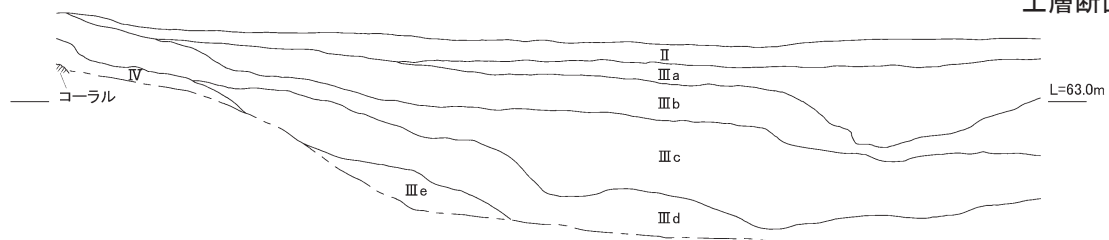
第3図 標準土層



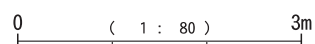
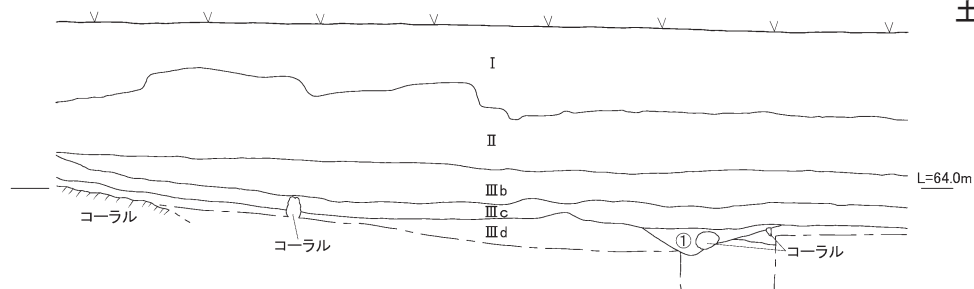
土層断面 1



土層断面 2



土層断面 3



第4図 土層断面図

第3節 調査の成果

1 調査の概要

試掘調査の結果を受けて、重機による表土剥ぎ及びダンプによる排土搬出から調査を開始した。試掘調査時も層の把握に苦慮したようであるが、調査範囲内は至るところに攪乱がみられ、且つ近年になっても土砂の流入と流入土の硬化が繰り返されているとみられる。次層に到達したと判断し、わずかに掘り下げると、新たな現代の攪乱が見つかるなど、今回の調査でもやはり層の把握に苦労させられた。

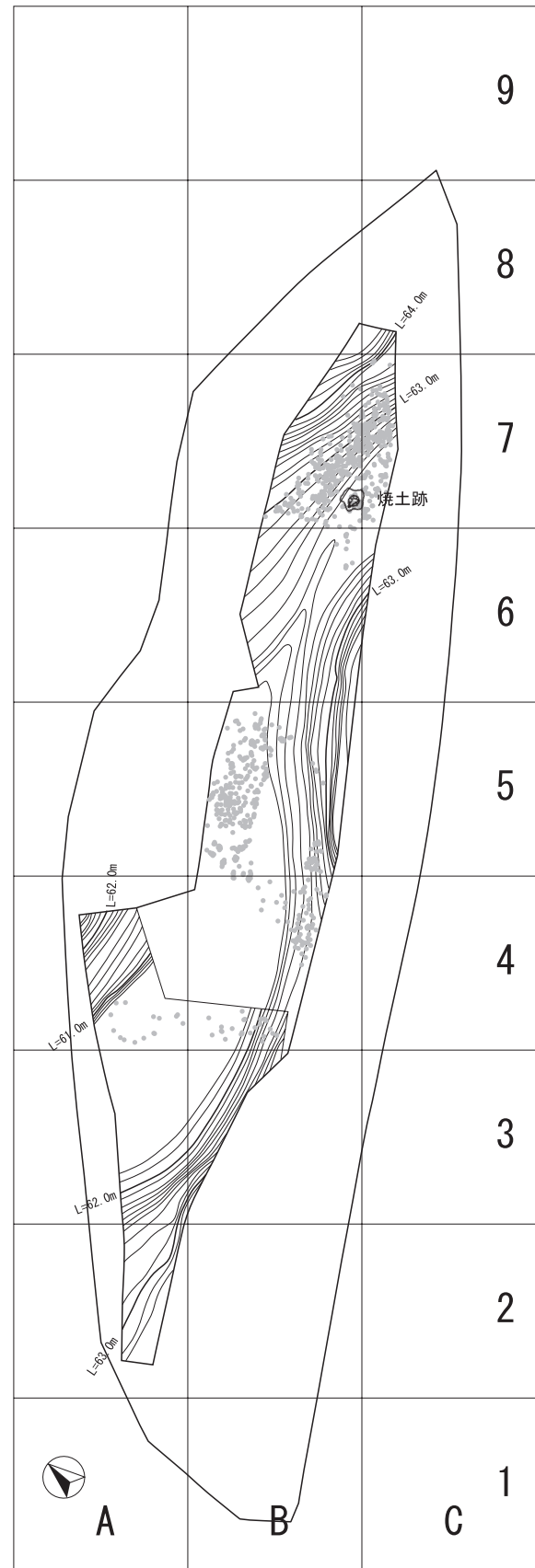
遺物を包含する層の掘り下げにおいても、遺物量が多いものの、新旧入り交じった状態、各層間において間断ない遺物の出土をし、既知の遺物の新旧と層位の関係に逆転現象が起こるなど流れ込み的要素が強かった。さらに遺構は、焼土跡が1基のみで、遺構の上下でも遺物の出土状態に変わりはなく、新旧混在した状態であった。

このようなことから、当遺跡は周辺からの流れ込みによって形成されていると判断した。しかし、流れ込みではあるものの遺物量が多く、その遺物の収集は価値あるものと判断して、調査期間いっぱい、遺物の取り上げを行うこととした。

2 遺構

焼土跡（第5, 6図）

焼土跡は、B - 7区、Ⅲ a層上面で検出された。長軸 80cm、短軸 55cm のまだらで不定形に広がる赤褐色土で明瞭な掘り込みはない。明らかな焼土の層は確認できず、やや黒みがかったⅢ a層土に赤褐色土がまだらに混じり広がる状態であった。この広がりの中に3～5mm程度の炭化物状の物質が点在していたため、サンプリングし科学分析を試みたが良好な結果は得られなかった。（第4章科学分析参照）



第5図 遺構配置図

3 遺物

カメコ遺跡からは縄文時代後期末から弥生時代の遺物が出土した。調査対象区域は虫食いに攪乱を受けているが、旧谷地形の最深部を中心に遺物が大量に出土した。A-2・3区はすでに隆起珊瑚の基盤層が一部露出しており、遺物はほとんど見あたらなかった。

調査期間の関係で対象地内、すべての遺物を取り上げることは不可能であったが、可能な範囲で遺物の回収を試みた。出土遺物総数 27,200 点の内 244 点を図化した。

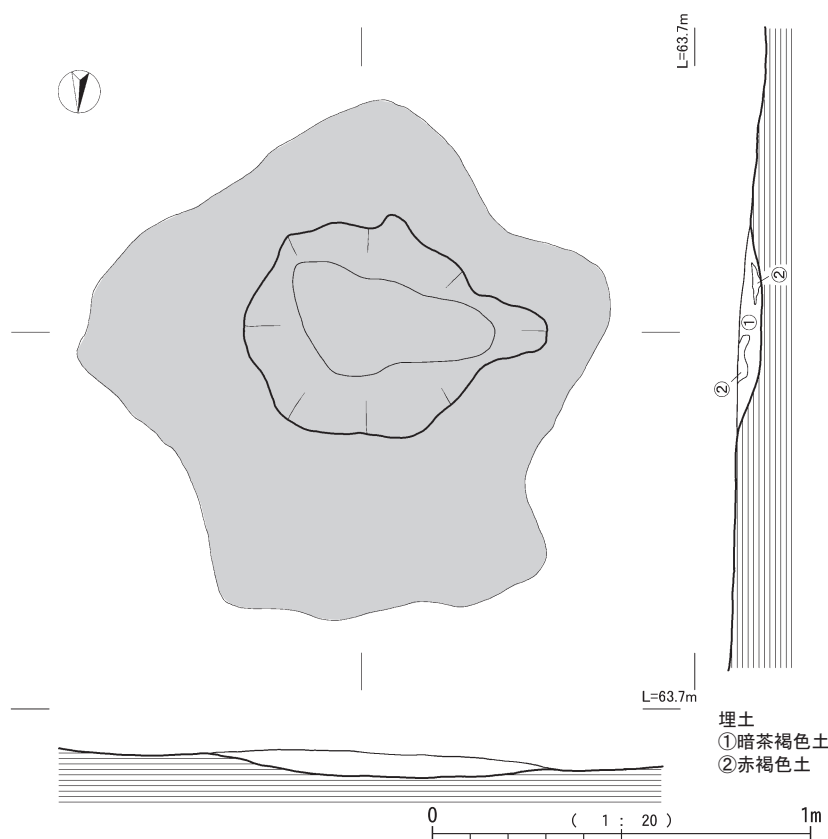
出土遺物の分類概要を行った後、それぞれの詳細について記述する。

I 類土器 (第9, 10 図1～20)

深鉢形土器の器形は口縁部がやや外反し、胴部は張りが少ない。壺形土器の器形は頸部で締まり、胴部はやや張りがみられる。口縁部上下にそれぞれ1条の突帯をめぐらすもの、口唇部を肥厚させ突帯状にするもので、2条の突帯間に数条を単位とする平行沈線で鋸歯状または綾杉状、斜位から縦位の文様を施す。突帯上に角形の連点、もしくは刻み目を施す一群である。

II 類土器 (第11～14 図21～64)

深鉢形土器の器形は口縁端部が外反し、胴部にはやや張りがみられる。壺形土器の器形は、頸部で締まり、胴部にはやや張りがみられる。口縁部上端が肥厚し、突帯状もしくは蒲鉾状となる。また、頸部から肩部にかけ1条から2条の、みみず腫れ状の突帯が付き、突帯上には二叉状の工具による連



第6図 焼土跡検出状況

点文が施される。また、口唇下位から突帯間、頸部に貼付された突帯間に羽状、斜行を中心に沈線文が施される一群である。

Ⅲ類土器（第 15 図 65 ～ 78）

器形は口縁部が外反し、胴部にやや張りがみられる。口唇部の肥厚がみられないものが現れ、頸部から肩部にかけ、細い隆帯を縦・横に貼り付け、隆帯上に刻みを施すもの、隆帯に沿って両側に二叉状様の連点を施すものがある。また、隆帯を貼付せず、縦・横の沈線に羽状文を絡める文様を施す一群である。

Ⅳ類土器（第 16, 17 図 79 ～ 95）

口縁部端部付近で外反し、口縁直下から胴部への張りがみられる器形を呈する。口縁部が肥厚し、肥厚部断面が蒲鉾状を呈する無文土器の一群である。

Ⅴ類土器（第 18, 19 図 96 ～ 117）

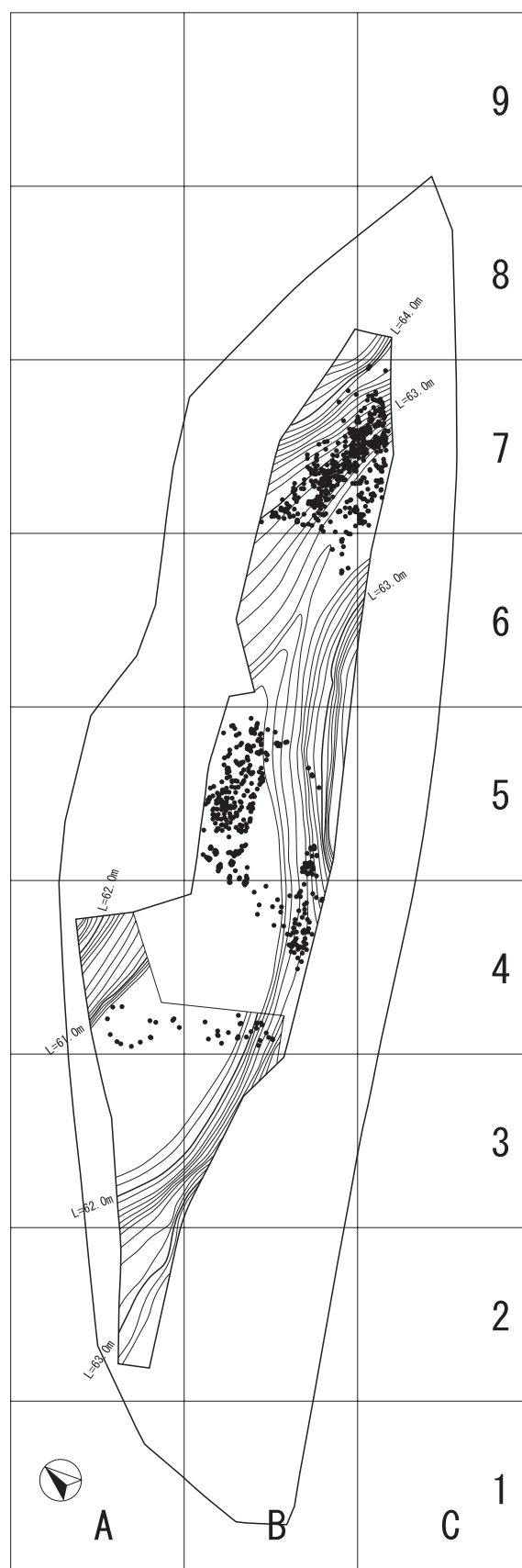
壺形土器は口縁部断面が蛇頭状を呈し、口縁直下からやや下気味のところに頸部のしまりがあり、胴部がやや張る器形を呈する無文の土器で、口縁部に飾り突起を持つものもみられる。深鉢形土器は、口縁部が蛇頭状から断面三角形を呈し口縁直下から胴部への張りがみられる土器の一群である。

Ⅵ類土器（第 20, 21 図 118 ～ 136）

壺形土器は口縁部がわずかに肥厚し、直立からやや外傾し肥厚部下端から胴部への張りがみられる器形を呈する無文の土器である。甕形土器は壺同様、口縁部がわずかに肥厚し、肥厚部下端から胴部への張りがみられるが、胴部の張りはわずかな無文の土器の一群である。

Ⅶ類土器（第 22, 23 図 137 ～ 154）

平口縁、波状口縁がみられる。器形は口縁部が微弱的な外反を呈し、胴部がわずかに張る。口縁部がわずかに肥厚帯を呈するが、肥厚部下端を強く意識した作りとなっており口縁部形成時に胴部との接合部でわずかに段を形成する無文



第7図 遺構出土状況

深鉢形土器の一群である。

Ⅶ類土器（第 24, 25 図 155 ～ 165）

平口縁，波状口縁がみられる。器形はⅦ類同様である。口縁部下に突帯が巡る無文深鉢形土器の一群である。

Ⅸ類土器（第 26 図 166 ～ 175）

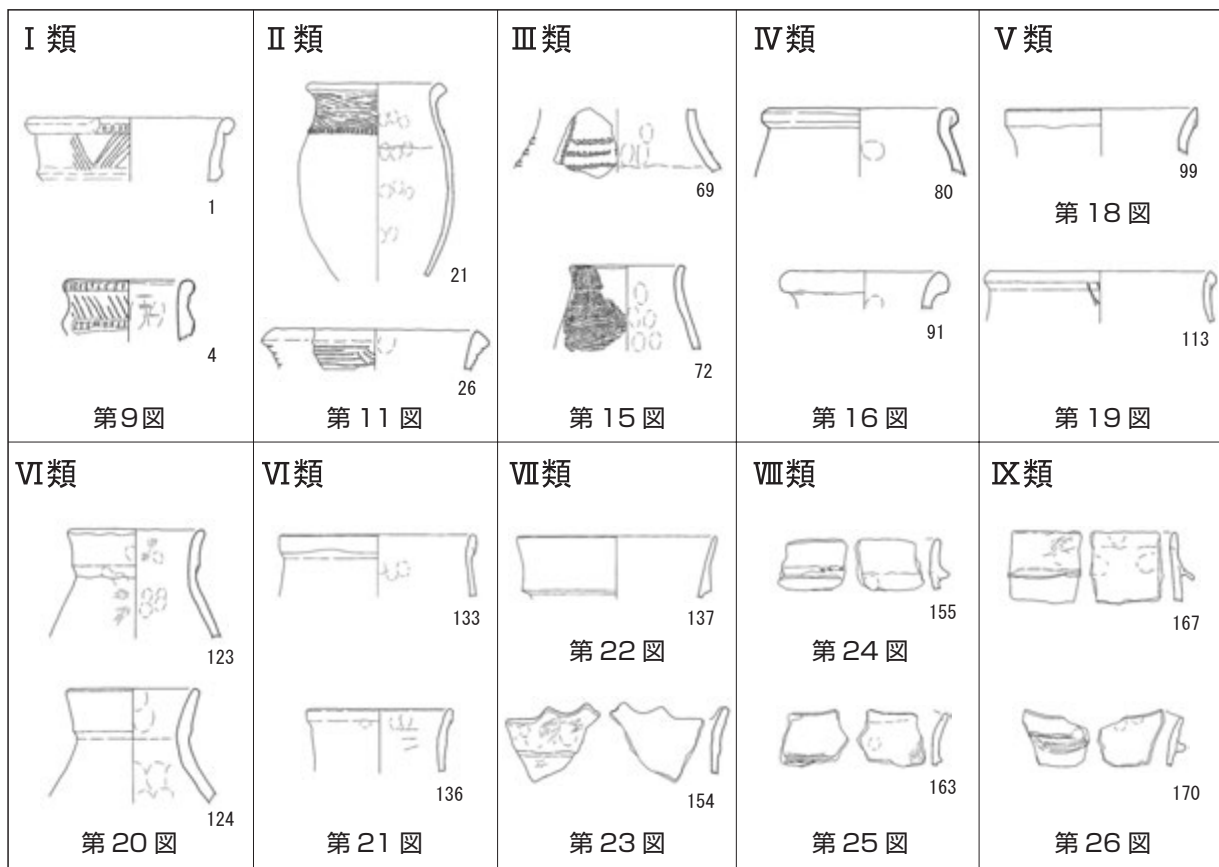
平口縁，波状口縁がみられる。器形は口縁がわずかに外傾するもの，内湾気味に立ち上がるものがあり，口縁部下に外耳を施す土器の一群である。

その他の土器（第 27 ～ 30 図 176 ～ 225）

穿孔を施す土器，底部片，前述の分類に当てはまらない少数出土の土器を一括した。

I 類土器

1 ～ 3 は深鉢形土器の口縁部である。1 はやや外傾しながら直口する。口縁部及び口縁下位に突帯を施し口縁部突帯には棒状工具で刺突し刻みを施す。文様は，突帯間に平行する 6 条の沈線で鋸歯文を施す。2 は口縁端部がわずかな突帯状を呈し，やや下位に器壁の厚くなる部分がある。両者には横方向からの棒状工具による連続刺突が 2 条巡る。3 は口縁部が肥厚し，そこに 2 条の連続刺突が施される。4, 5 は小型の壺形土器と思われる。4 は口縁端部とその下位に突帯が巡り，突帯上に刻みを

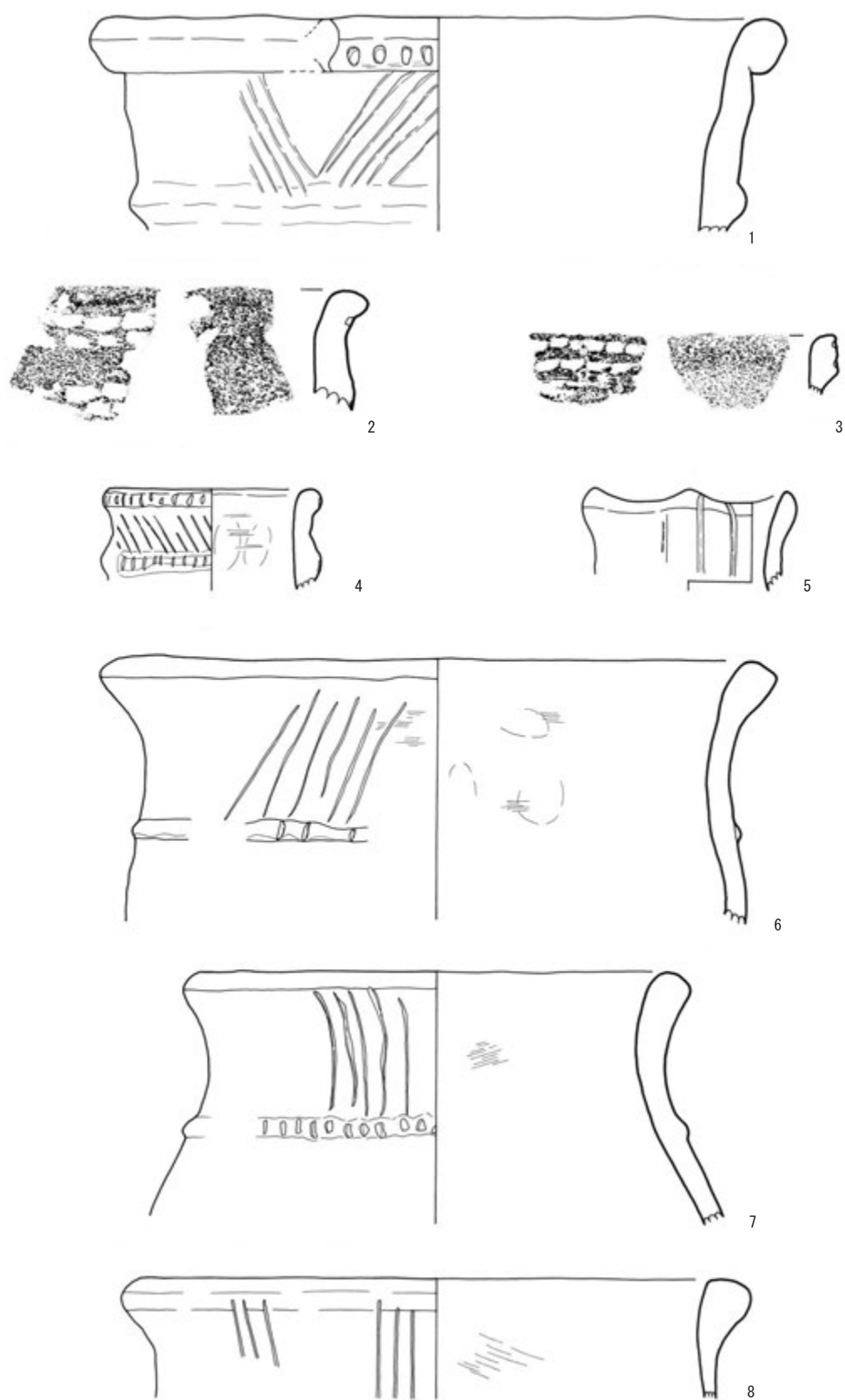


第 8 図 土器分類

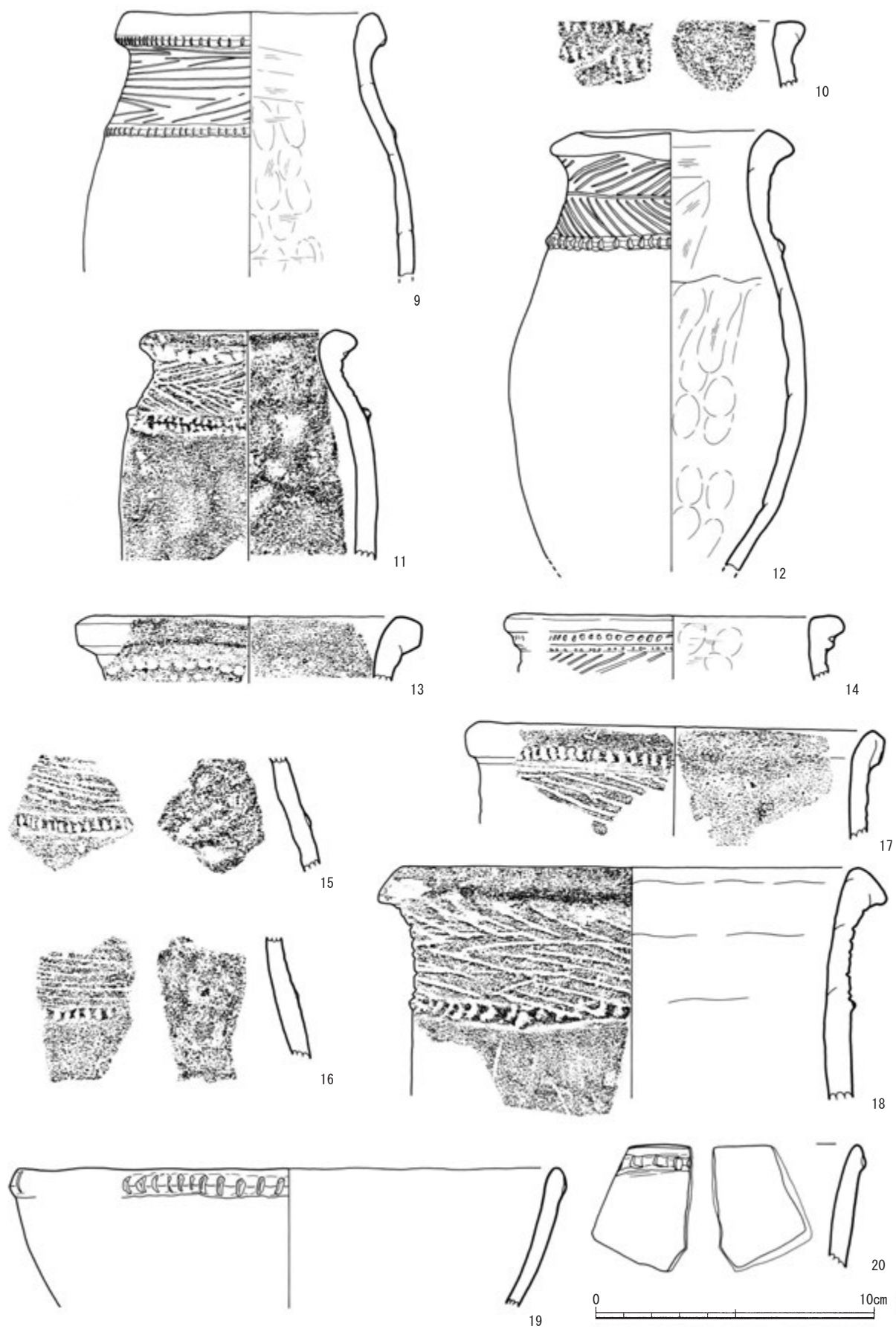
施す。突帯間には斜位の沈線を施す。5は波状口縁をなす。波頂部を中心に縦位の沈線を施す。6～8は口縁部を肥厚し口縁下位に突帯を巡らす。6は突帯に刻みを施し、肥厚部・突帯間に斜位の沈線を施す。突帯上部でわずかにくびれる甕と思われる。7は突帯に棒状工具先端による刻みを施し、突帯間に縦位の沈線を施す。頸部でくびれ胴部の張る壺形土器である。8は口縁部の肥厚に比べ、下位の器壁厚が非常に薄い。7同様、縦位の沈線が施される甕形土器と思われる。9～14は口縁部が肥厚し、頸部でくびれ胴部の張る器形の壺形土器である。9は肩部の突帯と口縁肥厚部下に刻みを施し、その間に斜位から横位の沈線を施す。頸部は緩やかなかくびれとなる。10は口唇端部と口縁肥厚部下に平行する刻みを施す。11は口縁肥厚部下に棒状工具先端による刻みを施し、肩部突帯には二叉状工具による連続刺突を施す。その間は横位の羽状文が施される。12は肩部の突帯に刻みが施され口縁肥厚部と突帯間に横位の有軸羽状文が施され、頸部は緩やかなかくびれである。13は口縁部に突帯を巡らし、突帯下位に二叉状工具による刺突文が巡る。14は口縁部突帯の直下にみみず腫れ状の突帯を巡らし二叉状工具により連続刺突を施す。その下位には斜位の沈線が施される。15, 16は壺肩部と思われる。突帯が巡り突帯上に刻みが施される。その上には横位から斜位の沈線が施される。17, 18は口縁部が肥厚し、胴部から口縁に向かいほぼ直口する甕形土器と思われ口縁部下に沈線が施される。17は口縁肥厚部下に刻みが施される。18は口縁部下の突帯に刻みが施される。19, 20は口縁部に突帯を巡らし、突帯上に刻みを施す鉢形土器で胎土が精製されている。

Ⅱ類土器

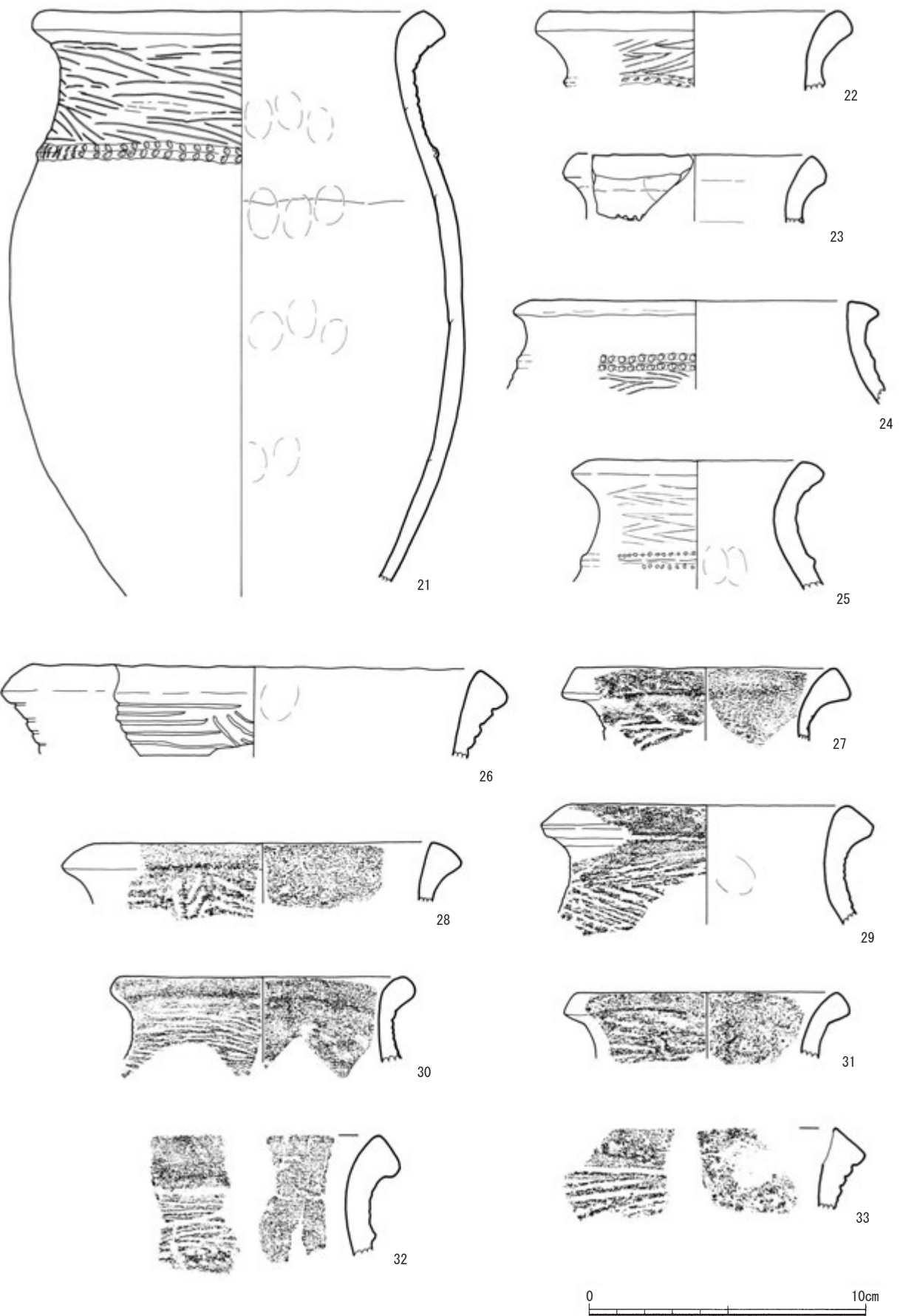
21～64は口縁部が肥厚し、肩部にみみず腫れ状の突帯が巡る。突帯には二叉状工具による連続刺突が施され、肥厚部・突帯間に沈線を施す壺形土器である。21は肩部みみず腫れ状突帯に二叉状工具による連続刺突を行う。文様は羽状を意識していると思われ、横位から斜位の沈線が施される。頸部はやや絞り気味のカーブをなす。22は頸部にみみず腫れ状突帯が巡り、二叉状工具による連続刺突が施され、文様は羽状文を上下に重複させる。23は頸部に刺突痕がわずかに確認できる。24は胴部から口縁に向かい内傾し頸部が短い、頸部下にみみず腫れ状突帯が付き、明瞭な二叉状工具による連続刺突が施される。突帯下に羽状の沈線が施される。25は頸部の屈曲がきつく、肩部みみず腫れ状突帯に二叉状工具による連続刺突、肥厚部・突帯間に羽状の沈線が上下に重複して施される。26～40は口縁部から頸部のみで口縁断面が三角形から蒲鉾状を呈し、口縁下位に沈線を施す壺形土器である。26は横位と斜位の沈線の組み合わせである。27は横位の沈線が施されその下は羽状の沈線が施されるものと推定される。頸部の屈曲が著しい。28は縦・横の羽状文の組み合わせが想定されるものである。29は上下に羽状文を重複させるものか、綾杉文の可能性のある文様構成である。30は口唇部が丸く収まる。文様は横位から斜位の沈線文である。31は口縁部肥厚の度合いが少ない。32はみみず腫れ状突帯に二叉状工具による連続刺突が施される。33は典型的な口縁部断面三角形の器形である。34, 35は口縁部断面形状が蒲鉾形となる。口縁下位には斜位の沈線が施される。36, 37は頸部のくびれがわずかで、そのまま胴部の張りへと続く。36は綾杉文、37は横位の沈線文が施される。38は口唇部がやや丸く収まるが内面に稜線を有する。39は口唇部を平坦に仕上げ、口縁部断面三角形を意識していると思われる。斜位の沈線が施される。40～42は口縁部断面三角形を意識はしているが肥厚の度合いが少ない。40は頸部が短い。綾杉状の沈線が施される。41は肩部にやや丸みを帯びた突帯が付き、二叉状工具による連続刺突が施される。42は全体的に器壁が薄い。肩部



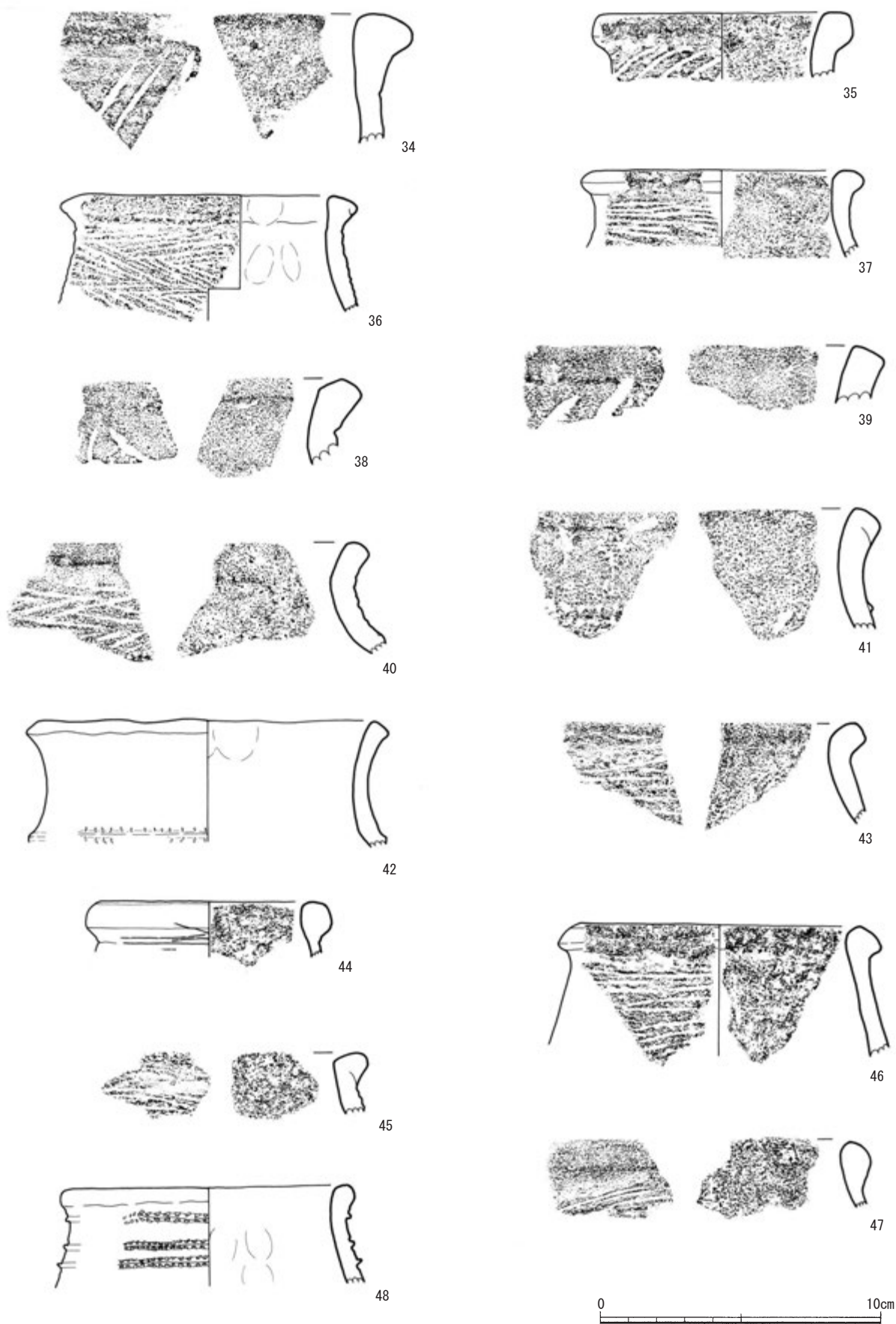
第9図 I類土器(1)



第10図 I類土器(2)



第11図 II類土器(1)

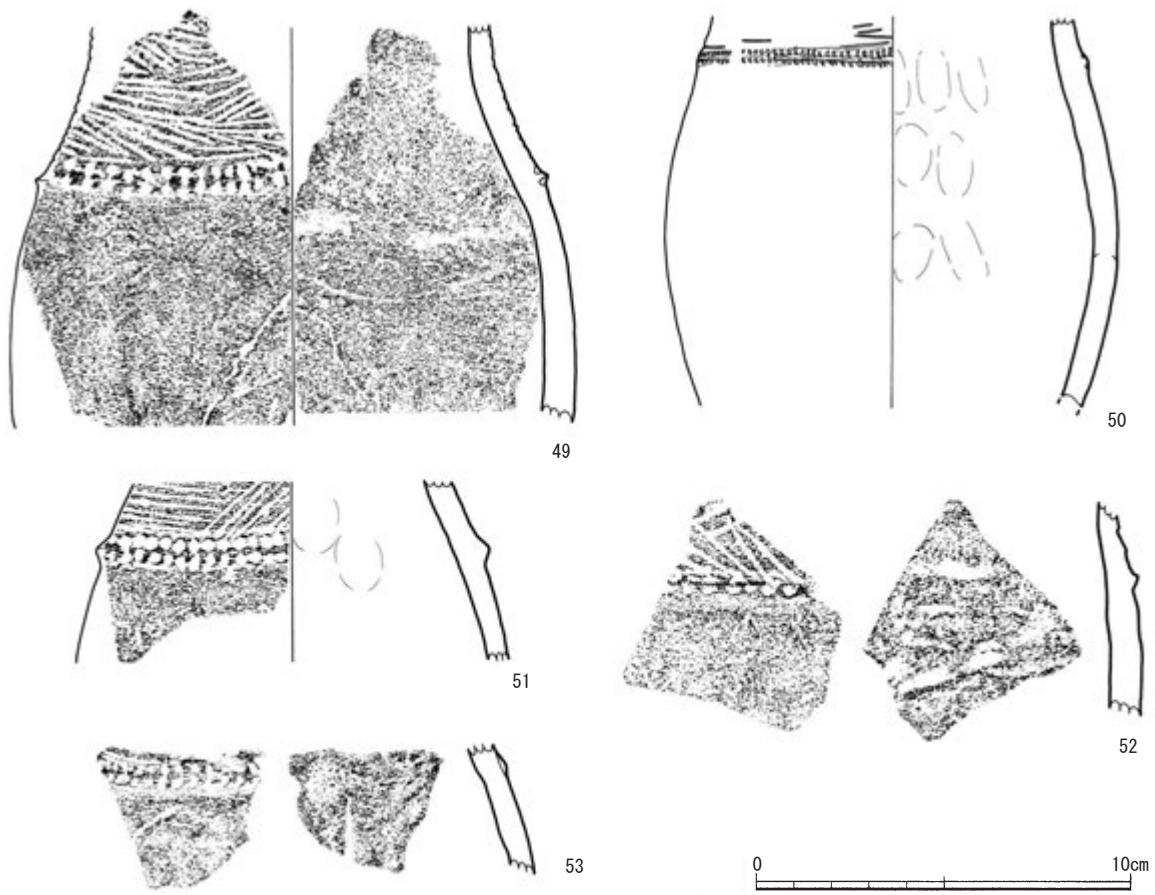


第 12 図 II 類土器 (2)

にみみず腫れ状突帯が付き、二又状工具による連続刺突が行われる。43～48は胴部から口縁に向かい内傾する器形である。43は口縁端部で強く屈曲する。屈曲下位に斜位もしくは綾杉の沈線が施される。44は口縁が蒲鉾状に肥厚する。器壁が非常に薄い。45は横位の沈線が施される。46は口縁部断面が蒲鉾状を呈し、横位の沈線が施される。47は口縁部断面蒲鉾状を呈し斜位の沈線が施される。器壁が非常に薄い。48は口縁部に3条のみみず腫れ状突帯が巡り、いずれにも二又状工具による連続刺突が施される。49～61は頸部から胴部にかけての破片である。49～58は肩部に突帯が巡り、二又状工具による連続刺突をおこなう。59～61は突帯が巡らず二又状工具による連続刺突、もしくは横位の沈線両側に短沈線を連続して施すものである。49は頸部立ち上がりが長いと考えられる。突帯上位に綾杉文が施される。50は突帯にかなり密な二又状工具による連続刺突が行われる。胴部があまり張らない。51は突帯上位に横位・斜位の沈線が組み合わさる。52は突帯上位に綾杉文が施され、頸部の器壁が薄くなる。胴部はほとんど張らないものと思われる。53はやや胴部の張る器形と思われる。54は突帯上下に沈線が確認できない。55は肩部に突帯が2条巡るが、沈線は確認できない。56の突帯は粘土紐の形状を保っている。突帯上位の斜位の沈線は針先で描かれたような鋭さをもっている。胴部から頸部へはほぼ直線的に内傾する。57は胴部が張る。肩部から頸部に向け2条の突帯が巡るが沈線は施されない。58は肩部に突帯が巡り、突帯上下に上下方向の短沈線が連続して施される。頸部方向には沈線文はみられない。頸部が非常に長く伸びると思われる。59は胴部がほとんど張らない器形で肩部に突帯を伴わない二又状工具による連続刺突が巡る。60は肩部に二又状工具による連続刺突が2条巡り、その間に羽状文が施される。胴部はかなり張ると思われる。61は肩部に2条の沈線が巡り上位の沈線の上下には右下がりの短沈線が連続して施され、下位の沈線の上下には羽状に短沈線が施される。62～64は甕形土器と思われるものである。62は口縁端部に粘土を貼り付け断面が如意状になる。胴部は口縁部より張ることはない胴部突帯には二又状工具による連続刺突が施され、口縁・突帯間は斜位の沈線が組み合わさる。63は胴部が口縁より張ることはないと思われる。口縁部形態は62に似る。口縁・突帯間には横位と、縦位から斜位の沈線が組み合わさる。64は胴部片で突帯に施される連続刺突は他と比較し深くて明瞭である。

Ⅲ類

65～78は壺形土器である。65～70は縦横に粘土紐を貼り付けるものである。65は口縁部で屈曲し外傾する器形で、口唇部へ向かい先細りとなる。屈曲部から下位に粘土紐を貼り付け微隆帯とする、わずかに二又状工具による連続刺突が観察できる。66は口縁部を肥厚させ断面三角形気味である。口唇下位から3条の平たい微隆帯を縦位に施し、微隆帯両側を串状の工具で連続刺突する。また微隆帯間には縦位の短沈線が連続して施され、微隆帯外側には横位の沈線が施されていると思われる。67は肩部で横位に3条、縦位に1条の微隆帯が確認でき、いずれにも二又状工具による連続刺突が施される。68は肩部で横位に2条、縦位に1条の微隆帯が確認できる。隆帯上には刻みが施され、微隆帯間に横位・斜位の沈線が施される。胴部はあまり張らない。69は頸部片で1条の縦位の微隆帯から3条の横位の微隆帯が伸びる。いずれの隆帯にも二又状工具による連続刺突が施されるが、沈線文は描かれない。胴部がかなり張るものと思われる。70は縦位の微隆帯の一部が確認でき、そこから横位の微隆帯が2条伸びる。平行する串状工具による連続刺突から縦位の微隆帯がもう1本あることが予測される。また、縦位・横位の沈線も施される。71は胴部のかなり張る器形である。縦位の沈

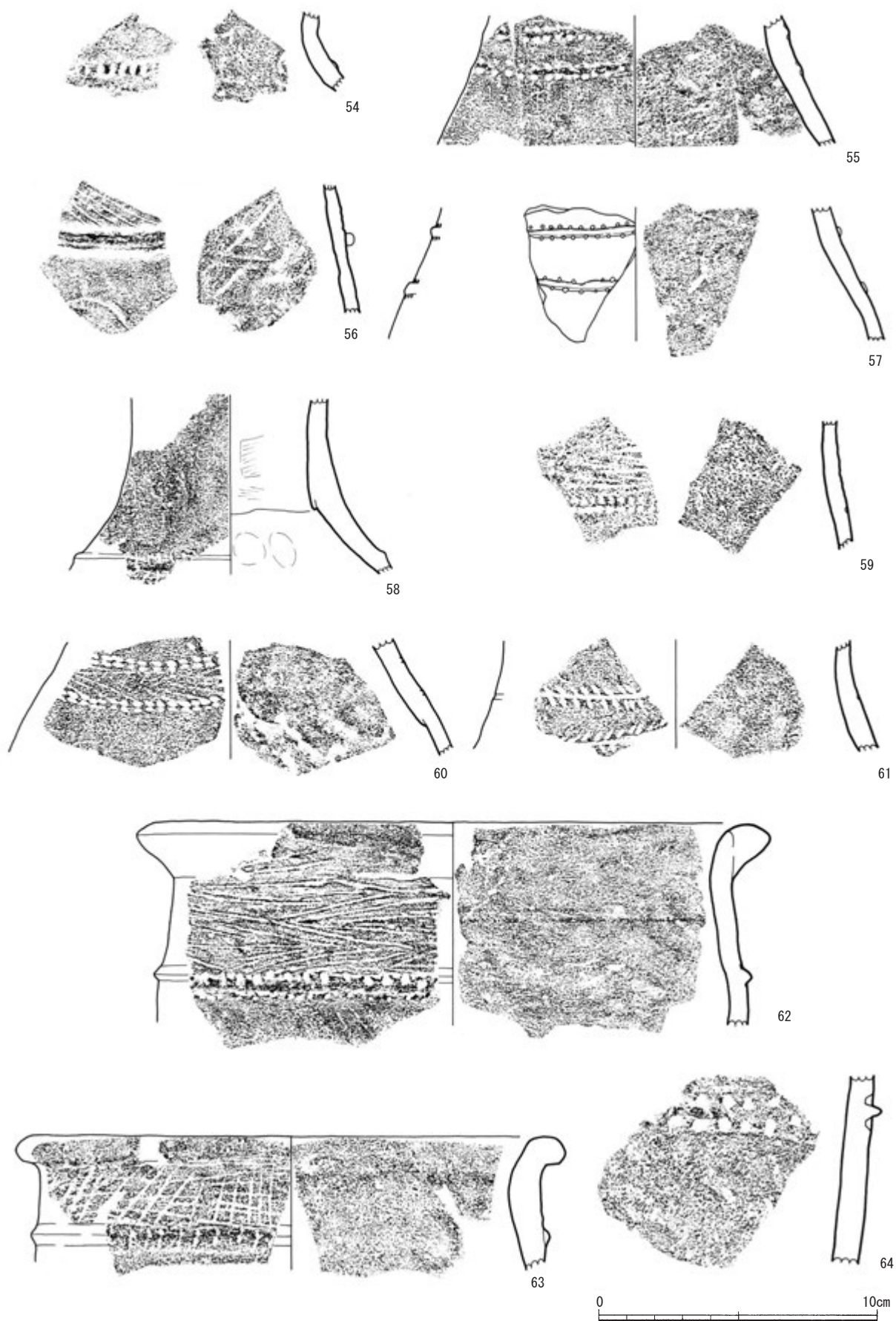


第 13 図 II 類土器 (3)

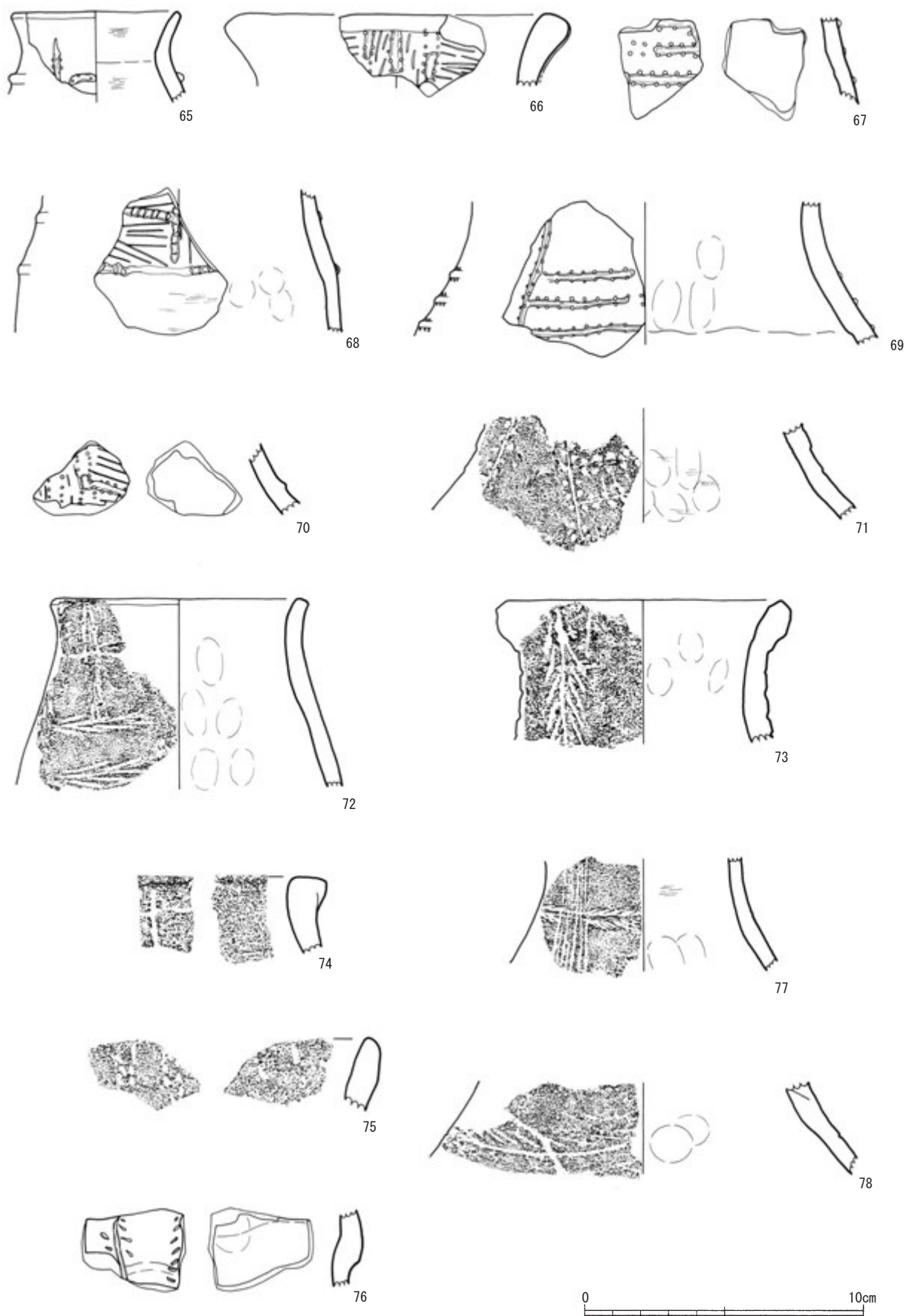
線から横位の沈線が伸び、いずれも両側に二又状工具による連続刺突が施される。刺突間に微隆帯が残る部分が確認でき、本来、沈線部分に微隆帯が貼り付けられていたものと考えられる。72～78は沈線文だけで構成される。72は胴部から内傾し口縁部でわずかに外反する器形をなす。胴部に2条の有軸羽状文を巡らす。また口唇直下から縦位に若干ハの字気味の短沈線が連続して施され、上位の有軸羽状文とつながる。73は頸部がやや伸びる口縁部で外反する器形で、口縁部をわずかに肥厚させる。縦位の有軸羽状文が施される。74は口縁部をわずかに断面三角形に肥厚させ、口唇直下から縦位の沈線が施される。75は壺口縁突起部分の可能性がある。口唇下位から、串状工具による対になった連続刺突が2条、縦位に施される。76は口縁部が肥厚し蛇頭状をなす。口唇直下から縦位に施される2条の沈線の両側に、右下がりの短沈線と左下がりの短沈線が連続して施される。77, 78は頸部片である。77は6から7条の細沈線が縦位に施され、それに直交して2条の細沈線を施し、その上下に羽状に短沈線を施している。78は胴部のかなり張る器形と考えられる。肩部に横位の2条の沈線を施し、その上下に右下がりの短沈線を連続して施す。

IV類

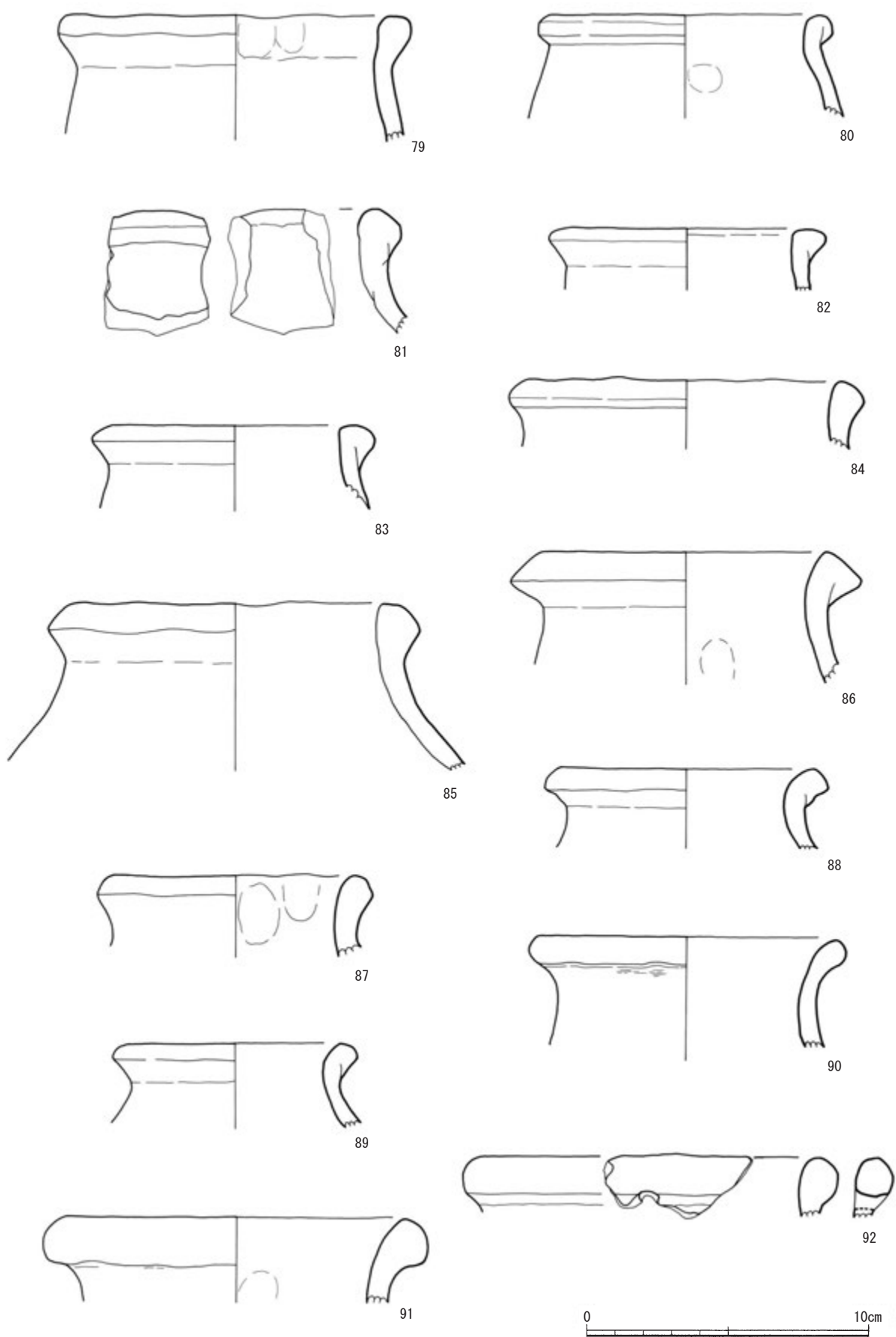
79～95は無文の壺形土器で、口縁部が肥厚し断面蒲鉾状を呈する。79は肥厚部下位からすぐ胴部へと張る。80は器形は79同様で器壁が薄い。81は胴部がかなり張ると思われる。口縁肥厚もぼって



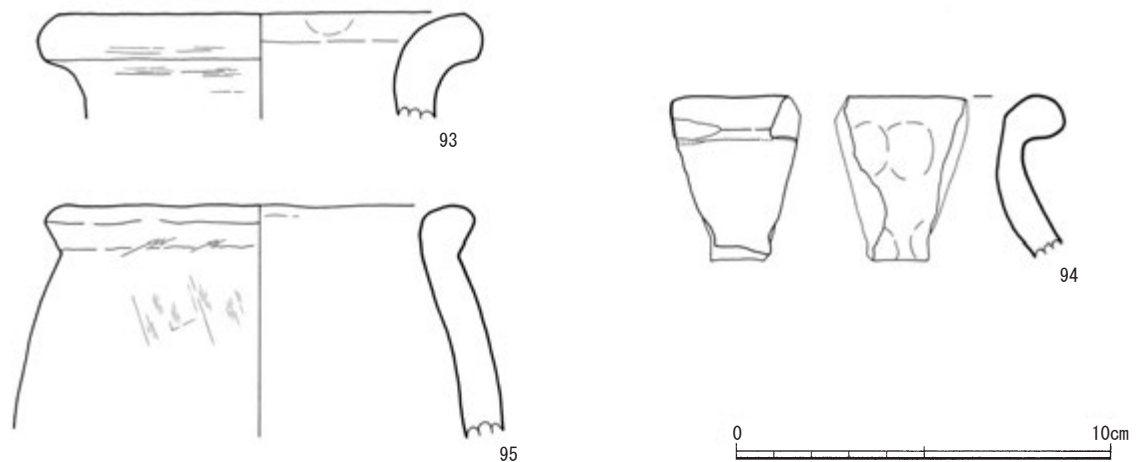
第 14 図 II 類土器 (4)



第 15 図 Ⅲ類土器



第 16 図 IV類土器 (1)



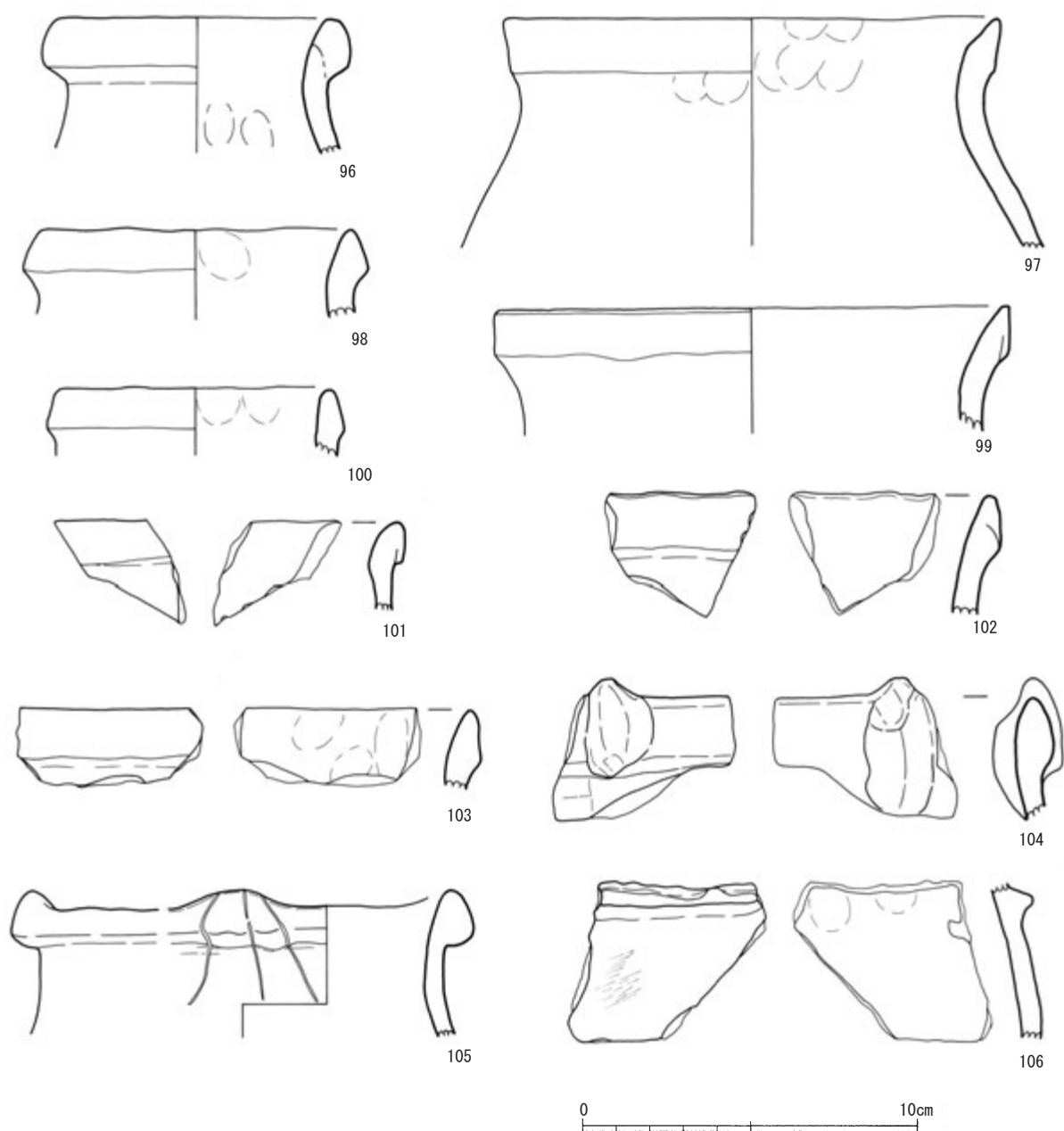
第 17 図 IV類土器 (2)

り感がある。82, 83 は器壁が薄い。84 は口縁部の肥厚がわずかで若干ふくらむ程度である。85 は、口縁部が肥厚し、口縁部断面が蒲鉾状を呈する。肥厚部直下から強い張りをもつ胴部へと広がる。86 は口縁部が断面三角形に大きく肥厚する。肥厚部に比して器壁は薄い。87 は口縁部の肥厚は少ない。88, 89 は口縁部の外反が著しく、器壁が薄い。90 は肩部から頸部の立ち上がりが他より長い。91 は口縁端部が蒲鉾状に肥厚しやや長めの頸部を形成する。92 は内外両面からの穿孔による補修孔が穿たれる。93 は器壁が厚く口縁部できつく外反する。94 は口縁肥厚部が逆 L 字に折れ曲がり、そこから大きく胴部へと張る。95 は胴部から緩やかに内湾気味に立ち上がり、口縁部を断面三角形にわずかに肥厚させる。

V類

96 ～ 106 は壺形の口唇部が尖り気味で、口縁部肥厚が小さく、最大肥厚部の位置がやや下にある蛇頭状を呈する無文の土器である。96 はやや肥厚が強い。97 は指押さえにより鋭角な口唇部をなす。口縁肥厚部に明瞭な稜線を残す。胴部の大きく張る器形となる。98, 99 は 97 同様であるが、98 は胴部の形状は不明である。99 は頸部がやや長くなる。100 は直立気味の口縁である。101 は肥厚部の段差が明瞭で直立気味の器形である。102 は口縁肥厚部がやや下まで下がり、口縁はわずかに外傾し外反する。103 は 99 と同様である。104 は緩い蛇頭状の口縁に、内面から外面にかけ粘土を貼り付け飾り突起とする。105 は器壁が薄い。口唇部を一部隆起させ波状とするものと考えられる。外面に波頂部から放射状に 3 条の沈線を施す。106 は突帯が巡る壺の胴部と思われる。突帯に刺突がなく、沈線も確認できないことから V 類とした。

107 ～ 117 は甕形と思われる無文の土器である。107 は口縁部肥厚が大きく断面三角形となる。器壁はやや薄めである。108 は口唇部が平坦で断面三角形を強く意識した形状である。109 は口縁肥厚部に焼成前から穿孔を施す。器壁は薄い。110 は口縁断面三角形を呈するが口唇はやや丸みを帯びている。111 は口縁部の最大肥厚部が下に垂れる断面三角形を呈する。壺の可能性も考えられる。112

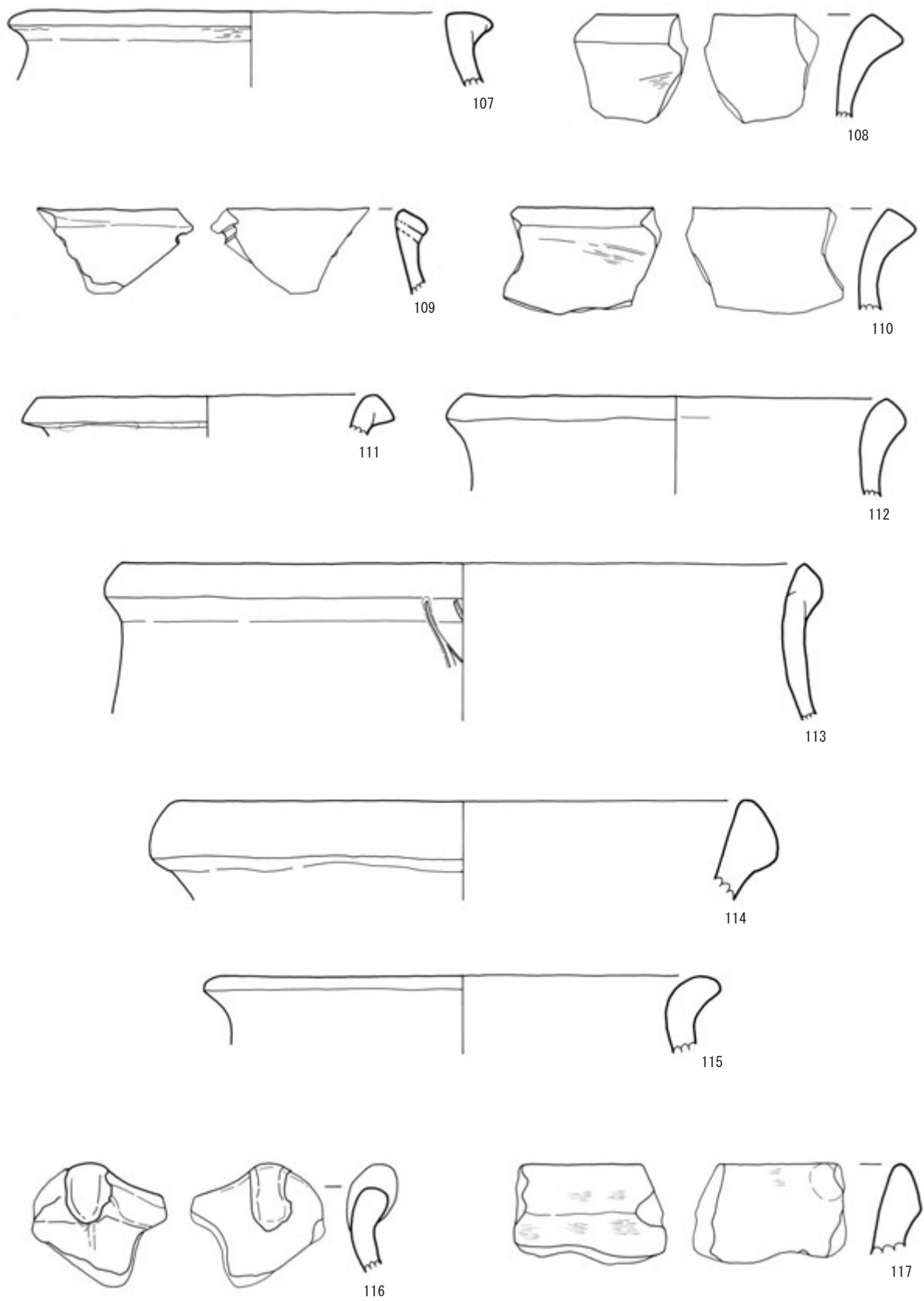


第 18 図 V類土器 (1)

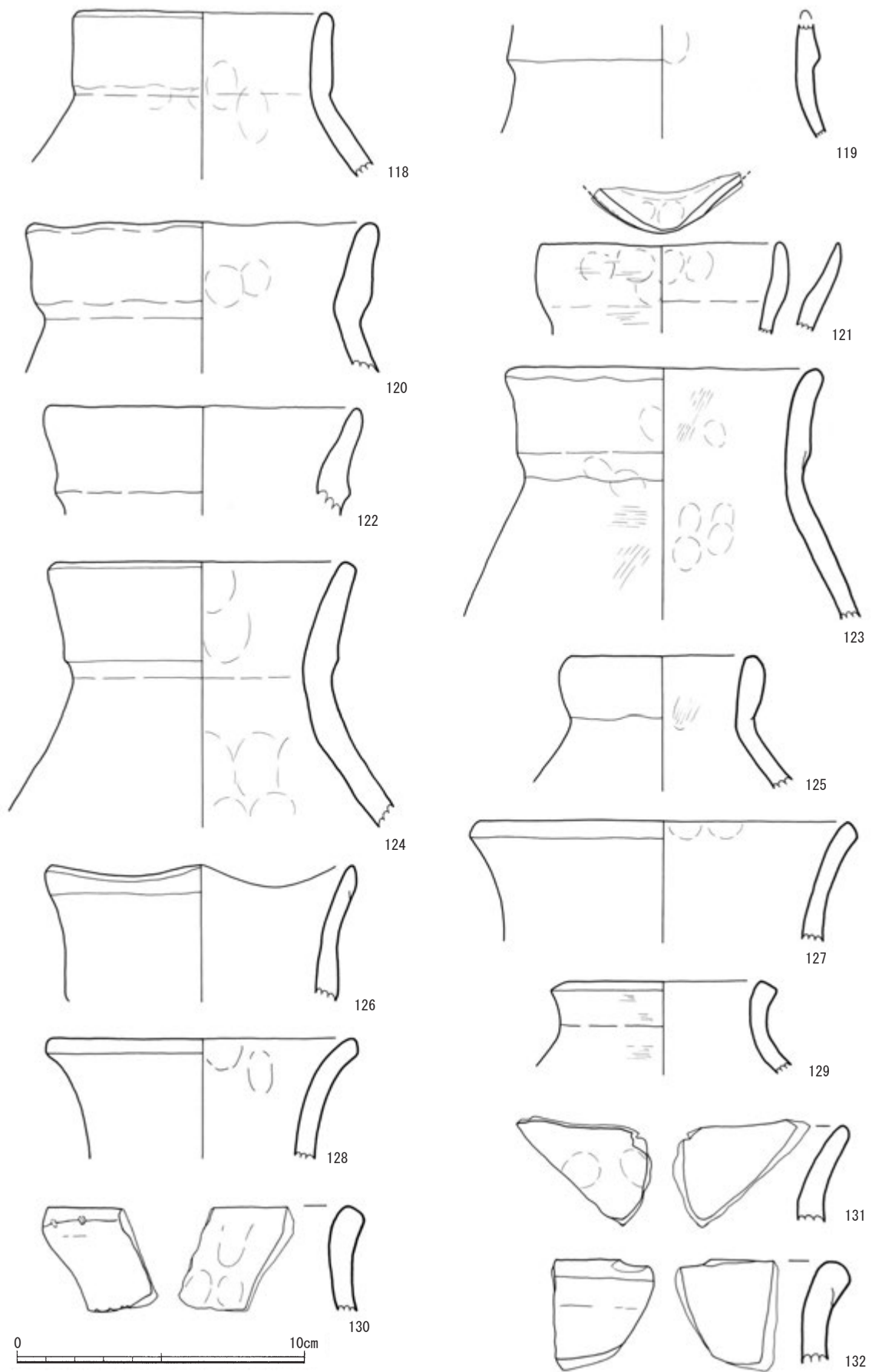
は口縁肥厚部断面三角形の稜線の意識が薄れ丸みを帯びている。113 は 112 同様の口縁で、胴部器壁が薄い、わずかに胴部が張る器形と思われる。114 は器面の摩滅が著しい。口縁部断面は鈍い断面三角形と捉え、最大肥厚部が下に垂れるものと判断した。115 は口縁部が急に外反し、口唇部はやや丸めに収まる。116 は 112 同様の口縁部形態で、口唇部を内外面から包み込むように飾り突起が貼り付けられる。117 は断面形状が蛇頭状となる。想定される口径が大きいため甕とした。

VI類

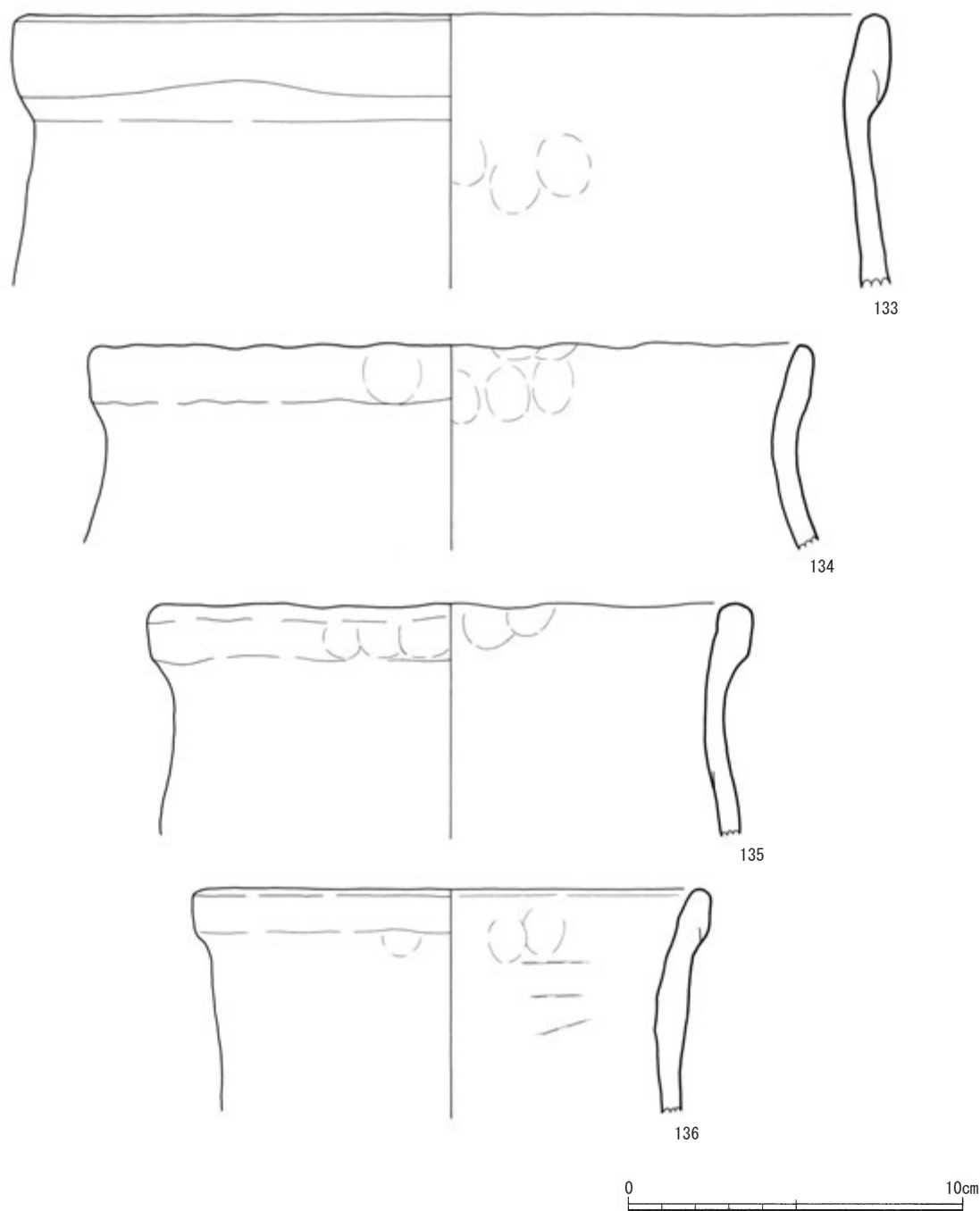
118 ～ 132 は壺形で無文の土器である。118 ～ 125 は口縁部をわずかに肥厚させ、直立から若干外傾する口縁をもち、肥厚部下端から胴部へと張っていく器形である。118 は口縁部が直立し、胴部へ



第 19 図 V類土器 (2)



第20図 VI類土器(1)



第21図 VI類土器(2)

の張りが大きい。119は胴部から内傾し、屈曲部をもたず口縁となる器形である。器壁が薄い。120は口縁肥厚部下端から外傾する口縁をもち、強い屈曲を示す。121は口縁肥厚がわずかで、口唇部をつまみ注ぎ口状とする。頸部の最狭小部は肥厚部のやや下になると思われる。122は120同様の形状を呈する。123は118とほぼ同形状を呈するが、口縁端部がわずかに外反する。124は120同様の形状を示すが、屈曲が緩やかである。125は118同様の形状を呈するが、口縁肥厚部が丸みを帯びている。126～132は口縁が肥厚せず外反する口縁である。126は波状口縁を呈する。127、128は頸部から口

縁まではほぼ同様の厚さで外反する。129 は頸部から口縁まではほぼ同様の厚さで外反するが、口縁部の立ち上がりが短い。130 は 129 同様であるが、胴部の張りが少ない。131, 132 は同様に外反する口縁であるが、131 は口唇部へ向かい先細る。132 は器壁がやや厚い。

133 ～ 136 は口縁部が肥厚し、わずかに外反する器形の甕形土器である。133 はわずかに胴部が張る。134 は 133 より胴部が張る。135 は口縁肥厚部断面が、やや角形の形状を呈する。136 は胴部が直線的で張らない。

Ⅶ類

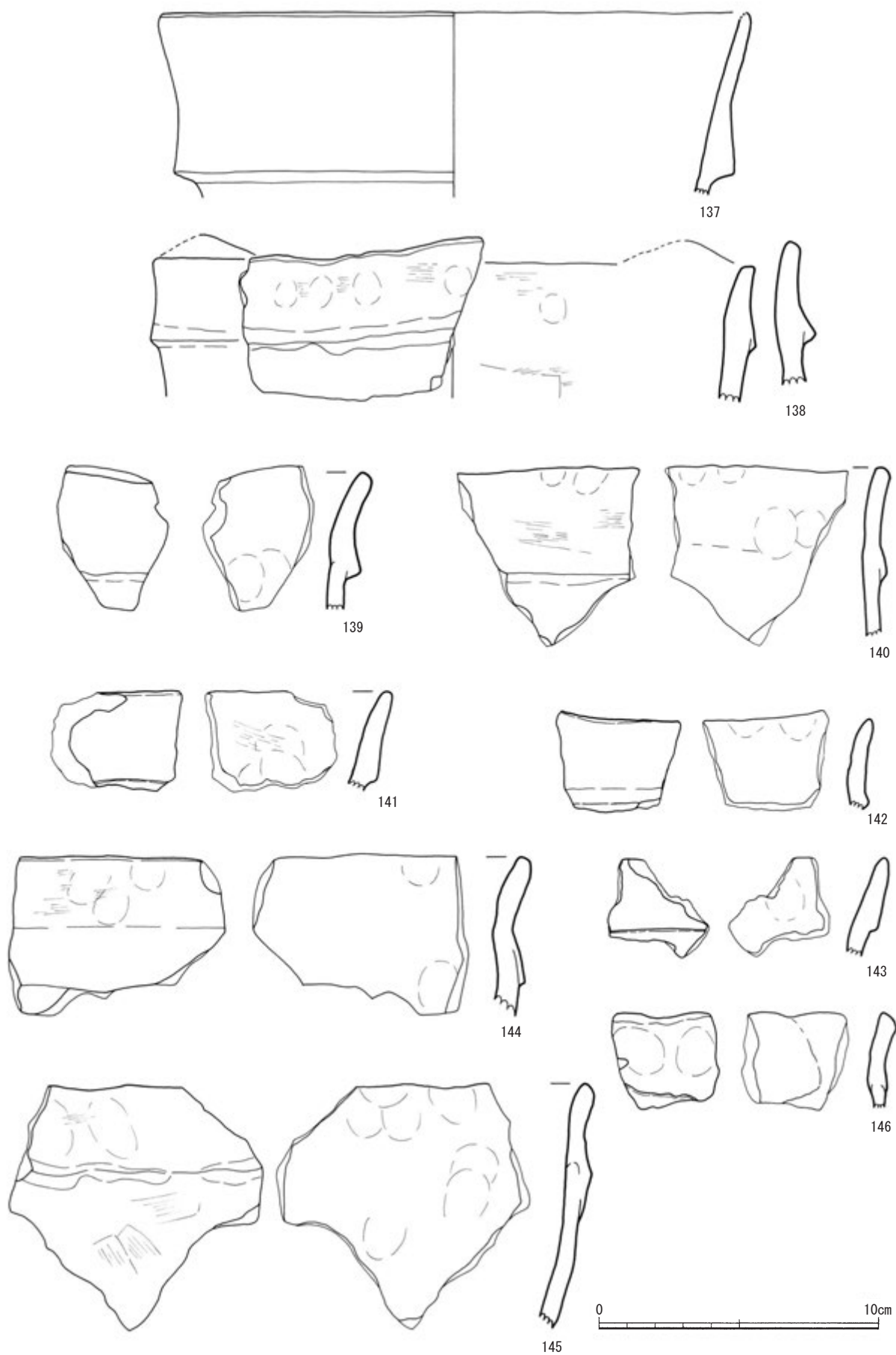
137 ～ 154 は深鉢形土器の口縁部で、口縁のやや下がった部分に断面三角形の肥厚帯を作り、口縁部肥厚帯が間延びした印象を受ける断面形を呈する。137 は外傾する口縁部で、肥厚帯が明瞭な断面三角形を呈し、器壁は総体的に薄い。138 は口縁部がやや外反し、波状を呈する。波頂部は 3 か所であろうと思われる。139 は口縁が外反し、波状口縁の可能性も考えられる。140 はわずかに外反し、肥厚部はわずかとなる。141 は 137 同様の器形を呈するが、肥厚部がわずかとなる。142 は 139 と同様の器形を呈するが器壁が薄く、肥厚部もわずかである。143 は 141 と同様の形状である。144 は外反する形状で、肥厚部が胴部に下がった印象を与えるものである。145 は内湾気味に立ち上がる。146 はわずかに外反する形状で、肥厚部はなく粘土継ぎ足しの痕跡を残すのみである。147 は胴部から内湾気味に立ち上がり口縁端部でわずかに外反する。ほとんど肥厚はさせないが段差を有する。148 は胴部が外傾し肥厚部で屈曲し口縁部は直立する。肥厚部はやや厚めである。149 はほぼ直立し明瞭な稜線をもつ肥厚部となる。口唇に山状の飾り突起が付く。150 は口縁端部がわずかに外反し、肥厚部もごくわずかである。波状口縁の可能性も考えられる。151 は器壁がやや厚い。3 波 1 対の飾り突起部と思われる。152 は 151 同様の飾り突起部と思われる。153 は 2 波 1 対の飾り突起部を含む口縁部片である。飾り部分のみ赤みの強い胎土の異なる粘土で形成される。154 は 3 波 1 対となる飾り突起を施すと思われる。

Ⅷ類

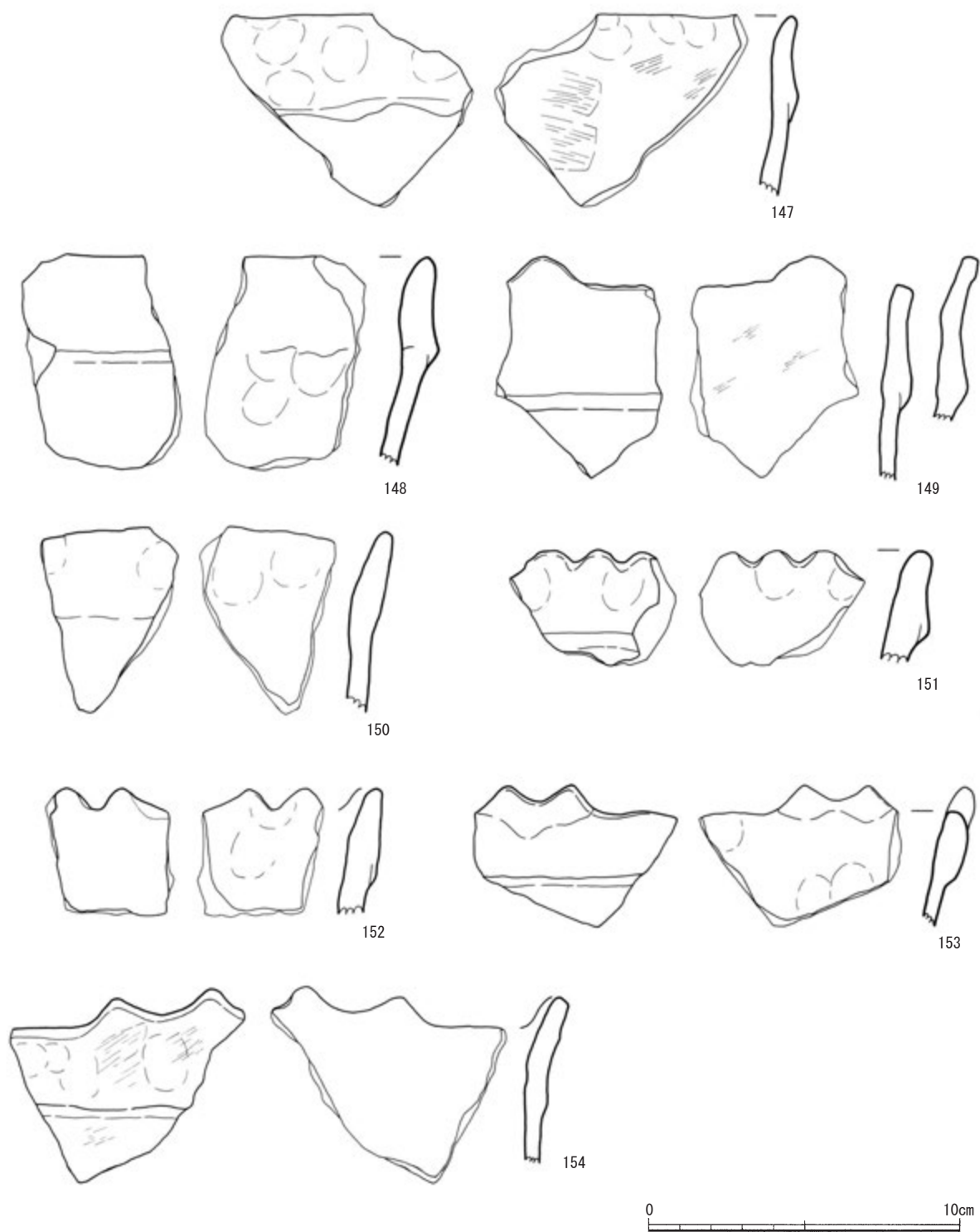
155 ～ 162 は平口縁の深鉢形土器で、口縁下位に高さのある突帯を巡らす。155 は胴部がわずかに張る。突帯は突帯高と比較し口唇にかなり近い位置に巡る。156 は口縁端部方向にも厚さを残す突帯が巡る。157 も 155 同様、高位置に突帯が巡る。158 の突帯はややⅦ類土器のものに近い。159 は幅の狭い鋭利な突帯が巡る。160 ～ 162 は口縁端部からやや下がった位置に突帯が巡る。162 は口縁が内傾する。163 ～ 165 は波状口縁を呈すると思われるものである。163 の突帯は突帯高と比較し、口唇からかなり下がった位置に突帯が巡る。164 は突帯下位と比較し、突帯上位がわずかに器壁が厚くなる。165 は口縁端部の一部が指押さえにより歪んでおり、波状もしくは注ぎ口状を呈すると思われる。

Ⅸ類

166 ～ 175 は耳状突起が付く深鉢である。166 は耳状突起の上位でわずかに肥厚部をもつⅦ類に近いプロポーションをもつ。167 はやや内傾する口縁部で耳状突起は下がり気味に付けられる。168 は 2 波 1 対の飾り突起をもち、突起下部に耳状突起が付く。169 は耳状突起下位に凹みが認められる。170 は波状口縁となり、耳状突起はやや上向きに付く。171, 172, 173 は胴部片で、171 は逆 U 字状の耳状突起がやや下向きに付く。172 はシャープさに欠ける耳状突起である。173 は耳状突起の上を



第 22 図 VII類土器 (1)



第23図 VII類土器(2)

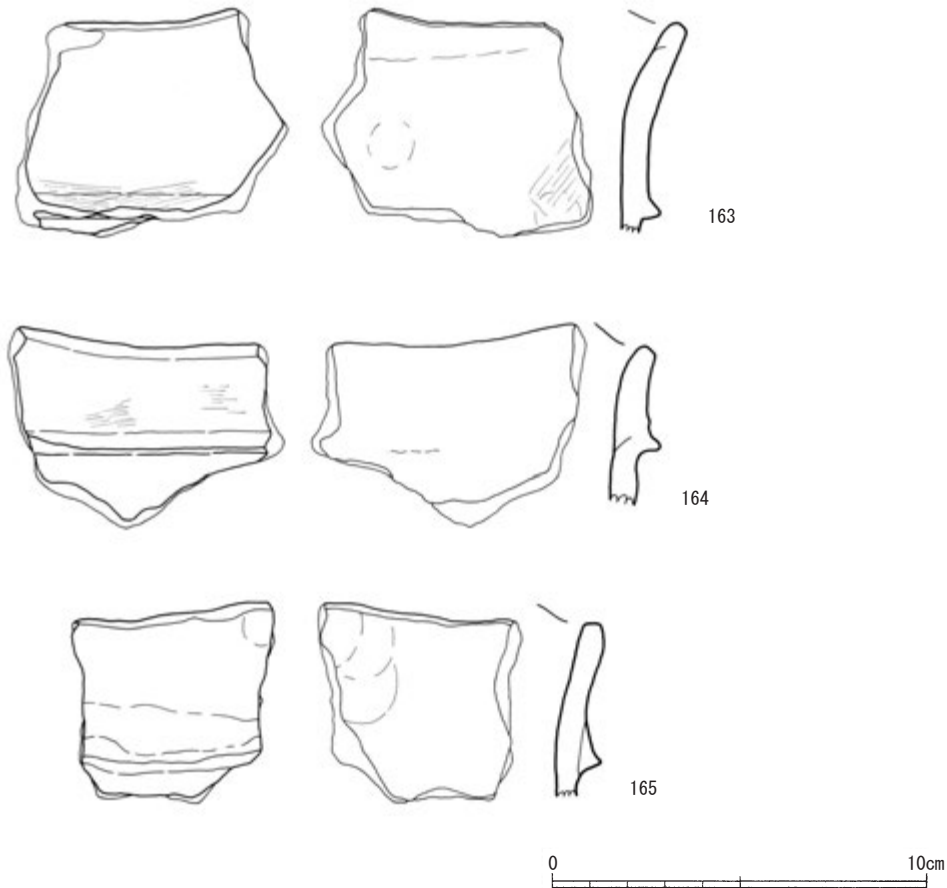
やや肥厚させ，そこに細沈線で2重楕円文が描かれる。174はやや内傾する器形で，波状口縁波頂部にあたる。波頂部から少し下がった位置から，口唇部に沿って沈線が施され，沈線の直下に刻みを施した微隆帯が施される。耳状突起は168同様，波頂部下位に付く。175はつまみ状突起の突起部分のみである。



第 24 図 VIII類土器 (1)

補修孔を有する土器

176 ～ 178 は穿孔を有する土器片である。176 は口縁部片で、外面から焼成後穿孔を施す。177 は波状を呈すると思われる深鉢の口縁部で、口縁下位でやや肥厚するⅦ類と思われる。176 同様、焼成後外面から穿孔を行う。178 もⅦ類と思われる口縁部で、外面から穿孔を施そうと試みた凹みが確認できる。



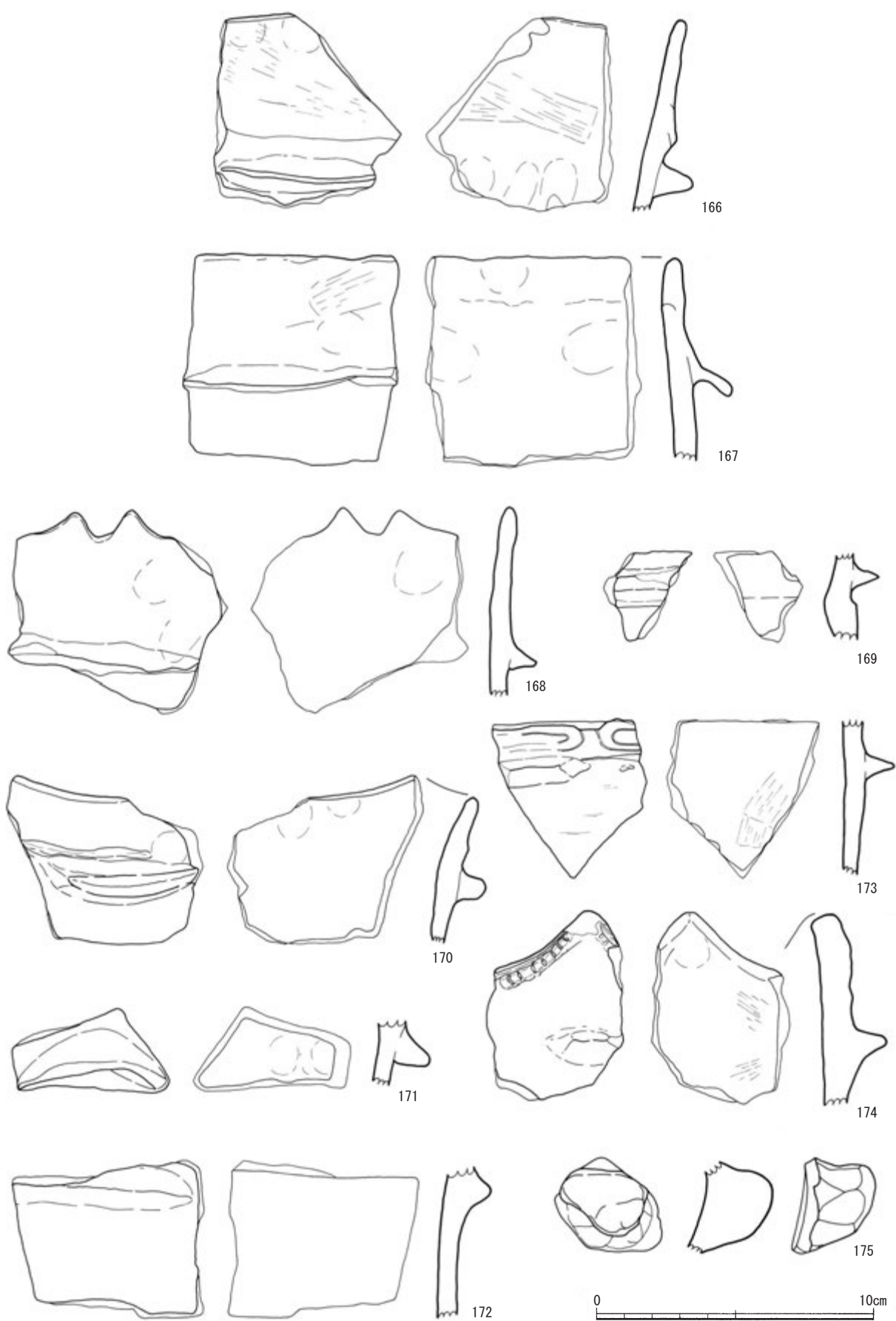
第 25 図 VII類土器 (2)

底部片

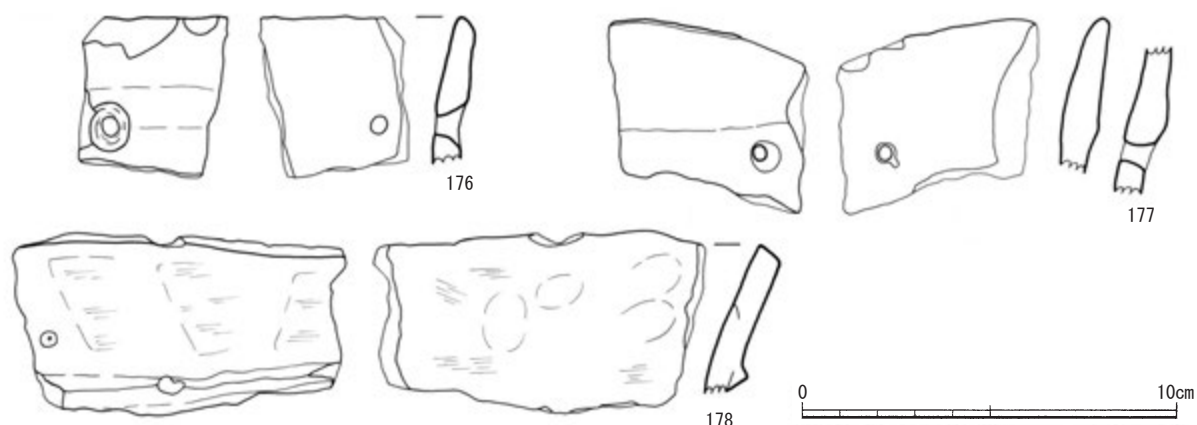
179～219 は底部片である。179～184 は尖底の土器である。179 は胴部への立ち上がりが急である。180 は底の尖りが鈍い。胴部への立ち上がりは緩く胴が張ると思われる。181 は 179 同様の器形でやや器壁が薄い。182 は胴部立ち上がりが緩く、器壁が薄い。183 は胴部への立ち上がりが極端に緩い。184 は 182 に似るが、底の尖りが鈍い。

185～194 は底部がやや突出し、底がわずかにカーブをえがく平底気味の底部である。185 は底部胴部の境界付近が薄く、胴部に向かって器壁が厚くなる。186 は 185 と同様の形状である。187 は平底に近く胴部厚に比して底部が厚い。188 は胴部立ち上がりが急でスリムな器形となる。底部の突出がかなり意識され、高台状になる。189 は底部突出の度合いが少ない。190, 191 は胴部器壁が薄く、特に 191 は薄くなる。192 は底部が瘤状になる。193, 194 は 191 同様の形状を呈すると思われる。

195～206 は底部突出がみられない丸からやや平底の底部で、胴部への立ち上がりが緩やかで胴部の張る器形と思われるものである。195 は胴部立ち上がりが急でスリムな形状になると思われる。196 は小さな平底部がみられる。197 は底部、胴部器壁ともに厚めである。198 は丸底を呈する。199 はやや底部が突出する小さな平底を呈する。200 はやや平底の小さな底部で胴部器壁が薄い。201 は丸底の底部で胴部から底部まで、ほとんど器壁厚に変わりが無い。202 は 199 と同様の器形で、底部厚が厚くならない。203, 204 は底部分のみの破片で器形は不明である。205 は 199 と同様であるが、



第26図 IX類土器



第 27 図 補修孔を有する土器

胴部器壁が厚い。206 はやや丸底となる。胴部器壁が非常に薄い。

207 ～ 214 は平底で胴部が直線的に立ち上がるものである。207 は胴部立ち上がりが鈍い。208 ～ 210 は底部径がやや小さく胴部が急に立ち上がる器形である。211 ～ 213 は底部径のやや大きいもので胴部の立ち上がりはやや緩い。214 の胴部は内湾気味に緩く立ち上がる。

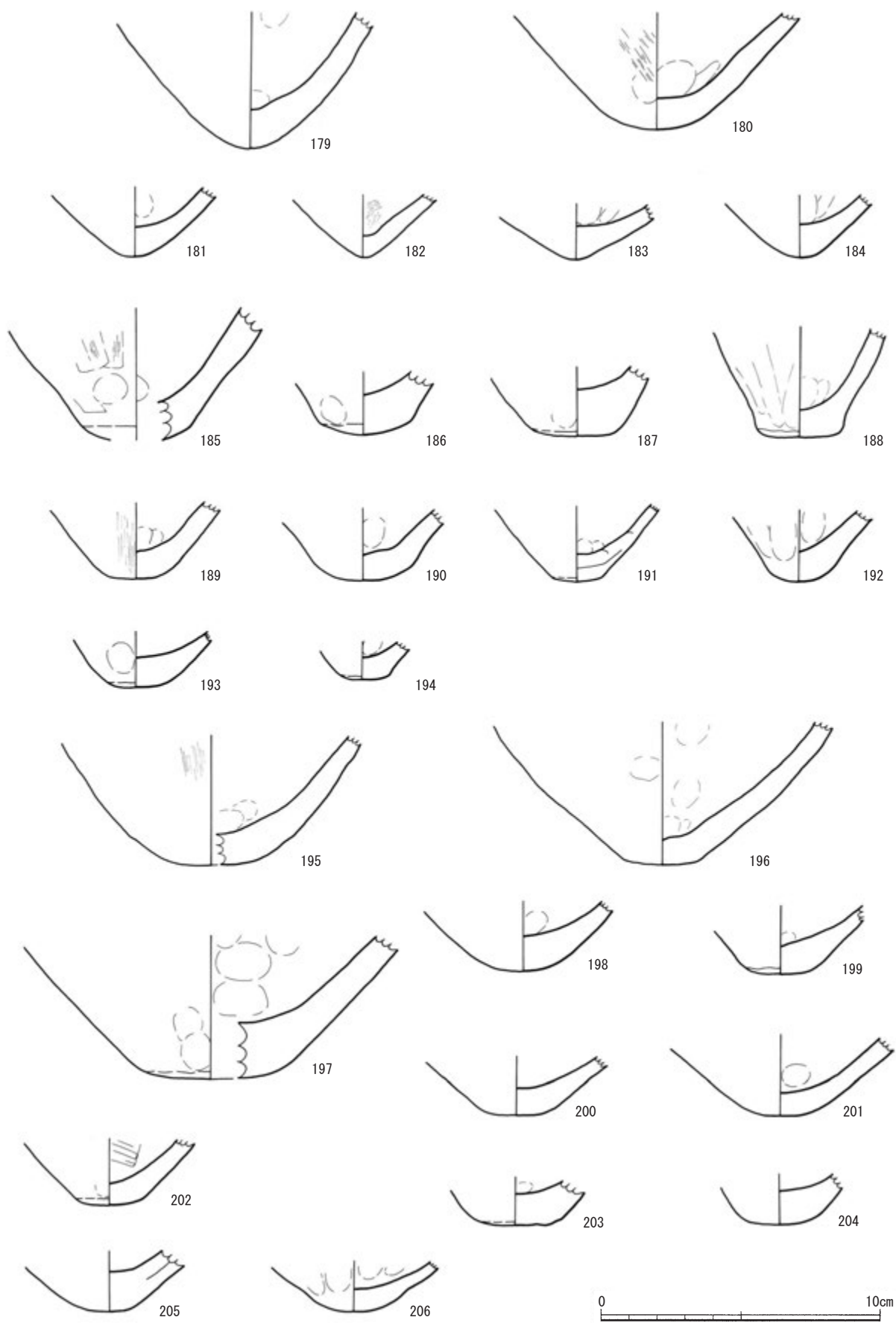
215 ～ 219 は高台、脚を有する底部である。215 は平底の底部に低い高台が付く。高台部分に 2 個 1 対、対称的な位置に穿孔が施され、高台部内面には紐づれのような痕跡が残る。216 は底部が脚台状に広がる器形で、底部付け根付近から内面に径 2 mm 程の穿孔がみられるが人為的なものかは不明である。217 は平底の底部にぼってりした幅広の高台が付く。218, 219 は先端が先細りする外開きの脚をもつ。器壁は薄い。

その他の土器

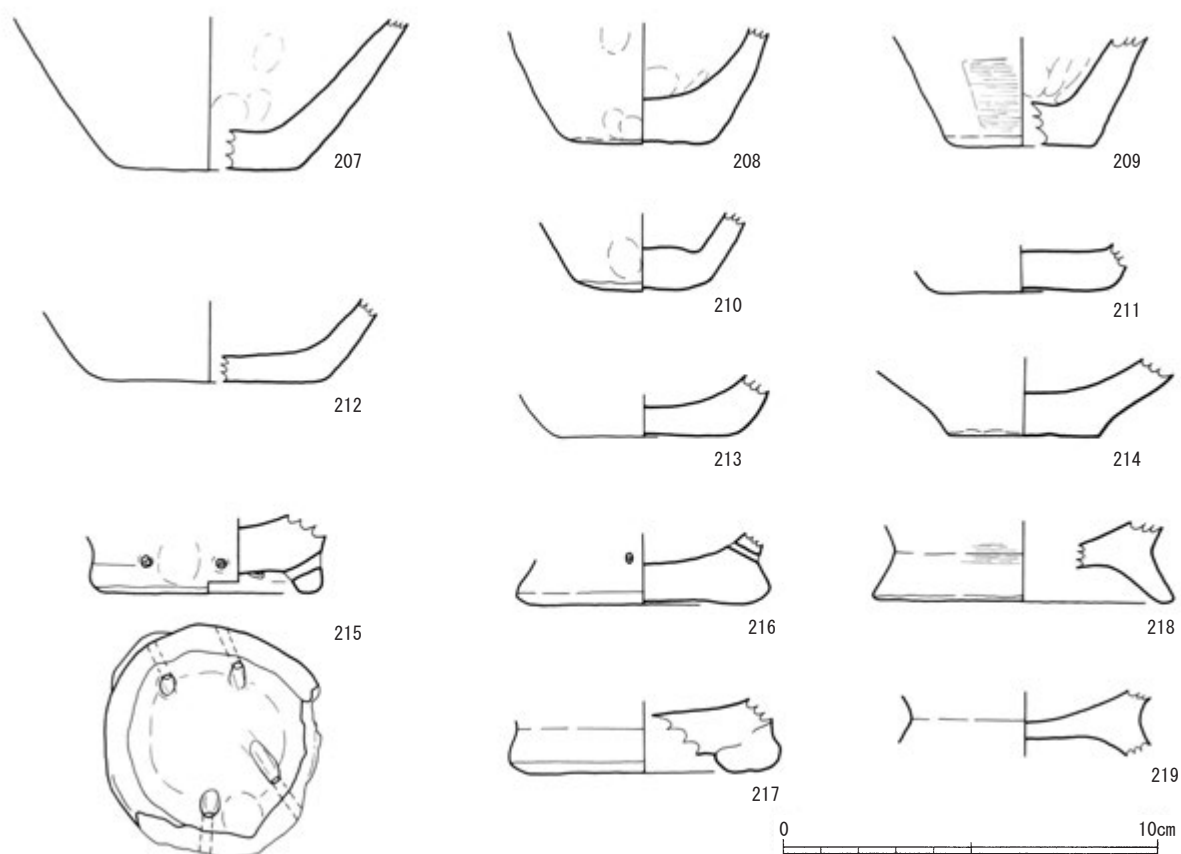
220 ～ 224 は鉢形を呈すると思われる土器である。220 は器壁が薄く直立気味である。221 は口縁部がごくわずかに肥厚する。222 は調整が粗く、条痕が残る。223 は口縁下位で、指押さえのため一旦、器壁が薄くなる。口縁部に弧状の沈線が施される。224 は鉢形土器の底部付近と考えられる。外面に U 字状の粘土貼り付け隆起部をもち、2 か所の縦方向の隆起部に径 3 mm 程の穿孔を施す。225 は壺形土器の口縁部と思われる。頸部から大きく外反しラッパ状に開く。口唇部をナデによりかるく窪ませる。

表 2 土器観察表(1)

挿図 番号	掲載 番号	出土 番号	出土 区	層	器種	部位	類別	口径・底径	器高	文様・調整 (外 / 内)		色調		胎土				焼成
										文様	調整	外面	内面	石英	長石	カセ	その他	
9	1	一括	B-5	Ⅲ a	深鉢	口縁	I	(208)	(7.2)	沈線文 口縁肥厚部に刺突文	外：不明 内：不明	5 YR 4 / 6 (赤褐)	7.5 YR 4 / 6 (褐)	○	○		雲母 白色粒	良好
	2	578	B-7	Ⅲ a	深鉢	口縁	I	-	-	棒状工具による刺突文	外：ナデ 内：ナデ、指頭圧痕	5 YR 5 / 6 (明赤褐)	5 YR 4 / 6 (赤褐)	○	○			良好
	3	一括	B-4	Ⅲ a	深鉢	口縁	I	-	-	沈線文・刺突文	外：不明 内：不明	5 YR 4 / 6 (赤褐)	10 YR 5 / 4 (にぶい黄褐)	○	○		雲母 白色粒	良好
	4	一括	B-5	Ⅲ a	壺	口縁	I	(6.4)	(3.2)	沈線文・刻み	外：不明 内：ナデ、指頭圧痕	2.5 YR 4 / 6 (赤褐)	2.5 YR 4 / 6 (赤褐)		○		雲母 白色粒	良好
	5	一括	A-4	Ⅲ a	壺	口縁	I	(6.2)	(3.2)	沈線文	外：不明 内：不明	10 YR 6 / 6 (明黄褐)	7.5 YR 5 / 6 (明褐)	○	○			良好
	6	一括	B-5	Ⅲ a	甕	口縁	I	(20.0)	(9.6)	沈線文 突帯に刻み	外：ナデ 内：ナデ、指頭圧痕	5 YR 5 / 6 (明赤褐)	7.5 YR 6 / 8 (橙)	○	○		雲母 白色粒	良好
	7	一括	B-5	Ⅲ a	壺	口縁	I	(15.2)	(7.9)	沈線文 棒状工具による刻み	外：ナデ 内：ナデ	2.5 YR 4 / 6 (赤褐)	2.5 YR 4 / 6 (赤褐)		○		白色粒	良好
	8	686	B-5	Ⅲ a	甕	口縁	I	(18.8)	(3.8)	沈線文	外：不明 内：ナデ	2.5 YR 4 / 6 (赤褐)	2.5 YR 4 / 6 (赤褐)	○	○		雲母 白色粒	良好



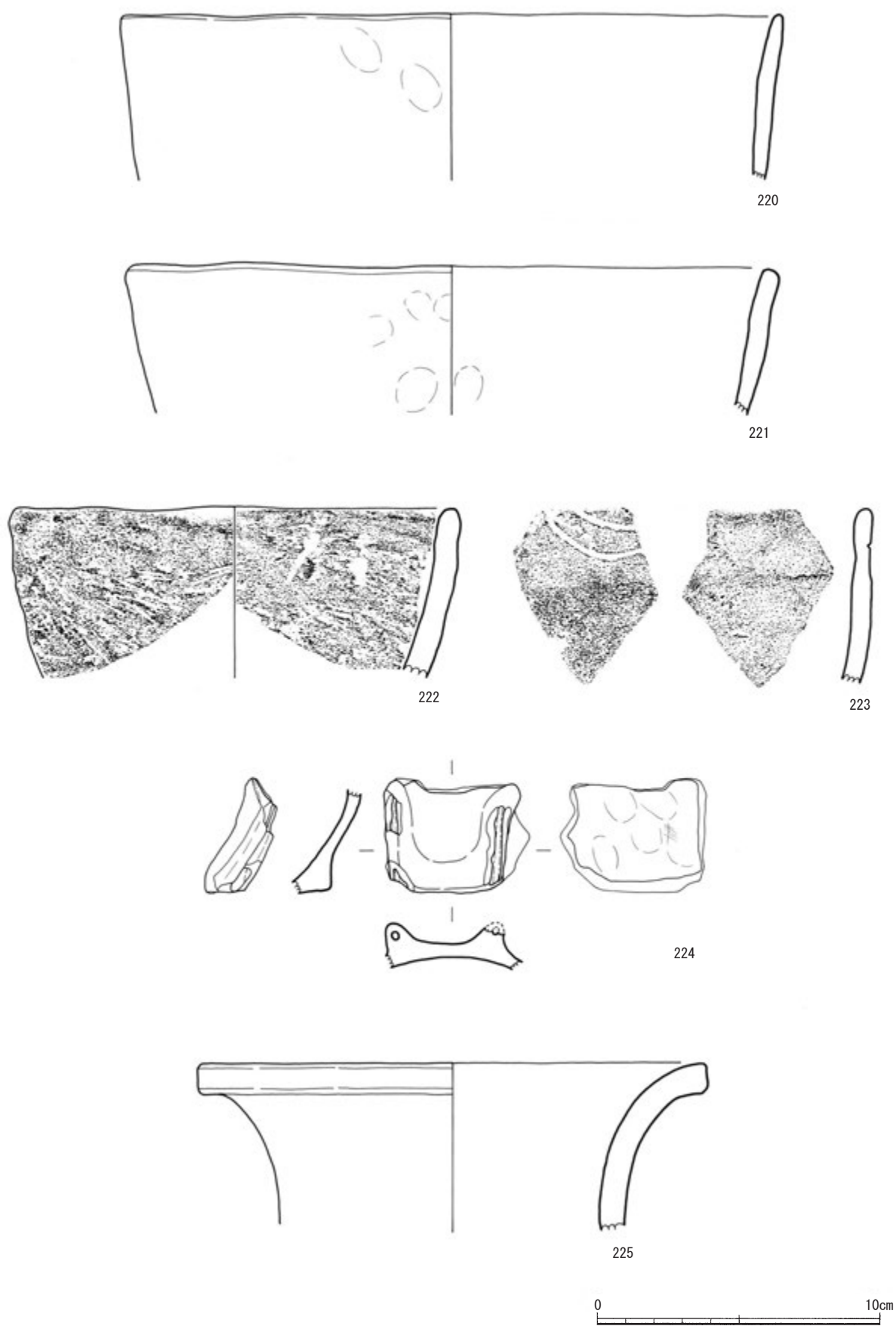
第28图 底部(1)



第 29 図 底部 (2)

表 3 土器観察表(2)

挿入番号	掲載番号	取上番号	出土区	層	器種	部位	類別	口径・底径	器高	文様・調整 (外/内)		色調		胎土				焼成
										文様	調整	外面	内面	石英	長石	カキ	その他	
10	9	636	B-7	Ⅲ a	壺	口縁	I	(8.8)	(9.4)	沈線文 突帯及び口縁下に刻み	外: ナデ 内: 指頭圧痕	5 YR 5/6 (明赤褐)	5 YR 5/6 (明赤褐)	○	○		雲母	良好
	10	810	B-5	Ⅲ a	壺	口縁	I	-	-	沈線文 口縁肥厚部に刻み	外: 不明 内: 不明	2.5 YR 4/6 (赤褐)	2.5 YR 4/6 (赤褐)	○	○		雲母	良好
	11	642	B-7	Ⅲ a	壺	口縁	I	(6.6)	(8.2)	刻み 突帯に二又状工具による刺突文	外: ナデ 内: ナデ, 指頭圧痕	5 YR 4/3 (にふい赤褐)	5 YR 4/3 (にふい赤褐)	○				良好
	12	644	B-7	Ⅲ a	壺	口縁	I	7.0	(15.7)	羽状沈線文 突帯に刻み	外: 丁寧なナデ 内: ナデ, 指頭圧痕	5 YR 5/6 (明赤褐)	5 YR 5/6 (明赤褐)	○			白色粒	良好
	13	一括	B-4	Ⅲ a	壺	口縁	I	(11.3)	(2.4)	突帯に二又状工具による刺突文	外: ナデ 内: ナデ	10 YR 4/4 (褐)	10 YR 4/4 (褐)	○	○			良好
	14	一括	B-6	Ⅲ a	壺	口縁	I	(11.6)	(2.3)	沈線文 突帯に二又状工具による刺突文	外: ナデ, 指頭圧痕 内: ナデ	5 YR 4/8 (赤褐)	5 YR 4/8 (赤褐)				白色粒	良好
	15	一括	A-4	Ⅲ a	壺	胴部	I	-	-	沈線文 突帯に刻み	外: 不明 内: 不明	5 YR 4/8 (赤褐)	5 YR 4/8 (赤褐)	○	○			良好
	16	一括	A-4	Ⅲ a	壺	胴部	I	-	-	沈線文 突帯に刻み	外: ナデ 内: ナデ	7.5 YR 6/6 (橙)	7.5 YR 6/6 (橙)	○	○		雲母	良好
	17	50	B-7	Ⅲ a	甕	口縁	I	(14.2)	(3.8)	口縁肥厚部にヘラ状工具 による刻み, 沈線文	外: ナデ 内: ナデ, 指頭圧痕	5 YR 5/6 (明赤褐)	5 YR 4/4 (にふい赤褐)	○			雲母	良好
	18	468	B-7	Ⅲ a														
		一括	B-7	Ⅲ a	甕	口縁	I	(16.2)	(8.3)	沈線文 刻み	外: ナデ 内: ナデ	5 YR 5/6 (明赤褐)	5 YR 5/6 (明赤褐)	○	○			良好
		469	B-7	Ⅲ a														
	19	一括	B-6	Ⅲ a	鉢	口縁	I	(19.2)	(4.9)	突帯に刻み	外: 不明 内: 不明	7.5 YR 7/6 (橙)	10 YR 7/4 (にふい黄橙)				精緻	良好
	20	一括	B-6	Ⅲ a	鉢	口縁	I	-	-	突帯に刻み	外: 不明 内: 不明	7.5 YR 7/6 (橙)	7.5 YR 7/6 (橙)				精緻	良好



第 30 図 その他の土器

表4 土器観察表(3)

補図番号		掲載番号	取上番号	出土区	層	器種	部位	類別	口径・底径	器高	文様・調整 (外/内)		色調		胎土				焼成
											文様	調整	外面	内面	石英	長石	カセ	その他	
11	21	629	B-7	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅱ		13.8	(21.0)	沈線文 突帯に二又状工具による刺突文	外: ナデ 内: ナデ, 指頭圧痕	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	2. 5 Y R 4 / 6 (赤褐)	○	○	雲母	良好	
	22	一括	B-6	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅱ		(10.4)	(2.7)	沈線文 突帯に二又状工具による刺突文	外: ナデ 内: ナデ	7. 7 Y R 5 / 6 (明赤褐)	7. 7 Y R 5 / 6 (明赤褐)	○	○	雲母	良好	
	23	一括	B-7	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅱ		(8.2)	(2.4)	刺突文	外: ナデ, 指頭圧痕 内: ナデ	5 Y R 6 / 8 (橙)	5 Y R 6 / 8 (橙)	○	○	○	良好	
	24	一括	B-5	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅱ		(11.4)	(3.7)	沈線文 突帯に二又状工具による刺突文	外: ナデ 内: ナデ	1 0 Y R 7 / 6 (明黄褐)	1 0 Y R 4 / 1 (褐)			精緻	良好	
	25	一括	B-5	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅱ		(7.4)	(4.5)	沈線文 突帯に二又状工具による刺突文	外: ナデ 内: ナデ, 指頭圧痕	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	1 0 Y R 6 / 6 (明黄褐)	○	○	雲母	良好	
	26	741	B-5	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅱ		(16.0)	(3.4)	沈線文	外: ナデ 内: ナデ, 指頭圧痕	5 Y R 4 / 8 (赤褐)	5 Y R 4 / 8 (赤褐)	○	○	雲母	良好	
	27	一括	B-5	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅱ		(9.4)	(2.6)	沈線文	外: ナデ 内: ナデ	7. 5 Y R 7 / 4 (にぶい橙)	1 0 Y R 7 / 6 (明黄褐)			精緻	良好	
	28	一括	B-5	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅱ		(12.2)	(2.1)	沈線文	外: ナデ 内: ナデ	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	1 0 Y R 5 / 4 (にぶい黄褐)	○	○	雲母	良好	
	29	466	B-7	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅱ		(10.2)	(4.3)	沈線文	外: ナデ 内: ナデ, 指頭圧痕	5 Y R 5 / 4 (にぶい赤褐)	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	○	○	雲母	良好	
	30	一括	B-7	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅱ		(10.3)	(3.0)	沈線文	外: ナデ 内: ナデ, 指頭圧痕	5 Y R 5 / 4 (にぶい赤褐)	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)			精緻	良好	
	31	一括	B-5	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅱ		(9.4)	(2.4)	沈線文	外: ナデ 内: ナデ, 指頭圧痕	7. 5 Y R 6 / 6 (橙)	5 Y R 6 / 6 (橙)	○	○	雲母	良好	
	32	一括	B-6	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅱ		-	-	沈線文 突帯に二又状工具による刺突文	外: ナデ 内: ナデ	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	○	○	雲母	良好	
	33	一括	B-6	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅱ		-	-	沈線文	外: ナデ 内: 不明	2. 5 Y R 4 / 6 (赤褐)	2. 5 Y R 4 / 6 (赤褐)	○	○	雲母岩片	良好	
12	34	一括	B-5	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅱ		-	-	沈線文	外: ナデ 内: ナデ, 指頭圧痕	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	○	○	雲母	良好	
	35	一括	B-5	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅱ		(8.6)	(2.3)	沈線文	外: ナデ 内: ナデ, 指頭圧痕	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	○	○		良好	
	36	250	B-7	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅱ		(8.8)	(4.1)	沈線文	外: ナデ 内: ナデ, 指頭圧痕	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	5 Y R 4 / 8 (赤褐)	○	○	雲母	良好	
	37	一括	B-4	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅱ		(9.0)	(2.7)	沈線文	外: ナデ 内: ナデ	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	1 0 Y R 5 / 4 (にぶい黄褐)	○	○	雲母	良好	
	38	一括	B-5	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅱ		-	-	沈線文	外: ナデ 内: ナデ	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	5 Y R 4 / 6 (赤褐)		○	雲母	良好	
	39	92	B-5	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅱ		-	-	沈線文	外: ナデ 内: ナデ	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)			精緻	良好	
	40	一括	A-4	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅱ		-	-	沈線文 突帯に二又状工具による刺突文	外: 不明 内: 不明	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	○	○		良好	
	41	一括	B-4	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅱ		-	-	突帯に二又状工具による刺突文	外: 不明 内: 不明	5 Y R 3 / 6 (暗赤褐)	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	○	○	雲母	良好	
	42	一括	B-5	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅱ		(11.8)	(4.5)	突帯に二又状工具による刺突文	外: ナデ 内: ナデ, 指頭圧痕	5 Y R 4 / 8 (赤褐)	5 Y R 4 / 8 (赤褐)	○	○	雲母	良好	
	43	一括	A-4	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅱ		-	-	沈線文	外: ナデ 内: ナデ	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	○	○		良好	
	44	一括	B-6	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅱ		(7.8)	(1.9)	沈線文	外: ナデ 内: ナデ	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	○	○		良好	
	45	一括	B-6	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅱ		-	-	沈線文	外: ナデ 内: ナデ	1 0 Y R 5 / 4 (にぶい黄褐)	5 Y R 4 / 8 (赤褐)	○	○	雲母	良好	
	46	一括	A-4	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅱ		(9.8)	(4.6)	沈線文	外: ナデ 内: ナデ	5 Y R 4 / 8 (赤褐)	5 Y R 4 / 8 (赤褐)	○	○		良好	
13	47	一括	A-4	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅱ		-	-	沈線文	外: ナデ 内: ナデ	7. 5 Y R 4 / 4 (褐)	7. 5 Y R 4 / 4 (褐)	○	○		良好	
	48	一括	B-5	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅱ		(9.8)	(3.5)	隆起線文の上下に刺突文	外: ナデ 内: 指頭圧痕	2. 5 Y R 4 / 6 (赤褐)	2. 5 Y R 4 / 6 (赤褐)			白色粒	良好	
	49	78	B-7	Ⅲ a	壺	胴部	Ⅱ		-	-	短沈線 突帯に二又状工具による刺突文	外: ナデ 内: ナデ, 指頭圧痕	5 Y R 5 / 4 (にぶい赤褐)	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	○	○	雲母	良好	
	50	74	B-7	Ⅲ a	壺	胴部	Ⅱ	-	-	沈線文 突帯に二又状工具による刺突文	外: ナデ 内: 指頭圧痕	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	7. 5 Y R 6 / 4 (にぶい橙)	○	○			良好	
	77	B-7	Ⅲ a																
	51	一括	B-5	Ⅲ a	壺	胴部	Ⅱ		-	-	沈線文 突帯に二又状工具による刺突文	外: ナデ 内: ナデ, 指頭圧痕	5 Y R 4 / 8 (赤褐)	5 Y R 4 / 8 (赤褐)			精緻	良好	
	52	一括	B-5	Ⅲ a	壺	胴部	Ⅱ		-	-	沈線文 突帯に二又状工具による刺突文	外: ナデ 内: 不明	1 0 Y R 4 / 3 (にぶい黄褐)	1 0 Y R 4 / 3 (にぶい黄褐)	○	○		良好	
	53	一括	B-5	Ⅲ a	壺	胴部	Ⅱ		-	-	沈線文 突帯に二又状工具による刺突文	外: ナデ 内: 不明	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	2. 5 Y R 5 / 8 (明赤褐)	○	○		良好	
	14	54	一括	B-6	Ⅲ a	壺	頸部	Ⅱ		-	-	突帯に二又状工具による刺突文	外: ナデ 内: ナデ	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	○	○		良好
		55	一括	B-5	Ⅲ a	壺	胴部	Ⅱ		-	-	突帯に二又状工具による刺突文	外: ナデ 内: ナデ, 指頭圧痕	5 Y R 6 / 6 (橙)	5 Y R 6 / 6 (橙)	○	○	雲母	良好
		56	一括	B-7	Ⅲ a	壺	胴部	Ⅱ		-	-	沈線文	外: ナデ 内: 工具ナデ, 指頭圧痕	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)			精緻	良好
		57	一括	A-4	Ⅲ a	壺	肩部	Ⅱ		-	-	突帯に二又状工具による刺突文	外: ナデ 内: ナデ, 指頭圧痕	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	○	○	雲母	良好
		58	一括	B-5	Ⅲ a	壺	頸部	Ⅱ		-	-	突帯に二又状工具による刺突文 短沈線	外: ナデ 内: 工具ナデ, 指頭圧痕	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	○	○	雲母	良好
59		一括	B-5	Ⅲ a	壺	頸部	Ⅱ		-	-	沈線文 二又状工具による刺突文	外: 不明 内: 不明	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	○	○	雲母	ぜい弱	
60		一括	B-5	Ⅲ a	壺	胴部	Ⅱ		-	-	沈線文 二又状工具による刺突文	外: ナデ 内: ナデ, 指頭圧痕	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)			精緻	良好	
61		一括	B-5	Ⅲ a	壺	胴部	Ⅱ		-	-	短沈線	外: ナデ 内: ナデ, 指頭圧痕	5 Y R 6 / 6 (橙)	5 Y R 6 / 6 (橙)	○	○		良好	
62		一括	B-7	Ⅲ a	甕	口縁	Ⅱ		(21.4)	(7.2)	沈線文 突帯に二又状工具による刺突文	外: ナデ 内: 工具ナデ, ナデ, 指頭 圧痕	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	2. 5 Y 6 / 2 (灰黄)	○	○	雲母	良好	
63		一括	B-5	Ⅲ a	甕	口縁	Ⅱ		(18.4)	(4.8)	沈線文 突帯に二又状工具による刺突文	外: ナデ 内: 不明	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	○	○	雲母	良好	
64	一括	B-5	Ⅲ a	甕	胴部	Ⅱ		-	-	突帯に二又状工具による刺突文	外: ナデ 内: ナデ, 指頭圧痕	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	○	○	雲母	良好		

表5 土器観察表(4)

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層	器種	部位	類別	口径・底径	器高	文様・調整 (外/内)		色調		胎土				焼成
										文様	調整	外面	内面	石英	長石	カゼン	その他	
15	65	一括	B-5	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅲ	(6.0)	(3.2)	突帯に二又状工具による刺突文	外：ナデ 内：ナデ	7.5 Y R 5 / 6 (明褐)	10 Y R 6 / 6 (明黄褐)				白色粒	良好
	66	一括	B-6	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅲ	(11.0)	(3.0)	短沈線 突帯に串状工具による刺突文	外：ナデ 内：ナデ	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	○	○		雲母	良好
	67	一括	B-5	Ⅲ a	壺	胴部	Ⅲ	—	—	突帯に二又状工具による刺突文	外：不明 内：不明	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	○	○			不良
	68	一括	B-5	Ⅲ a	壺	胴部	Ⅲ	—	—	沈線文 突帯に刻み	外：ナデ 内：指頭圧痕	5 Y R 4 / 8 (赤褐)	5 Y R 4 / 8 (赤褐)	○	○			良好
	69	一括	C-7	Ⅲ a	壺	胴部	Ⅲ	—	—	突帯に二又状工具による刺突文	外：ナデ 内：ナデ、指頭圧痕	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	○	○		雲母	良好
	70	一括	B-6	Ⅲ a	壺	胴部	Ⅲ	—	—	沈線文 突帯に串状工具による刺突文	外：ナデ 内：ナデ	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	○	○			良好
	71	一括	B-6	Ⅲ a	壺	胴部	Ⅲ	—	—	沈線文 二又状工具による刺突文	外：ナデ 内：ナデ、指頭圧痕	7.5 Y R 3 / 2 (黒褐)	7.5 Y R 3 / 2 (黒褐)	○	○			良好
	72	一括	B-4	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅲ	(8.6)	(6.7)	沈線文	外：不明 内：指頭圧痕	7.5 Y R 6 / 6 (橙)	7.5 Y R 6 / 6 (橙)	○	○			良好
	73	一括	B-5	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅲ	(9.8)	(5.1)	沈線文	外：ナデ 内：ナデ、指頭圧痕	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	2.5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	○	○			良好
	74	一括	B-5	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅲ	—	—	沈線文	外：ナデ 内：ナデ	7.5 Y R 5 / 4 (にぶい褐)	10 Y R 4 / 4 (褐)	○	○		雲母	良好
	75	一括	B-4	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅲ	—	—	刺突文	外：ナデ 内：ナデ	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	○	○			良好
	76	一括	B-4	Ⅲ a	壺	胴部	Ⅲ	—	—	短沈線	外：ナデ 内：指頭圧痕	5 Y R 4 / 8 (赤褐)	5 Y R 4 / 8 (赤褐)	○	○			良好
	77	一括	C-7	Ⅲ a	壺	胴部	Ⅲ	—	—	沈線文 短沈線	外：ナデ 内：ナデ、指頭圧痕	7.5 Y R 3 / 1 (黒褐)	7.5 Y R 3 / 1 (黒褐)	○	○		雲母	良好
	78	一括	B-5	Ⅲ a	壺	胴部	Ⅲ	—	—	沈線文 短沈線	外：ナデ 内：ナデ、指頭圧痕	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	○	○			良好
16	79	70	B-7	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅳ	(11.0)	(4.4)	—	外：ナデ 内：ナデ、指頭圧痕	7.5 Y R 4 / 3 (褐)	5 Y R 6 / 6 (橙)	○	○			良好
	80	641	B-7	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅳ	(9.8)	(3.7)	—	外：ナデ 内：指頭圧痕	5 Y R 6 / 6 (橙)	5 Y R 6 / 6 (橙)	○	○			良好
	81	22	B-5	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅳ	—	—	—	外：不明 内：不明	5 Y R 6 / 6 (橙)	7.5 Y R 6 / 6 (橙)				精緻	良好
	82	619	B-7	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅳ	(8.3)	(2.2)	—	外：ナデ 内：ナデ	5 Y R 6 / 6 (橙)	5 Y R 6 / 6 (橙)				精緻	良好
	83	442	B-7	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅳ	(8.2)	(3.0)	—	外：ナデ 内：不明	5 Y R 6 / 6 (橙)	2.5 Y R 6 / 6 (橙)	○	○			良好
	84	97	B-5	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅳ	(11.0)	(2.4)	—	外：ナデ 内：ナデ	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	○	○			良好
	85	604	B-7	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅳ	(11.7)	(6.0)	—	外：不明 内：不明	5 Y R 6 / 6 (橙)	5 Y R 6 / 6 (橙)	○	○			良好
	86	一括	B-5	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅳ	(9.9)	(4.6)	—	外：ナデ 内：ナデ、指頭圧痕	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	○	○		雲母	良好
	87	598	B-7	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅳ	(8.5)	(2.8)	—	外：不明 内：指頭圧痕	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	○	○		白色粒	良好
	88	173	B-7	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅳ	(8.8)	(2.8)	—	外：不明 内：不明	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	○	○			良好
	89	599	B-7	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅳ	(7.4)	(3.0)	—	外：不明 内：不明	5 Y R 6 / 6 (橙)	5 Y R 6 / 6 (橙)	○	○		雲母	良好
	90	一括	B-5	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅳ	(10.5)	(3.9)	—	外：不明 内：不明	5 Y R 6 / 6 (橙)	5 Y R 6 / 6 (橙)	○	○		雲母	良好
	91	318	B-5	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅳ	(12.0)	(3.0)	—	外：ナデ 内：ナデ、指頭圧痕	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	○	○			良好
	92	597	B-7	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅳ	(12.0)	(2.1)	—	外：ナデ 内：ナデ	7.5 Y R 5 / 3 (にぶい褐)	7.5 Y R 2 / 1 (黒)	○	○			良好
17	93	一括	B-7	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅳ	(10.6)	(2.7)	—	外：ナデ 内：指頭圧痕	5 Y R 6 / 6 (橙)	5 Y R 6 / 6 (橙)	○	○			良好
	94	一括	B-5	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅳ	—	—	—	外：ナデ 内：ナデ、指頭圧痕	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)				精緻	良好
	95	一括	B-5	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅳ	(10.4)	(6.2)	—	外：ナデ 内：ナデ	5 Y R 6 / 6 (橙)	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)					良好
18	96	一括	A-4	Ⅲ a	壺	口縁	V	(8.0)	(4.1)	—	外：ナデ 内：ナデ、指頭圧痕	7.5 Y R 7 / 6 (橙)	7.5 Y R 7 / 6 (橙)				精緻	良好
	97	一括	B-5	Ⅲ a	壺	口縁	V	(14.6)	(6.8)	—	外：指頭圧痕 内：指頭圧痕	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	○	○		白色粒	良好
	98	235	B-7	Ⅲ a	壺	口縁	V	(9.2)	(3.2)	—	外：不明 内：指頭圧痕	5 Y R 6 / 6 (橙)	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)		○		雲母 白色粒	良好
	99	473	B-7	Ⅲ a	壺	口縁	V	(15.4)	(3.7)	—	外：不明 内：不明	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	5 Y R 4 / 6 (赤褐)		○	○	雲母 白色粒	良好
	100	892	B-5	Ⅲ a	壺	口縁	V	(8.0)	(2.0)	—	外：不明 内：指頭圧痕	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	10 Y R 7 / 4 (にぶい黄橙)	○				良好
	101	75	B-7	Ⅲ a	壺	口縁	V	—	—	—	外：不明 内：不明	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	5 Y R 4 / 6 (赤褐)		○		白色粒	良好
	102	64	B-7	Ⅲ a	壺	口縁	V	—	—	—	外：不明 内：不明	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	5 Y R 4 / 6 (赤褐)		○		白色粒	良好
	103	一括	B-4	Ⅲ a	壺	口縁	V	—	—	—	外：不明 内：指頭圧痕	5 Y R 4 / 4 (にぶい赤褐)	5 Y R 4 / 4 (にぶい赤褐)		○		白色粒	良好
	104	914	B-5	Ⅲ a	壺	口縁	V	—	—	—	外：不明 内：不明	5 Y R 6 / 6 (橙)	5 Y R 6 / 6 (橙)	○	○			良好
	105	584	B-7	Ⅲ a	壺	口縁	V	(12.4)	(4.4)	沈線文	外：ナデ 内：ナデ	5 Y R 6 / 6 (橙)	7.5 Y R 6 / 6 (橙)	○	○			良好
	106	746	B-5	Ⅲ a	壺	胴部	V	—	—	—	外：ナデ 内：ナデ、指頭圧痕	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	10 Y R 6 / 3 (にぶい黄橙)	○	○		雲母	良好

表6 土器観察表(5)

挿 図 番 号	掲 載 番 号	取 上 番 号	出土区	層	器種	部位	類別	口径・底径	器高	文様・調整 (外/内)		色調		胎土				焼成
										文様	調整	外面	内面	石英	長石	カセ	その他	
19	107	622	B-7	Ⅲ a	甕	口縁	V	(15.0)	(2.6)	-	外: ナデ 内: ナデ	5 Y R 4 / 4 (にぶい赤褐)	5 Y R 4 / 4 (にぶい赤褐)	○	○		雲母	良好
	108	一括	-	-	甕	口縁	V	-	-	-	外: ナデ 内: ナデ	1 0 Y R 3 / 2 (黒褐)	1 0 Y R 3 / 2 (黒褐)	○	○		雲母	良好
	109	691	B-5	Ⅲ a	甕	口縁	V	-	-	-	外: 不明 内: 不明	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	○	○		雲母	良好
	110	700	B-5	Ⅲ a	甕	口縁	V	-	-	-	外: ナデ 内: 不明	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	○	○		雲母	良好
	111	一括	B-5	Ⅲ a	甕	口縁	V	(11.2)	(1.4)	-	外: ナデ 内: ナデ	7. 5 Y R 7 / 6 (橙)	7. 5 Y R 5 / 3 (にぶい褐)				精緻	良好
	112	816	B-5	Ⅲ a	甕	口縁	V	(14.2)	(3.3)	-	外: ナデ 内: ナデ	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	5 Y R 4 / 4 (にぶい赤褐)	○	○		雲母	良好
	113	231	B-7	Ⅲ a	甕	口縁	V	(23.4)	(5.4)	-	外: 不明 内: 不明	7. 5 Y R 5 / 6 (明褐)	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)				精緻 赤色粒	良好
	114	一括	B-5	Ⅲ a	甕	口縁	V	(19.3)	(3.4)	-	外: 不明 内: 不明	1 0 Y R 7 / 6 (明黄褐)	1 0 Y R 7 / 6 (明黄褐)				精緻	良好
	115	648	B-7	Ⅲ a	甕	口縁	V	(16.2)	(2.6)	-	外: ナデ 内: ナデ	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	○	○		雲母	良好
	116	一括	B-5	Ⅲ a	甕	口縁	V	-	-	-	外: ナデ 内: ナデ	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	○	○		雲母	良好
	117	862	B-5	Ⅲ a	甕	口縁	V	-	-	-	外: ナデ 内: ナデ、指頭圧痕	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	5 Y R 4 / 6 (赤褐)		○	○	雲母 白色粒	良好
20	118	一括	B-5	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅵ	(8.6)	(5.6)	-	外: 指頭圧痕 内: 指頭圧痕	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	7. 5 Y R 6 / 6 (橙)		○	○	白色粒	良好
	119	849	B-5	Ⅲ a	壺	胴部	Ⅵ	-	-	-	外: 不明 内: 指頭圧痕	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	5 Y R 4 / 6 (赤褐)		○		雲母 白色粒	良好
	120	一括	B-4	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅵ	(10.8)	(5.1)	-	外: 不明 内: 指頭圧痕	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	○	○		雲母 白色粒	良好
	121	一括	B-5	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅵ	(8.2)	(2.1)	-	外: 指頭圧痕 内: 指頭圧痕	1 0 Y R 4 / 2 (灰黄褐)	1 0 Y R 4 / 3 (にぶい黄褐)	○	○		雲母	良好
	122	一括	B-5	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅵ	-	-	-	外: ナデ 内: ナデ	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	○	○			良好
	123	一括	B-5	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅵ	(10.4)	(8.7)	-	外: ナデ、指頭圧痕 内: ナデ、指頭圧痕	7. 5 Y R 5 / 6 (明褐)	7. 5 Y R 5 / 4 (にぶい褐)	○	○			良好
	124	一括	B-5	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅵ	(10.0)	(9.2)	-	外: 不明 内: 指頭圧痕	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	5 Y R 4 / 6 (赤褐)		○	○	雲母	良好
	125	一括	B-5	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅵ	(6.4)	(4.6)	-	外: ナデ 内: ナデ	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)				砂粒 雲母	良好
	126	702	B-5	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅵ	(11.0)	(4.7)	-	外: 不明 内: 不明	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)		○		雲母 白色粒	良好
	127	703	B-5	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅵ	(12.8)	(4.2)	-	外: ナデ 内: ナデ、指頭圧痕	2. 5 Y R 5 / 8 (明赤褐)	2. 5 Y R 5 / 8 (明赤褐)	○			砂粒	良好
	128	一括	B-5	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅵ	(10.5)	(4.2)	-	外: ナデ 内: ナデ、指頭圧痕	7. 5 Y R 5 / 6 (明褐)	7. 5 Y R 5 / 6 (明褐)	○	○		雲母	良好
	129	一括	B-4	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅵ	(6.7)	(3.2)	-	外: ナデ 内: ナデ	2. 5 Y R 4 / 8 (赤褐)	2. 5 Y R 4 / 8 (赤褐)				雲母	良好
	130	925	B-5	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅵ	-	-	-	外: 不明 内: 指頭圧痕	5 Y R 6 / 6 (橙)	5 Y R 6 / 6 (橙)	○	○			良好
131	850	B-5	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅵ	-	-	-	外: ナデ、指頭圧痕 内: ナデ	2. 5 Y R 5 / 8 (明赤褐)	2. 5 Y R 5 / 8 (明赤褐)	○			雲母 白色粒	良好	
132	873	B-5	Ⅲ a	壺	口縁	Ⅵ	-	-	-	外: ナデ 内: ナデ	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	1 0 Y R 7 / 3 (にぶい黄橙)	○	○			良好	
21	133	936	B-5	Ⅲ a	甕	口縁	Ⅵ	(25.2)	(8.1)	-	外: 不明 内: 指頭圧痕	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	○	○		雲母	良好
	134	一括	B-4	Ⅲ a	甕	口縁	Ⅵ	(20.8)	(6.1)	-	外: 指頭圧痕 内: 指頭圧痕	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	1 0 Y R 6 / 4 (にぶい黄橙)		○	○	雲母	良好
	135	944	B-4	Ⅲ a	甕	口縁	Ⅵ	(17.2)	(6.9)	-	外: ナデ、指頭圧痕 内: 指頭圧痕	7. 5 Y R 3 / 2 (黒褐)	7. 5 Y R 3 / 2 (黒褐)		○		雲母 白色粒	良好
	136	一括	B-5	Ⅲ a	甕	口縁	Ⅵ	(14.8)	(6.7)	-	外: ナデ、指頭圧痕 内: 指頭圧痕	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	○	○			良好
22	137	635	B-7	Ⅲ a	深鉢	口縁	Ⅶ	(20.8)	(5.5)	-	外: ナデ 内: ナデ	5 Y R 4 / 8 (赤褐)	5 Y R 4 / 8 (赤褐)	○	○		雲母	良好
	138	607	B-7	Ⅲ a	深鉢	口縁	Ⅶ	(21.0)	(5.6)	-	外: ナデ、指頭圧痕 内: ナデ、指頭圧痕	2. 5 Y R 5 / 8 (明赤褐)	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	○	○			良好
	139	一括	B-4	Ⅲ a	深鉢	口縁	Ⅶ	-	-	-	外: ナデ 内: ナデ、指頭圧痕	7. 5 Y R 5 / 6 (明褐)	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	○	○		雲母	良好
	140	一括	B-7	Ⅲ a	深鉢	口縁	Ⅶ	-	-	-	外: ナデ、指頭圧痕 内: ナデ、指頭圧痕	5 Y R 3 / 4 (暗赤褐)	2. 5 Y R 4 / 6 (赤褐)	○	○			良好
	141	730	B-5	Ⅲ a	深鉢	口縁	Ⅶ	-	-	-	外: ナデ 内: ナデ、指頭圧痕	5 Y R 4 / 8 (赤褐)	5 Y R 4 / 8 (赤褐)	○	○			良好
	142	30	B-5	Ⅲ a	深鉢	口縁	Ⅶ	-	-	-	外: ナデ 内: ナデ、指頭圧痕	2. 5 Y R 5 / 8 (明赤褐)	2. 5 Y R 5 / 8 (明赤褐)	○	○			良好
	143	一括	B-4	Ⅲ a	深鉢	口縁	Ⅶ	-	-	-	外: ナデ 内: ナデ、指頭圧痕	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	○	○			良好
	144	566	B-7	Ⅲ a	深鉢	口縁	Ⅶ	-	-	-	外: ナデ、指頭圧痕 内: ナデ、指頭圧痕	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	○	○			良好
	145	一括	B-6	Ⅲ a	深鉢	口縁	Ⅶ	-	-	-	外: 工具ナデ、ナデ、指頭圧痕 内: ナデ、指頭圧痕	2. 5 Y R 5 / 8 (明赤褐)	2. 5 Y R 5 / 8 (明赤褐)	○	○			良好
	146	一括	B-4	Ⅲ a	深鉢	口縁	Ⅶ	-	-	-	外: ナデ、指頭圧痕 内: ナデ	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	○	○			良好
23	147	569	B-7	Ⅲ a	深鉢	口縁	Ⅶ	-	-	-	外: ナデ、指頭圧痕 内: 工具ナデ、ナデ、指頭圧痕	7. 5 Y R 4 / 4 (褐)	5 Y R 4 / 4 (にぶい赤褐)	○	○			良好
	148	一括	B-5	Ⅲ a	深鉢	口縁	Ⅶ	-	-	-	外: ナデ 内: ナデ、指頭圧痕	2. 5 Y R 5 / 8 (明赤褐)	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	○	○			良好
	149	一括	B-5	Ⅲ a	深鉢	口縁	Ⅶ	-	-	-	外: ナデ 内: ナデ	1 0 Y R 6 / 6 (明黄褐)	1 0 Y R 5 / 4 (にぶい黄褐)	○	○			良好
	150	784	B-5	Ⅲ a	深鉢	口縁	Ⅶ	-	-	-	外: ナデ、指頭圧痕 内: ナデ、指頭圧痕	1 0 Y R 3 / 1 (黒褐)	2. 5 Y R 4 / 6 (赤褐)	○	○			良好
	151	一括	B-5	Ⅲ a	深鉢	口縁	Ⅶ	-	-	-	外: ナデ、指頭圧痕 内: ナデ、指頭圧痕	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	○	○			良好
	152	一括	B-5	Ⅲ a	深鉢	口縁	Ⅶ	-	-	-	外: ナデ 内: ナデ、指頭圧痕	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	○	○			良好
	153	一括	B-5	Ⅲ a	深鉢	口縁	Ⅶ	-	-	-	外: ナデ 内: ナデ、指頭圧痕	2. 5 Y R 5 / 8 (明赤褐)	2. 5 Y R 5 / 8 (明赤褐)	○	○			良好
	154	一括	B-5	Ⅲ a	深鉢	口縁	Ⅶ	-	-	-	外: ナデ、指頭圧痕 内: ナデ	7. 5 Y R 5 / 6 (明褐)	7. 5 Y R 5 / 6 (明褐)	○	○			良好

表7 土器観察表(6)

挿 入 番 号	掲 載 番 号	取 上 番 号	出土区	層	器種	部位	類別	口径・底径	器高	文様・調整 (外/内)		色調		胎土				焼成
										文様	調整	外面	内面	石英	長石	カセ	その他	
24	155	721	B-5	Ⅲ a	深鉢	口縁	Ⅶ	—	—	—	外：ナデ 内：ナデ、指頭圧痕	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	○	○			良好
	156	一括	C-7	Ⅲ a	深鉢	口縁	Ⅶ	—	—	—	外：指頭圧痕 内：指頭圧痕	7.5 Y R 4 / 6 (褐)	7.5 Y R 4 / 6 (褐)	○	○			良好
	157	737	B-5	Ⅲ a	深鉢	口縁	Ⅶ	—	—	—	外：ナデ 内：ナデ、指頭圧痕	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	10 Y R 6 / 4 (にぶい黄橙)	○	○		雲母	良好
	158	739	B-5	Ⅲ a	深鉢	口縁	Ⅶ	—	—	—	外：ナデ、指頭圧痕 内：ナデ、指頭圧痕	10 Y R 6 / 4 (にぶい黄橙)	7.5 Y R 6 / 6 (橙)	○	○			良好
	159	一括	B-5	Ⅲ a	深鉢	口縁	Ⅶ	—	—	—	外：ナデ 内：ナデ	7.5 Y R 5 / 4 (にぶい褐)	10 Y R 3 / 2 (黒褐)					良好
	160	一括	B-5	Ⅲ a	深鉢	口縁	Ⅶ	—	—	—	外：ナデ 内：工具ナデ、指頭圧痕	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	7.5 Y R 4 / 4 (褐)	○	○			良好
	161	一括	B-5	Ⅲ a	深鉢	口縁	Ⅶ	—	—	—	外：ナデ 内：ナデ、指頭圧痕	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	10 Y R 6 / 4 (にぶい黄橙)	○	○			良好
	162	一括	C-7	Ⅲ a	深鉢	口縁	Ⅶ	—	—	—	外：ナデ 内：工具ナデ、指頭圧痕	7.5 Y R 5 / 6 (明褐)	7.5 Y R 5 / 6 (明褐)	○	○			良好
25	163	一括	B-5	Ⅲ a	深鉢	口縁	Ⅶ	—	—	—	外：ナデ 内：ナデ、指頭圧痕	5 Y R 6 / 6 (橙)	10 Y R 6 / 4 (にぶい黄橙)	○	○		雲母	良好
	164	818	B-5	Ⅲ a	深鉢	口縁	Ⅶ	—	—	—	外：ナデ 内：ナデ	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	10 Y R 6 / 4 (にぶい黄橙)	○	○			良好
	165	一括	B-5	Ⅲ a	深鉢	口縁	Ⅶ	—	—	—	外：指頭圧痕 内：指頭圧痕	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	○	○		雲母	良好
26	166	一括	B-5	Ⅲ a	深鉢	口縁	Ⅸ	—	—	—	外：ナデ、指頭圧痕 内：工具ナデ、指頭圧痕	7.5 Y R 5 / 6 (明褐)	10 Y R 4 / 3 (にぶい黄褐)	○	○			良好
	167	507	A-7	Ⅲ a	深鉢	口縁	Ⅸ	—	—	—	外：ナデ、指頭圧痕 内：指頭圧痕	7.5 Y R 5 / 6 (明褐)	7.5 Y R 3 / 2 (黒褐)	○	○			良好
	168	一括	B-5	Ⅲ a	深鉢	口縁	Ⅸ	—	—	—	外：指頭圧痕 内：指頭圧痕	10 Y R 6 / 4 (にぶい黄橙)	7.5 Y R 4 / 6 (褐)	○	○			良好
	169	812	B-5	Ⅲ a	深鉢	胴部	Ⅸ	—	—	—	外：不明 内：不明	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	○	○			良好
	170	一括	B-5	Ⅲ a	深鉢	口縁	Ⅸ	—	—	—	外：ナデ、指頭圧痕 内：ナデ、指頭圧痕	10 Y R 6 / 4 (にぶい黄橙)	7.5 Y R 5 / 6 (明褐)		○		白色粒	良好
	171	587	B-7	Ⅲ a	深鉢	胴部	Ⅸ	—	—	—	外：不明 内：指頭圧痕	5 Y R 6 / 6 (橙)	5 Y R 6 / 6 (橙)	○			白色粒	良好
	172	929	B-5	Ⅲ a	深鉢	胴部	Ⅸ	—	—	—	外：不明 内：不明	10 Y R 6 / 6 (明黄褐)	10 Y R 6 / 4 (にぶい黄橙)	○	○			良好
	173	一括	B-5	Ⅲ a	深鉢	胴部	Ⅸ	—	—	沈線文	外：ナデ 内：工具ナデ、ナデ	10 Y R 4 / 3 (にぶい黄褐)	10 Y R 4 / 2 (灰黄褐)	○	○		雲母	良好
	174	一括	B-5	Ⅲ a	深鉢	口縁	Ⅸ	—	—	沈線文 刻み	外：ナデ 内：ナデ、指頭圧痕	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	○	○			良好
	175	720	B-5	Ⅲ a	深鉢	把手	Ⅸ	—	—	—	外：ナデ、指頭圧痕 内：ナデ、指頭圧痕	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	○				良好
27	176	一括	B-7	Ⅲ a	深鉢	口縁		—	—	—	外：不明 内：ナデ	10 Y R 6 / 4 (にぶい黄橙)	10 Y R 7 / 4 (にぶい黄橙)	○	○			良好
	177	一括	B-5	Ⅲ a	深鉢	口縁		—	—	—	外：ナデ 内：ナデ	2.5 Y R 5 / 8 (明赤褐)	2.5 Y R 5 / 8 (明赤褐)	○	○			良好
	178	一括	B-7	Ⅲ a	深鉢	口縁		—	—	—	外：工具ナデ 内：ナデ、指頭圧痕	7.5 Y R 3 / 1 (黒褐)	5 Y R 4 / 4 (にぶい赤褐)	○	○		雲母	良好
28	179	一括	B-5	Ⅲ a	甕or壺	底部		—	(49)	—	外：ナデ 内：ナデ、指頭圧痕	5 Y R 4 / 8 (赤褐)	5 Y R 4 / 8 (赤褐)	○	○		白色粒	良好
	180	一括	B-5	Ⅲ a	甕or壺	底部		—	(42)	—	外：ナデ、指頭圧痕 内：ナデ、指頭圧痕	7.5 Y R 6 / 6 (橙)	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	○	○			良好
	181	一括	B-5	Ⅲ a	甕or壺	底部		—	(29)	—	外：ナデ 内：ナデ、指頭圧痕	2.5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	10 Y R 5 / 3 (にぶい黄褐)	○	○			良好
	182	一括	B-5	Ⅲ a	甕or壺	底部		—	(22)	—	外：ナデ 内：ナデ	5 Y R 4 / 8 (赤褐)	5 Y R 4 / 8 (赤褐)	○	○			良好
	183	一括	B-5	Ⅲ a	甕or壺	底部		—	(20)	—	外：ナデ 内：ナデ、指頭圧痕	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	○	○			良好
	184	一括	B-5	Ⅲ a	甕or壺	底部		—	(22)	—	外：ナデ 内：ナデ、指頭圧痕	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	5 Y R 6 / 6 (橙)	○				良好
	185	一括	B-7	Ⅱ	甕or壺	底部		—	—	—	外：工具ナデ、指頭圧痕 内：ナデ、指頭圧痕	10 Y R 6 / 4 (にぶい黄橙)	5 Y R 6 / 6 (橙)	○	○			良好
	186	一括	B-5	Ⅲ a	甕or壺	底部		3.2	(24)	—	外：ナデ、指頭圧痕 内：ナデ	5 Y R 6 / 6 (橙)	5 Y R 6 / 6 (橙)	○	○			良好
	187	一括	B-5	Ⅲ a	甕or壺	底部		1.6	(26)	—	外：ナデ、指頭圧痕 内：ナデ	2.5 Y R 4 / 6 (赤褐)	2.5 Y R 4 / 6 (赤褐)	○			白色粒	良好
	188	一括	B-5	Ⅲ a	甕or壺	底部		2.5	(40)	—	外：ナデ、指頭圧痕 内：ナデ、指頭圧痕	5 Y R 4 / 8 (赤褐)	5 Y R 4 / 8 (赤褐)	○			白色粒	良好
	189	564	B-7	Ⅲ a	甕or壺	底部		1.4	(27)	—	外：ナデ 内：ナデ、指頭圧痕	2.5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	2.5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	○	○		雲母 白色粒	良好
	190	一括	B-5	Ⅲ a	甕or壺	底部		1.0	(26)	—	外：ナデ 内：ナデ、指頭圧痕	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	○	○			良好
	191	一括	B-7	Ⅲ a	甕or壺	底部		0.8	(28)	—	外：ナデ 内：ナデ、指頭圧痕	7.5 Y R 4 / 4 (褐)	2.5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	○			白色粒	良好
	192	750	B-5	Ⅲ a	甕or壺	底部		0.7	(26)	—	外：指頭圧痕 内：指頭圧痕	7.5 Y R 5 / 6 (明褐)	5 Y R 6 / 6 (橙)	○	○		雲母	良好
	193	一括	B-5	Ⅲ a	甕or壺	底部		1.1	(20)	—	外：ナデ、指頭圧痕 内：ナデ	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	○	○			良好
	194	679	B-5	Ⅲ a	甕or壺	底部		0.8	(14)	—	外：ナデ 内：ナデ、指頭圧痕	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	○				良好
	195	一括	B-5	Ⅲ a	甕or壺	底部		(1.6)	(46)	—	外：ナデ 内：ナデ、指頭圧痕	5 Y R 5 / 8 (明赤褐)	10 Y R 6 / 6 (明黄褐)	○	○		白色粒	良好
	196	一括	B-5	Ⅲ a	甕or壺	底部		(1.5)	(51)	—	外：ナデ、指頭圧痕 内：指頭圧痕	2.5 Y R 5 / 8 (明赤褐)	2.5 Y R 5 / 8 (明赤褐)	○			砂粒 白色粒	良好
	197	一括	B-5	Ⅲ a	甕or壺	底部		(2.6)	(47)	—	外：ナデ、指頭圧痕 内：ナデ、指頭圧痕	10 Y R 6 / 6 (明黄褐)	5 Y R 6 / 6 (橙)	○	○			良好
	198	871	B-5	Ⅲ a	甕or壺	底部		1.0	(26)	—	外：ナデ 内：ナデ、指頭圧痕	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	○	○			良好
	199	一括	B-6	Ⅲ a	甕or壺	底部		1.2	(24)	—	外：ナデ 内：ナデ、指頭圧痕	2.5 Y R 4 / 8 (赤褐)	2.5 Y R 4 / 8 (赤褐)	○	○		白色粒	良好
	200	一括	B-7	Ⅲ a	甕or壺	底部		3.0	(21)	—	外：ナデ 内：ナデ	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	10 Y R 4 / 3 (にぶい黄褐)	○			砂粒	良好
	201	一括	B-5	Ⅲ a	甕or壺	底部		1.2	(28)	—	外：ナデ 内：ナデ、指頭圧痕	7.5 Y R 4 / 6 (褐)	7.5 Y R 4 / 6 (褐)	○	○		雲母	良好
	202	一括	B-5	Ⅲ a	甕or壺	底部		2.0	(24)	—	外：ナデ、指頭圧痕 内：ナデ、貝殻条痕	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	○	○			良好
	203	834	B-5	Ⅲ a	甕or壺	底部		1.1	(16)	—	外：ナデ 内：ナデ、指頭圧痕	5 Y R 6 / 6 (橙)	5 Y R 6 / 6 (橙)	○	○			良好
	204	586	B-7	Ⅲ a	甕or壺	底部		1.0	(18)	—	外：ナデ 内：ナデ	5 Y R 4 / 8 (赤褐)	5 Y R 4 / 8 (赤褐)	○			白色粒	良好
	205	一括	B-5	Ⅲ a	甕or壺	底部		1.0	(22)	—	外：ナデ 内：ナデ	10 Y R 7 / 4 (にぶい黄橙)	5 Y R 6 / 6 (橙)				精緻	良好
	206	一括	B-5	Ⅲ a	甕or壺	底部		1.0	(18)	—	外：ナデ、指頭圧痕 内：ナデ、指頭圧痕	10 Y R 6 / 3 (にぶい黄橙)	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	○	○		雲母	良好

表8 土器観察表(7)

挿 図 番 号	掲 載 番 号	取 上 番 号	出土区	層	器種	部位	類別	口径・底径	器高	文様・調整 (外 / 内)		色調		胎土				焼成
										文様	調整	外面	内面	石英	長石	カキ	その他	
29	207	一括	B-7	Ⅲ a	甕or壺	底部	-	(4.3)	(4.1)	-	外：ナデ 内：ナデ、指頭圧痕	2.5 Y R 4 / 6 (赤褐)	2.5 Y R 4 / 6 (赤褐)	○			雲母 白色粒	良好
	208	一括	B-6	Ⅲ a	甕or壺	底部	-	3.0	(3.2)	-	外：ナデ、指頭圧痕 内：ナデ、指頭圧痕	2.5 Y R 4 / 6 (赤褐)	2.5 Y R 4 / 6 (赤褐)	○			白色粒	良好
	209	585	B-7	Ⅲ a	甕or壺	底部	-	(3.6)	(2.9)	-	外：工具ナデ 内：ナデ、指頭圧痕	2.5 Y R 5 / 8 (明赤褐)	2.5 Y R 5 / 8 (明赤褐)	○			白色粒	良好
	210	一括	B-5	Ⅲ a	甕or壺	底部	-	3.4	(2.0)	-	外：指頭圧痕 内：ナデ	2.5 Y R 4 / 6 (赤褐)	2.5 Y R 4 / 6 (赤褐)	○			砂粒	良好
	211	一括	B-5	Ⅲ a	甕or壺	底部	-	(4.4)	(1.2)	-	外：ナデ 内：ナデ	7.5 Y R 5 / 6 (明褐)	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	○	○			良好
	212	一括	B-7	Ⅲ a	甕or壺	底部	-	(5.8)	(2.2)	-	外：ナデ 内：ナデ	2.5 Y R 5 / 8 (明赤褐)	7.5 Y R 6 / 8 (橙)	○			雲母	良好
	213	一括	B-6	Ⅲ a	甕or壺	底部	-	(4.6)	(1.6)	-	外：ナデ 内：ナデ	5 Y R 5 / 6 (明赤褐)	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	○	○		雲母	良好
	214	一括	B-5	Ⅲ a	甕or壺	底部	-	(4.0)	(2.2)	-	外：ナデ 内：ナデ	5 Y R 6 / 6 (橙)	5 Y R 6 / 6 (橙)	○	○			良好
	215	一括	B-5	Ⅲ a	甕or壺	底部	-	5.7	-	-	外：ナデ、指頭圧痕 内：ナデ	7.5 Y R 7 / 8 (黄橙)	7.5 Y R 7 / 8 (黄橙)	○			精緻	良好
	216	一括	B-5	Ⅲ a	甕or壺	底部	-	5.7	(1.9)	-	外：ナデ 内：ナデ	5 Y R 5 / 8 (明赤褐)	5 Y R 5 / 8 (明赤褐)				精緻	良好
	217	一括	B-5	Ⅲ a	甕or壺	底部	-	(6.2)	(1.9)	-	外：ナデ 内：ナデ	2.5 Y R 5 / 8 (明赤褐)	1 0 Y R 5 / 4 (にぶい黄褐)	○	○		白色粒	良好
	218	一括	B-5	Ⅲ a	甕or壺	底部	-	(8.0)	(2.1)	-	外：ナデ 内：ナデ	5 Y R 6 / 8 (橙)	5 Y R 6 / 8 (橙)	○			白色粒	良好
30	219	一括	B-5	Ⅲ a	甕or壺	底部	-	-	-	-	外：ナデ 内：ナデ	5 Y R 4 / 8 (赤褐)	7.5 Y R 4 / 4 (褐)	○			雲母 白色粒	良好
	220	837	B-5	Ⅲ a	鉢	口縁	X	(23.0)	(5.8)	-	外：ナデ、指頭圧痕 内：ナデ	7.5 Y R 6 / 8 (橙)	2.5 Y R 5 / 8 (明赤褐)	○			白色粒	良好
	221	789	B-5	Ⅲ a	鉢	口縁	X	(22.8)	(5.2)	-	外：ナデ、指頭圧痕 内：ナデ、指頭圧痕	2.5 Y R 5 / 8 (明赤褐)	2.5 Y R 5 / 8 (明赤褐)	○			砂粒	良好
	222	一括	C-7	Ⅲ a	鉢	口縁	X	(15.4)	(6.0)	-	外：条痕の後ナデ 内：工具ナデ	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	7.5 Y R 4 / 3 (褐)	○			砂粒 白色粒	良好
	223	一括	C-7	Ⅲ a	鉢	口縁	X	-	-	沈線文	外：ナデ、指頭圧痕 内：ナデ、指頭圧痕	5 Y R 6 / 6 (橙)	7.5 Y R 5 / 1 (褐灰)	○	○			良好
	224	一括	A-4	Ⅲ a	鉢	胴部	XI	-	-	-	外：ナデ 内：ナデ、指頭圧痕	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	5 Y R 4 / 6 (赤褐)	○	○			良好
	225	一括	A-4	Ⅲ a	壺	口縁	XII	(18.0)	(5.9)	-	外：不明 内：不明	1 0 Y R 7 / 4 (にぶい黄橙)	1 0 Y R 7 / 4 (にぶい黄橙)	○				良好

石器

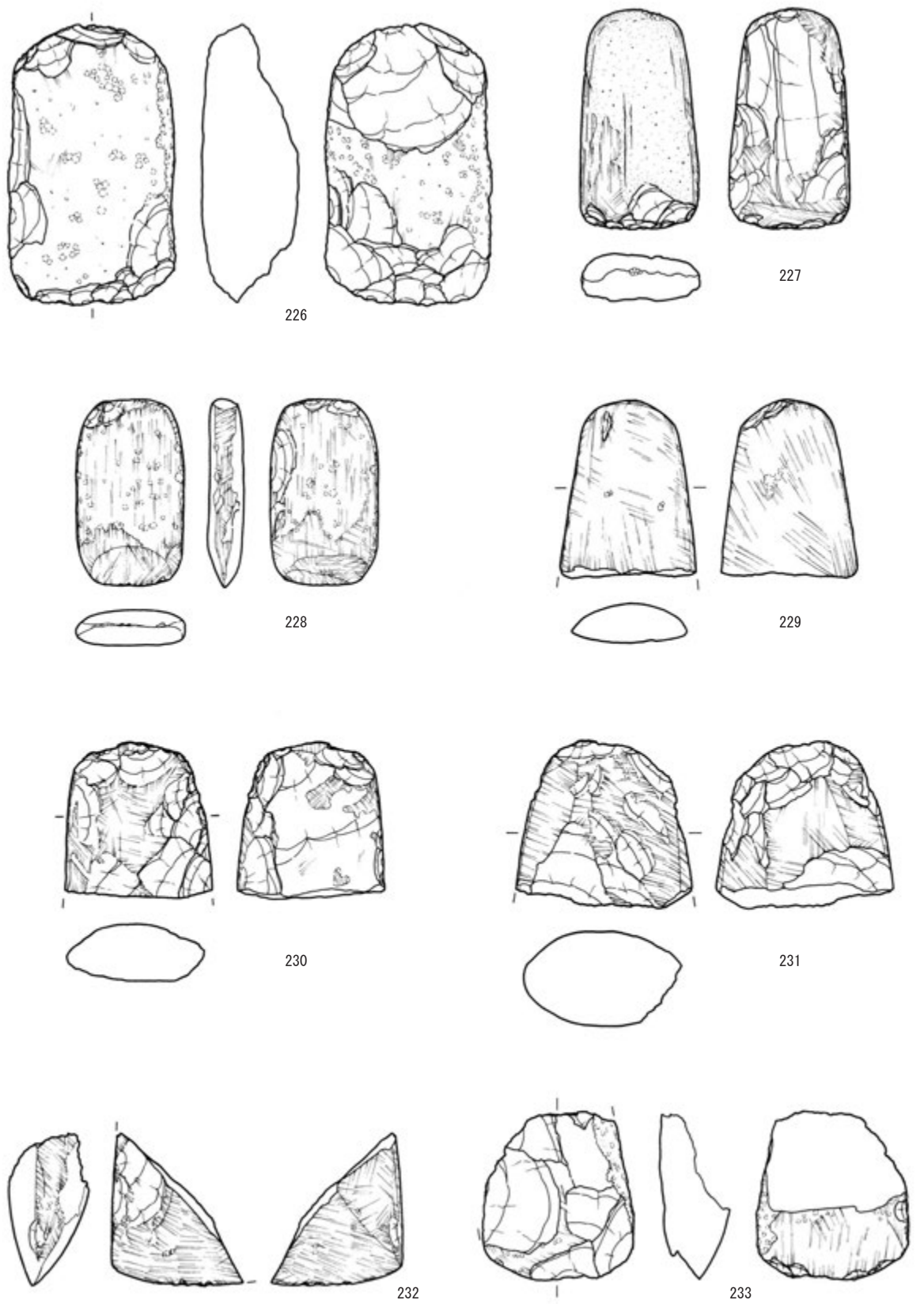
226～235は石斧である。226は片麻岩で、敲打により整形され、刃部を失ったのちに、上下に打撃による剥離があることから、くさび等再利用された可能性がある。227は細粒砂岩の自然礫を素材とし、背面は自然面を生かし、腹面は節理で大きく剥離した素材で作られた片刃の石斧である。刃部は使用による剥離が残る。228は全体を敲打により整形後に研磨されたもので、刃部の状態も良好である。229は砂岩の石斧基部で、全体が研磨されている。230と231は緑片泥岩の石斧の基部で、折断後の再利用はみられない。232は緑片泥岩の伐採斧の刃部の破損品で、打撃により破損した部分と考えられる。転用は見られない。233は安山岩の石斧刃部で、折断後の再利用はない。234は片麻岩の伐採斧の装着部。再利用は認められない。235は片麻岩の石斧の刃部で、敲打により整形され、刃部が使用による潰れが見られるが、折断後は再利用はされていない。

236～242は磨石、敲打石類である。236は中央に細かな敲打痕があり、全体が滑らかで、よく研磨されている。237は砂岩の磨石で、全面に滑面が及ぶ。238は砂岩の敲打石で楕円形の長軸側先端で敲打している。折断面に再利用はみられない。239は砂岩の凹石で、やや軟質で風化が激しい。240は砂岩であるが、珪質に富む磨石である。表裏面に滑面を有する。片面に打撃による剥離が見られるが、その後の敲打痕は見られない。241は砂岩の磨石で、表裏面ともに中央部にかすかな敲打がある。楕円形の両端部がないが、クガニ石といわれるものにあたる。242は棒状の敲打石で、先端部に敲打痕がある。

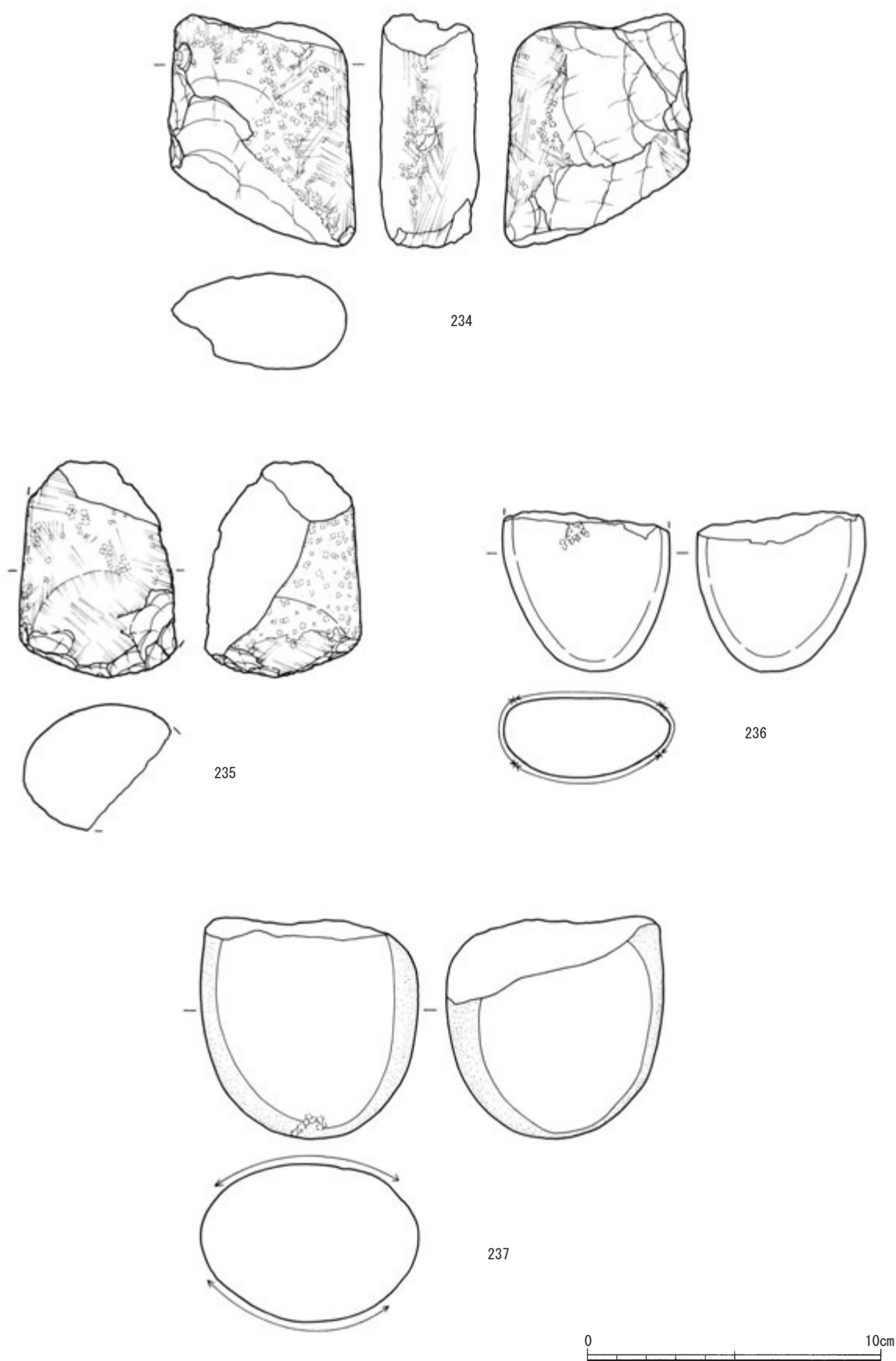
243は砂岩の小型の石皿で、片面の凹面は滑面で、外側は面取がなされて稜をつくる。244は花崗岩で、中央部に向かって凹みがあり、石皿の可能性が高い。

表9 石器観察表

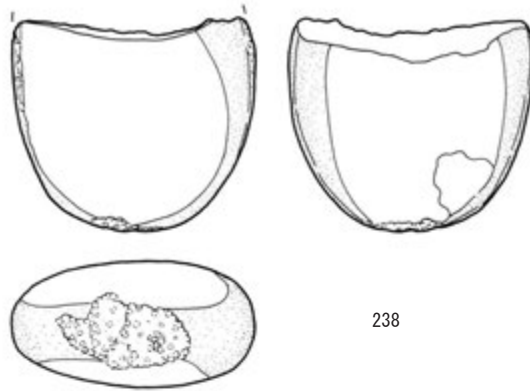
挿図 番号	掲載 番号	取上 番号	出土区	層	器 種	石 材	計 測 値				備 考
							長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重量 (g)	
30	226	422	A-7	Ⅲ a	石斧	片麻岩	9.45	5.65	3.25	275.0	再利用の可能性
	227	383	A-7	Ⅲ a	石斧	砂岩	7.45	4.00	1.60	72.5	
	228	一括	—	—	石斧	砂岩	6.30	3.65	1.20	50.5	
	229	一括	—	—	磨製石斧	砂岩	6.00	4.60	1.35	62.5	基部
	230	48	A-7	Ⅲ a	石斧	緑片泥岩	5.25	4.95	1.90	88.5	基部
	231	一括	—	—	石斧	緑片泥岩	5.60	5.95	3.20	152.5	基部
	232	一括	—	—	磨製石斧	緑片泥岩	5.10	4.45	2.65	52.0	
	233	一括	—	—	磨製石斧	安山岩	5.70	5.15	2.40	73.5	
31	234	666	B-5	Ⅲ a	石斧	片麻岩	7.90	6.35	3.30	248.5	
	235	817	B-5	Ⅲ a	磨製石斧	片麻岩	7.35	5.35	4.25	215.0	
	236	一括	—	—	磨敲石	緑片泥岩	5.40	5.70	2.70	126.0	
	237	一括	—	—	磨石	砂岩	7.55	7.40	5.40	430.0	
32	238	621	B-7	Ⅲ a	敲打石	砂岩	5.70	6.50	3.40	188.0	
	239	一括	—	—	凹石	砂岩	10.50	6.95	3.75	379.5	
	240	一括	—	—	磨石	砂岩	9.10	8.30	3.55	321.0	
33	241	一括	—	—	磨石	砂岩	7.35	8.85	5.60	510.0	クガニ石
	242	493	A-7	Ⅲ a	敲打石	砂岩	9.95	5.45	3.80	303.0	
	243	一括	—	—	石皿	砂岩	5.55	3.65	2.70	70.5	
	244	一括	—	—	石皿	花崗岩	11.90	6.85	3.70	374.5	



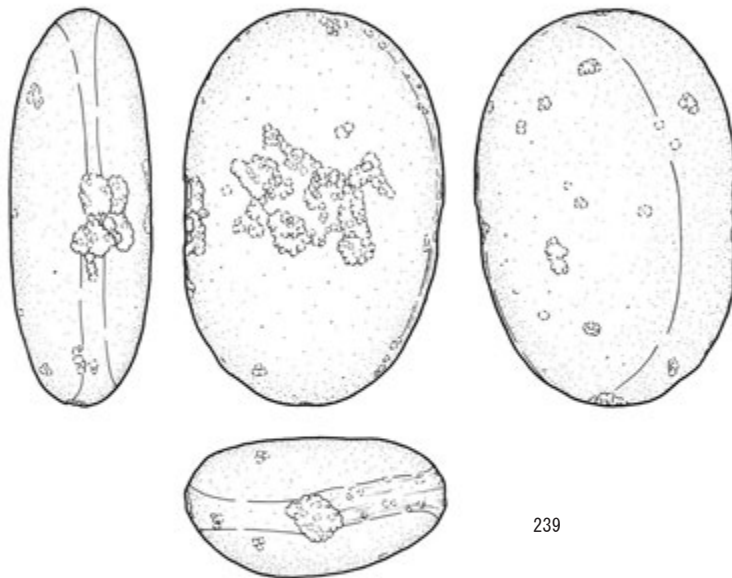
第31図 石器(1)



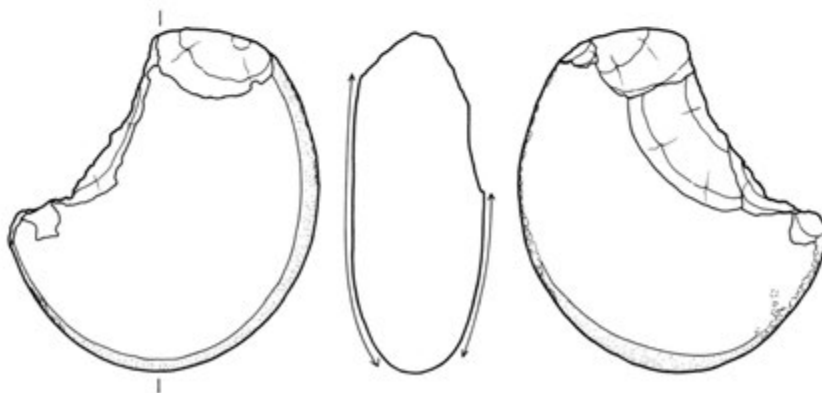
第32図 石器(2)



238



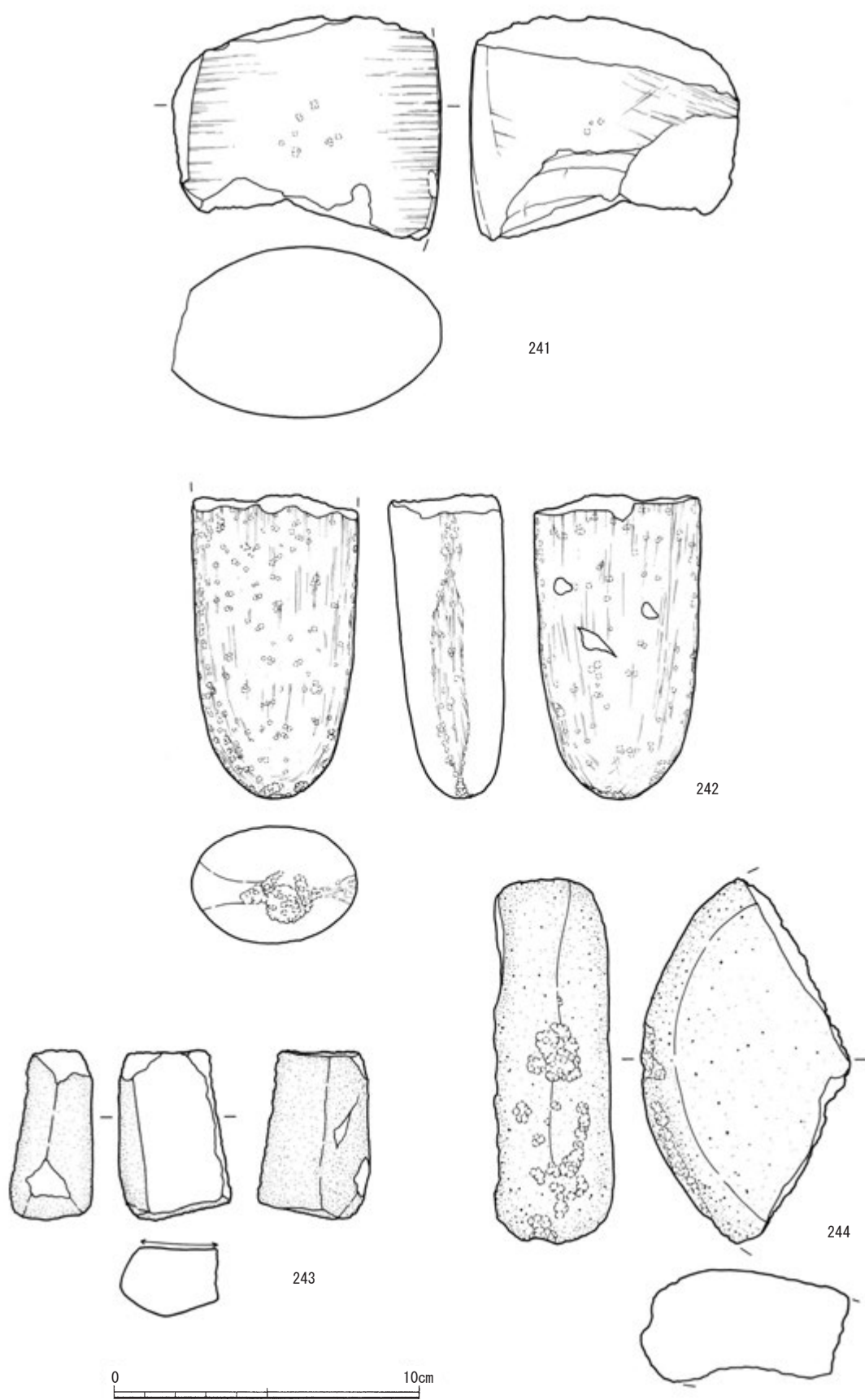
239



240



第33図 石器(3)



第34図 石器(4)

第4章 自然科学分析

カメコ遺跡における放射性炭素年代 (AMS 測定)

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

カメコ遺跡は、鹿児島県大島郡伊仙町犬田布（北緯 27° 42' 19", 東経 128° 54' 20"）に所在し、山地から緩やかに下降する台地端部にある浅く狭い谷部に位置する。測定対象試料は、B-7 区茶褐色粘質土（Ⅲ a 層）下で検出された焼土跡から、焼土とともに採取された炭化物様の黒褐色の物質 1 点である。

2 測定の意義

上記焼土跡が遺跡内唯一の遺構であるが、年代の指標となる人工遺物を含まない、遺跡全体の出土遺物は縄文後期から弥生時代までと幅が広く、遺構の所属時期を推定するのが難しいため、上記出土試料の放射性炭素年代測定により、焼土跡の年代を明らかにすることを試みた。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸 - アルカリ - 酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 $1\text{mol}/\ell$ (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO_2) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした ^{14}C -AMS 専用装置 (NEC 社製) を使用し、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である。AMS 装置による測定値を用いる。
- (2) ^{14}C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、

1950 年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には, Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値とともに, 補正していない値を参考値として示す。 ^{14}C 年代と誤差は, 下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また, ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1 \sigma$) は, 試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2%であることを意味する。

- (3) pMC (percent Modern Carbon) は, 標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し, pMC が 100 以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要がある, 補正した値とともに, 補正していない値を参考値として示す。
- (4) 暦年較正年代とは, 年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ, 過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し, 実年代に近づけた値である。暦年較正年代は, ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり, 1 標準偏差 ($1 \sigma = 68.2\%$) あるいは 2 標準偏差 ($2 \sigma = 95.4\%$) で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は, $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い, 下一桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお, 較正曲線および較正プログラムは, データの蓄積によって更新される。また, プログラムの種類によっても結果が異なるため, 年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは, 暦年較正年代の計算に, IntCal13 データベース (Reimer et al. 2013) を用い, OxCalv4.2 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用する。暦年較正年代については, 特定のデータベース, プログラムに依存する点を考慮し, プログラムに入力する値とともに参考値として示す。暦年較正年代は, ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

6 検討結果

試料は約 10mℓ の土塊に包含され, 大きさは $0.7 \times 0.4 \times 0.3\text{cm}$, 重量 60mg, 黒褐色の塊状を呈する。

炭化物の黒味とは異なるやや明るい色調であることと, 木炭など通常の炭化物に比べ, 大きさの割に重いことが注意された。さらに, 試料を微量採取し, 燃焼させたところ, 炭素含有率が通常の炭化物よりも著しく低いことが確かめられた。

これらの所見により, この試料は炭化物でなく, 鉱物など他の物質であると判断されたため, 測定を断念した。

また, 一般に土壌の年代測定は可能であることから, 上記の黒褐色物質を包含した焼土の測定も検討した。しかし, 土壌試料の一般的な問題点として, 死滅した際に外部炭素の取り込みを止める生物起源の試料と異なり, 土壌はオープンなシステムであり, 堆積後の長い時間の中で, 土壌内の生物の活動や地下水の浸透などにより, 新しい炭素や古い炭素が取り込まれ, これが年代測定値に影響を及ぼすことがある。経験的には, 形成時の腐植を多く含み, 堆積後に, 火山灰や沖積層などでパックされて保存された土壌は, 形成時の年代を示す傾向がある。しかし, それ以前に形成された地層の再堆積物を多く含む場合は, そこに含まれる炭素の影響を受け, より古い年代を示すこ

とになる。発掘所見に基づき、この土壌試料の性質を検討したところ、ここから抽出された炭素の年代が、焼土の形成年代を示す可能性は、極めて低いと考えられたことから、これについても年代測定を断念した。

文献

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19 (3) , 355-363



試 料 写 真

第5章 総括

遺跡は、平成4年度に調査が行われたカメコ遺跡の北西側に位置し、前回調査地点から7 m程低い場所に所在する。今回の調査の結果、谷状の地形であることが確認された。

遺跡の残存状況については、平成4年度調査では天地返しにより包含層の残存状況は非常に悪かったと記録されているが、今回調査区では遺物を出土する層が2.5 m以上の厚さで堆積していた。

この状況は周辺丘陵部の隆起珊瑚礁上の薄い堆積土と対照的である。丘陵部は大雨などによる土壌の流出が激しく、流出した土壌が谷部に堆積したことを物語っているものと思われる。

遺物は、Ⅱ層からⅢd層まで、多量の土器細片や比較的大きな土器片、石器も平面的なピークをもたず、土器の型式も完全に混在した状態で出土した。このことも今回の調査地点が周辺からの土壌の流入堆積である可能性を示唆している。

第1節 遺構

遺構は、焼土跡が1基のみ検出された。遺構内から出土した黒色の炭化物状の塊をサンプリングし、年代測定を試みたが、試料自体が炭化物ではなく鉱物などの他の物質であることが判明し、年代の特定には至らなかった。

焼土跡自体も被熱による明確な赤化はみられず、谷地形に立地することから、長期的な利用ではなく、ごく短期間の利用であったと思われる。

第2節 遺物

1 土器

Ⅰ類土器、口唇部を肥厚させ突帯状にし、口縁下位に1条の突帯をめぐらす。口唇直下の突帯と口縁下位の突帯間に数条を単位とする平行沈線で鋸歯状文や綾杉状文を施す。突帯上には角形の連点や刻み目を施す。器形は口縁部がやや外反し、胴部の張りが小さいことを特徴とすることから、面縄西洞式土器の影響を色濃く残す犬田布式土器の一群と捉えた。

Ⅱ類土器、口唇部を肥厚させ突帯状から蒲鉾状の断面を呈し、頸部から肩部にかけ1条から2条のみみず腫れ状の突帯をめぐらす。突帯上には二叉状工具、もしくは串状の工具により突帯を挟み込むように連点が施され、口唇には連点文は施されない。口唇部・突帯間や数条めぐる突帯間に羽状文や斜行する沈線を施す。器形は頸部が締まり、胴部はやや張る特徴を示すことから、犬田布式土器の一群と捉えた。60、61のように突帯を施さないが二叉状工具による横位の連点間に羽状の沈線を施すもの、横位の沈線両側に羽状の短沈線を施すものもみられ、これらは後出する喜念Ⅰ式土器の特徴を表すものと思われる。

Ⅲ類土器、口唇部の肥厚は小さくなり、口縁部から肩部にかけ、縦横に細い隆帯を貼り付け、隆帯を挟み込むように二叉状もしくは櫛状の工具で連点を施す。また、縦横に羽状の連続沈線を施すもの、同様に有軸羽状文を施すことを特徴とすることから、喜念Ⅰ式土器の一群と捉えた。

Ⅳ類土器、Ⅴ類、Ⅵ類は口縁部分が肥厚し、断面蒲鉾状もしくは断面三角形を呈し、器面に文様が施されないという特徴から、宇佐浜式土器の一群と捉えた。

Ⅳ類からⅥ類へと口縁部断面肥厚が小さくなり最大肥厚部の稜線が下に下ることから、同一型式内

での形態変化を示していると捉えた。

Ⅶ類土器，口縁部がわずかな肥厚帯を呈するが，肥厚部下端を強く意識した作りとなっており，口縁部作成時に胴部との接合部でわずかに段を形成するに留まる。平口縁，波状口縁がみられ仲原式土器の一群である。

Ⅷ類，Ⅸ類土器，Ⅷ類土器はほぼⅦ類土器同様の器形と考えられ，口縁下位に突帯がめぐる。Ⅸ類土器は耳状突起の付く土器の一群で，器形は異なるが口唇部の飾り突起や平口縁，波状口縁がみられることから。Ⅷ類，Ⅸ類ともに仲原式土器の一部として捉えておきたい。

底部資料の中に貼り付け高台に穿孔を施す，吊り下げ式の土器が出土している。龍郷町ウフタⅢ遺跡に類似資料がみられる。また鉢形土器の体部に粘土貼り付けによる U 字状の隆起部をもち，縦方向の隆起部に穿孔を施す，つり下げ式の土器も出土している。

2 石器

石斧，磨石，敲石ともに破損品が多く，破断面に摩耗はみられず，再利用されずに廃棄されたものと考えられる。

剥片石器があまり見られず，石斧や磨石や敲石を主体とする石器組成は，奄美の縄文後期から晩期の遺跡に共通して見られる。ただ，通常石斧の破損品などは敲石として転用されることが普通であるが，ここでは見られないことが特徴である。

3 おわりに

当遺跡は，出土した遺物から縄文時代後期から弥生時代前期初頭の年代が想定される。しかし，出土状況が流れ込みの状況であることから当遺跡の状況を反映しているものとはいえない。隣接する1993年調査時に失われていたカメコ遺跡の様相，遺跡東方向に展開する丘陵部に良好な遺跡が存在する可能性を示唆しているものと思われる。今後，周辺遺跡の調査により，これら遺物の詳細なセッ ト関係などが解明されることを期待する。

参考文献

- 吉永正史・宮田栄二 1984 『犬田布貝塚』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)伊仙町教育委員会
- 吉永正史・堂込秀人 1990 『上城跡・上城遺跡』与論町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)与論町教育委員会
- 池畑耕一・大久保浩二 1993 『カメコ遺跡』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(8)伊仙町教育委員会
- 堂込秀人 1993 『奄美諸島の縄文時代晩期から弥生時代相当期の土器編年』考古論集(潮見浩先生退官喜念論集)
- 堂込秀人 1999 『塔原遺跡(2)』天城町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)天城町教育委員会

写 真 图 版

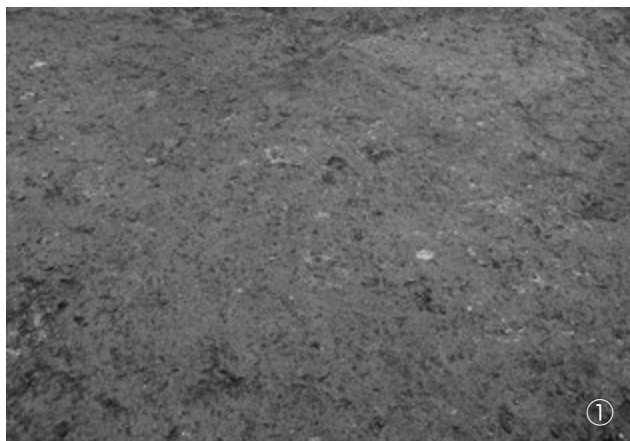


①カメコ遺跡遠景

②カメコ遺跡調査前状況

③発掘調査作業状況

④土層断面



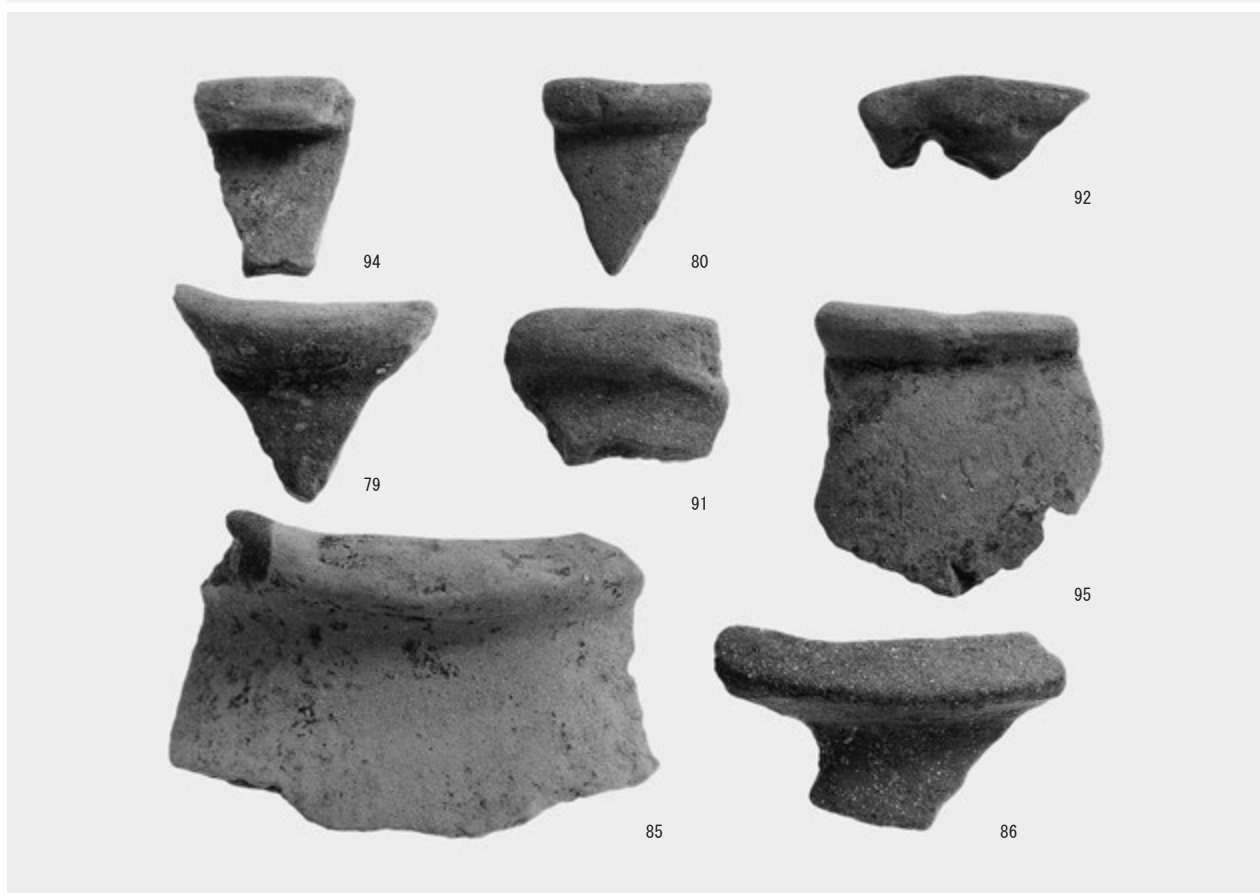
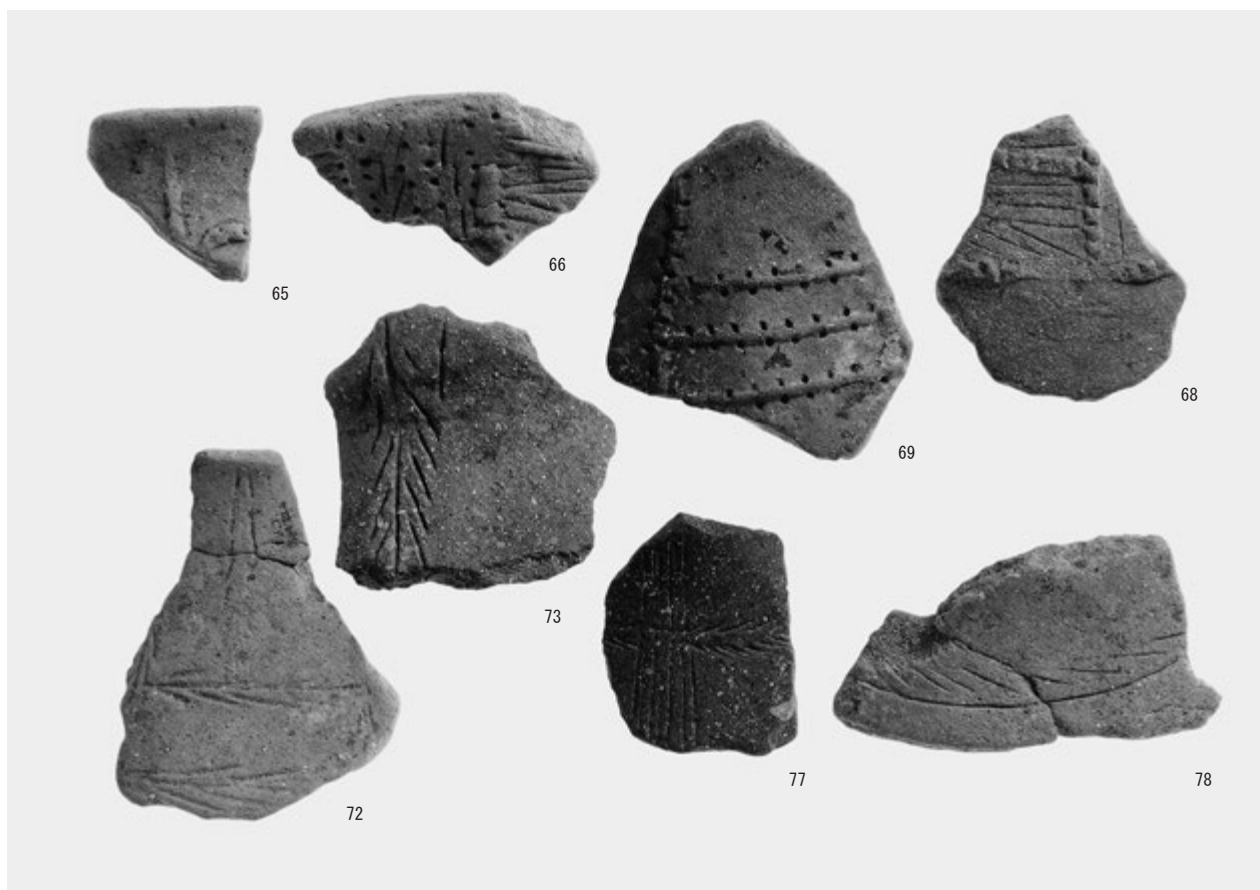
①焼土跡検出状況 ②焼土跡埋土断面 ③掲載番号 21 遺物出土状況
④掲載番号 12 遺物出土状況 ⑤遺物出土状況 ⑥完掘状況



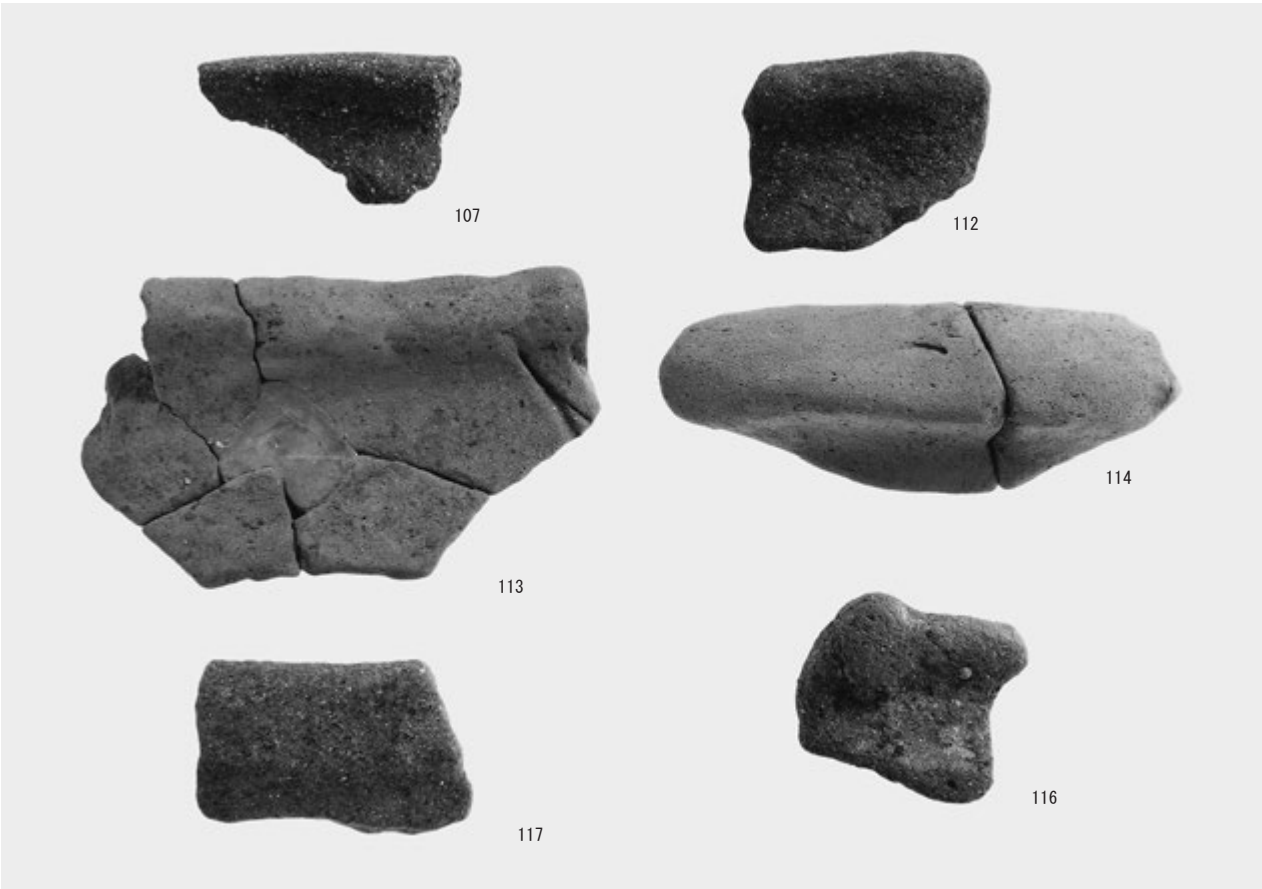
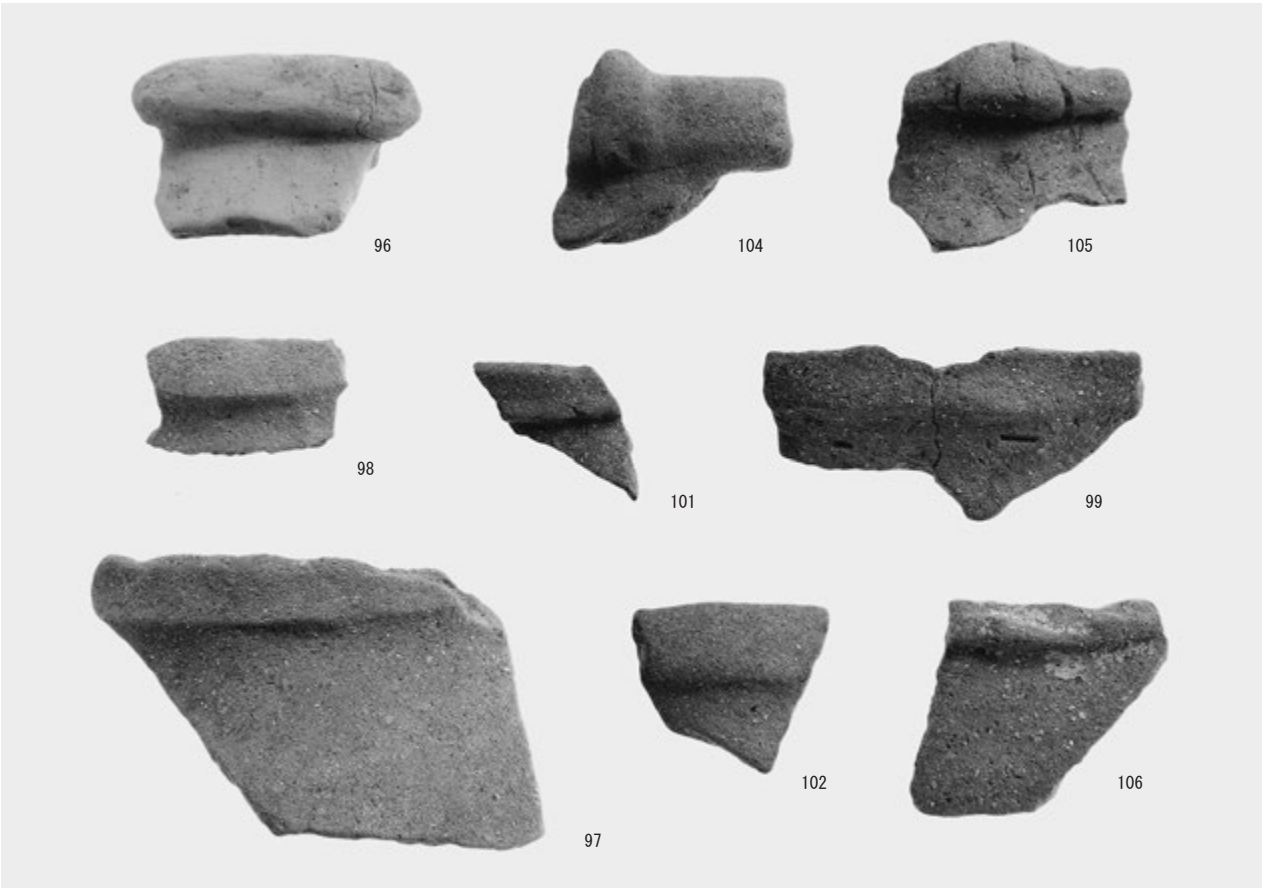
I 類 土 器



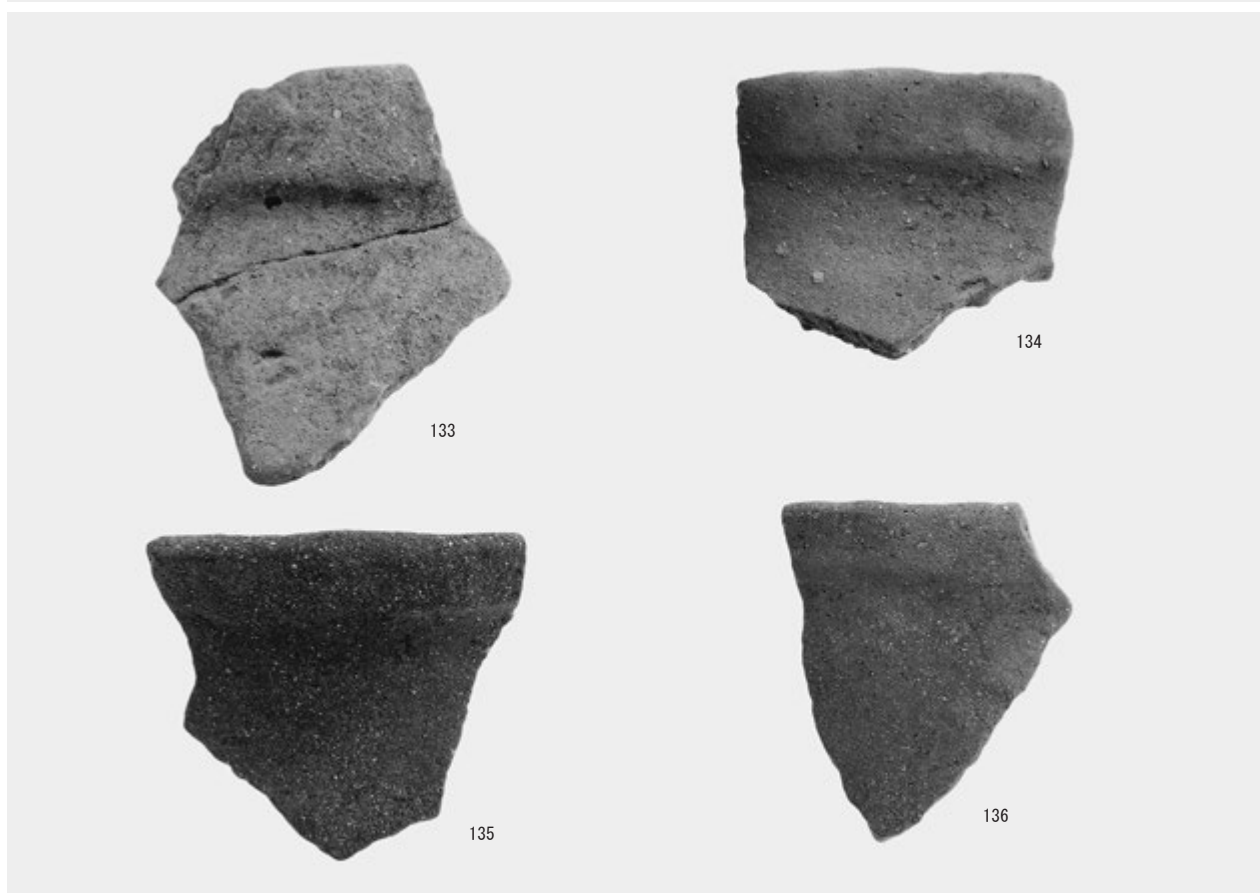
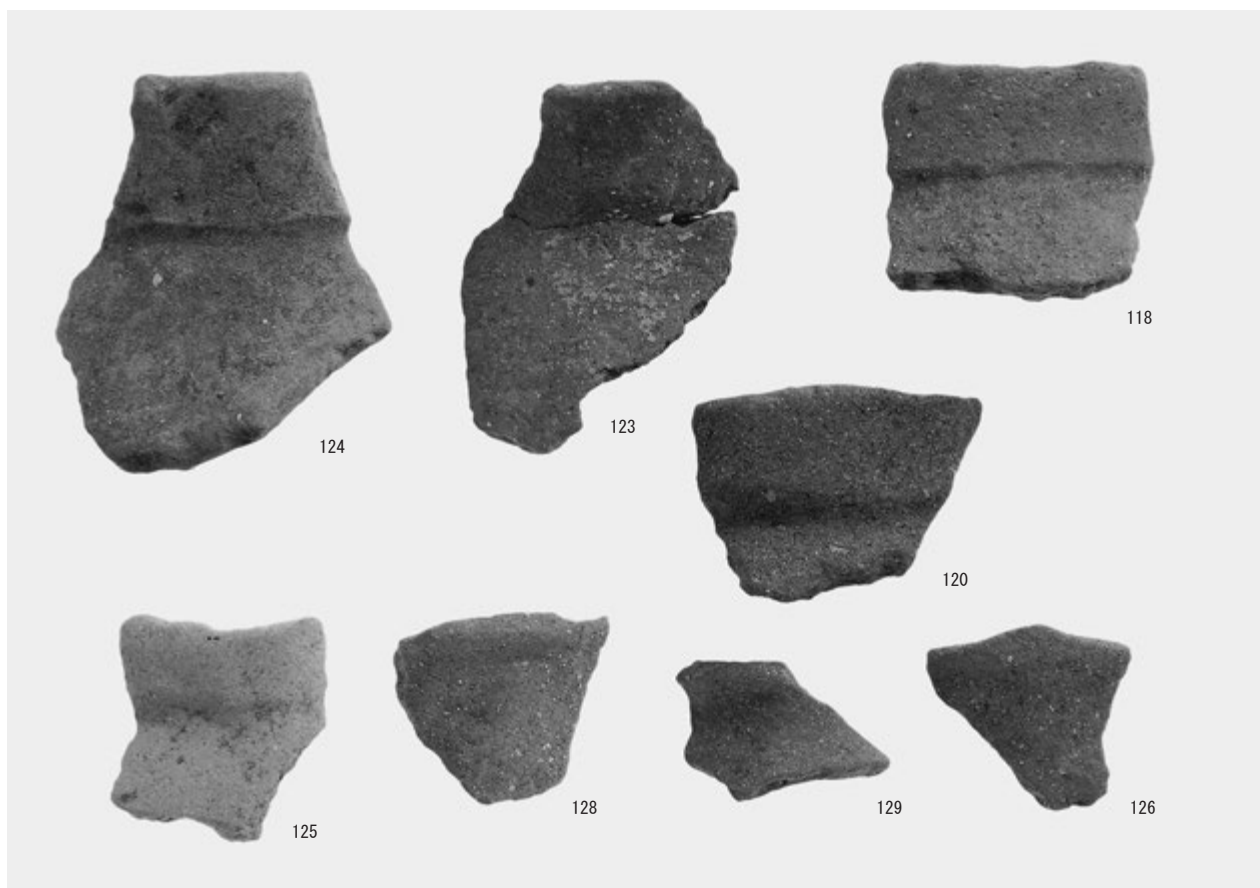
Ⅱ 類 土 器



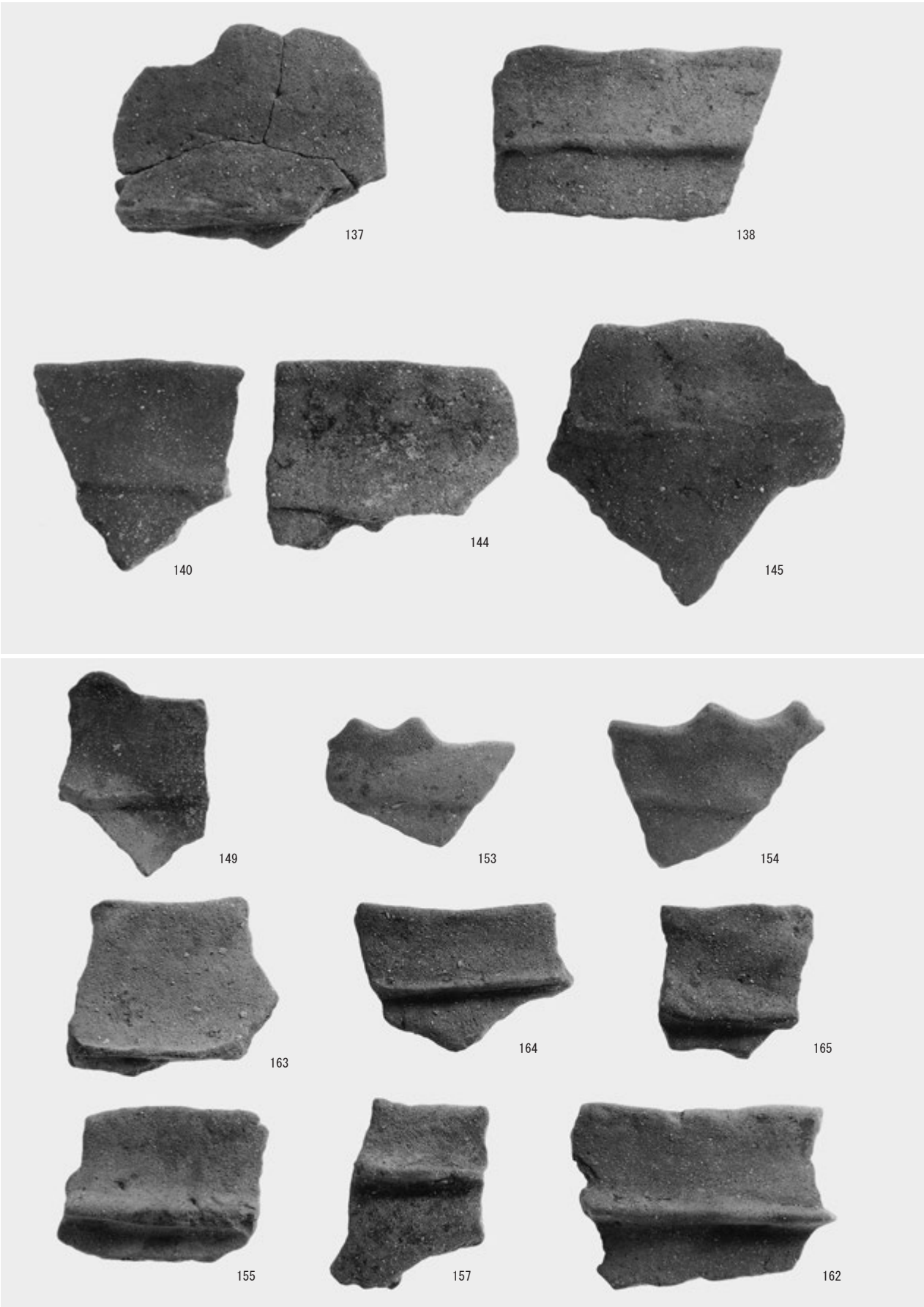
Ⅲ, Ⅳ 類 土 器



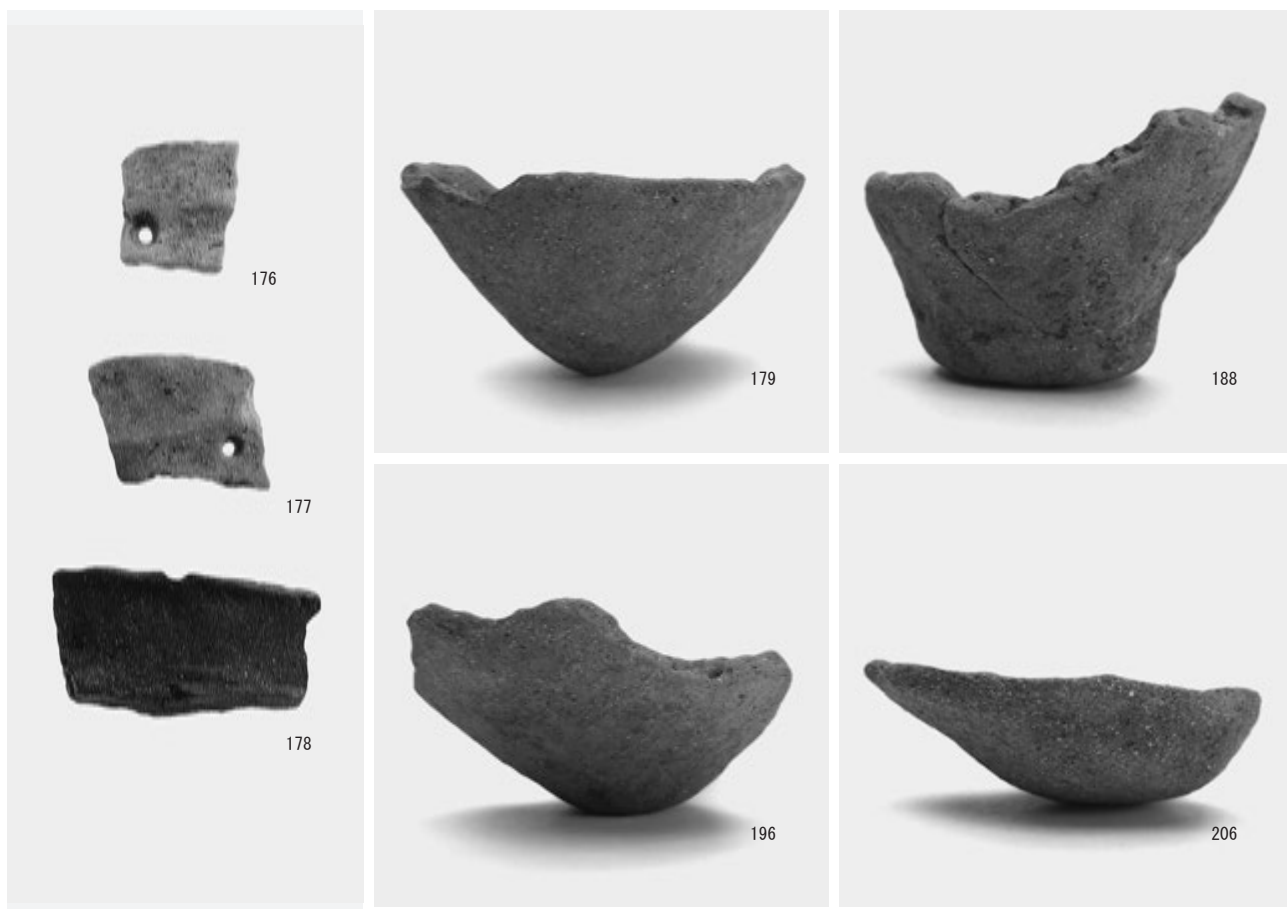
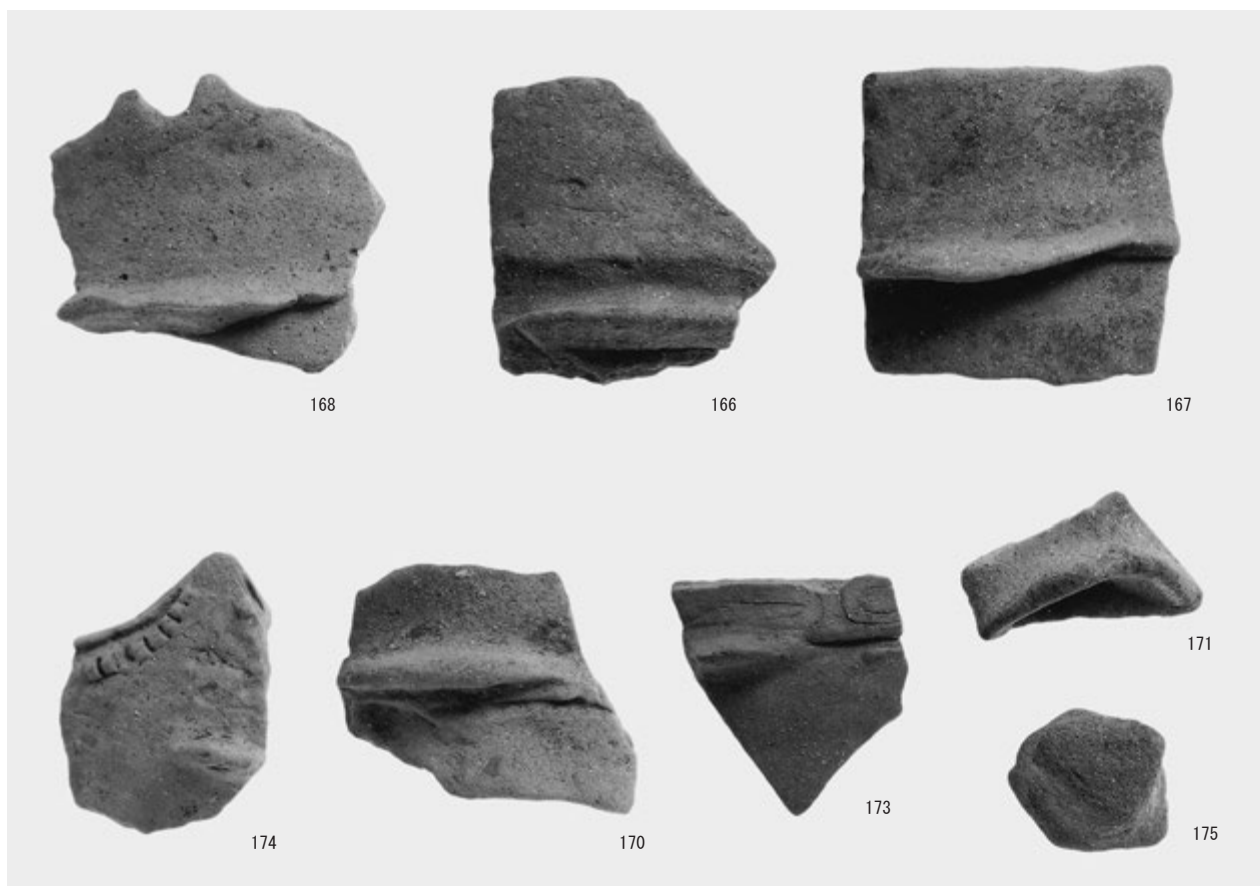
V 類 土 器



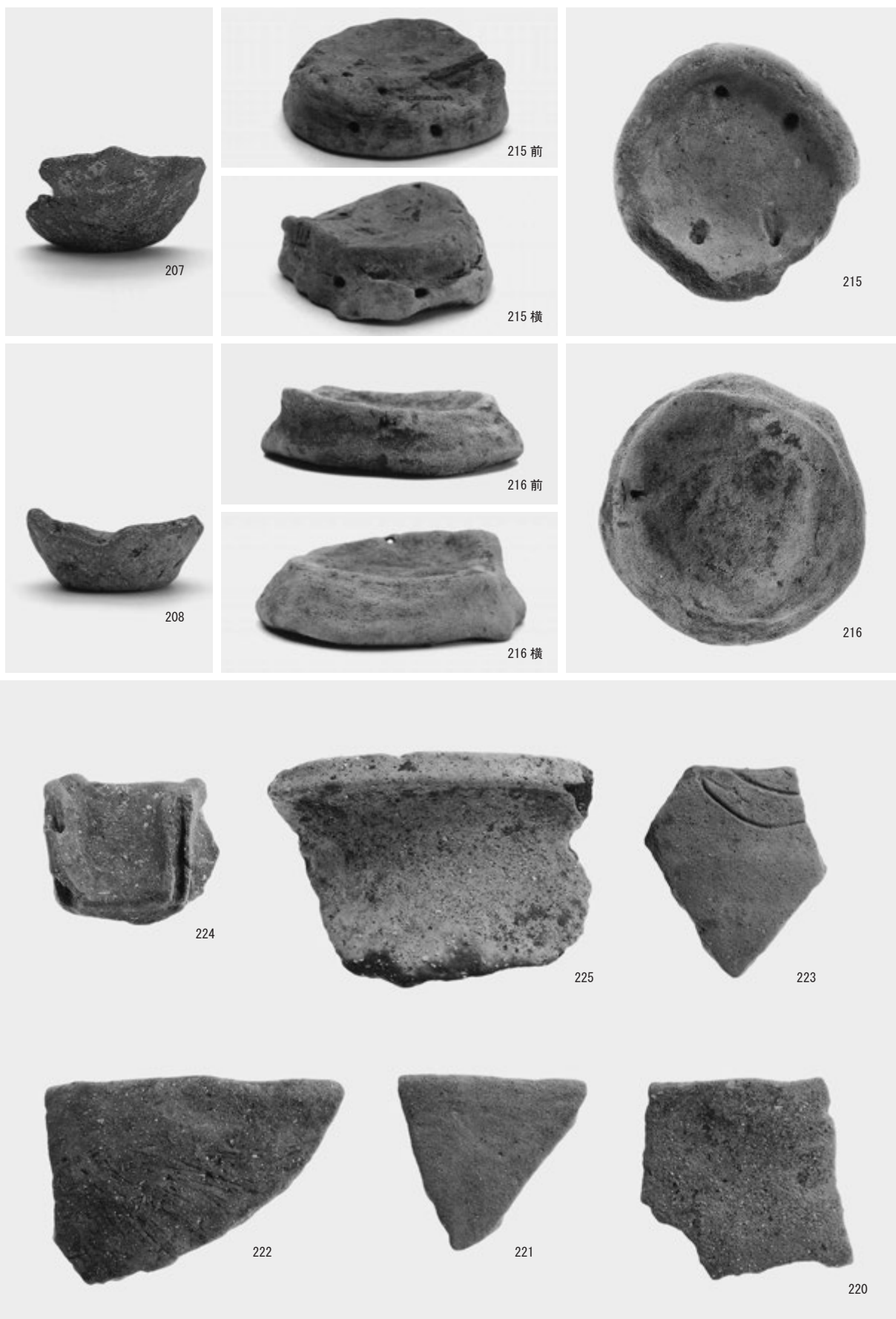
Ⅵ 類 土 器



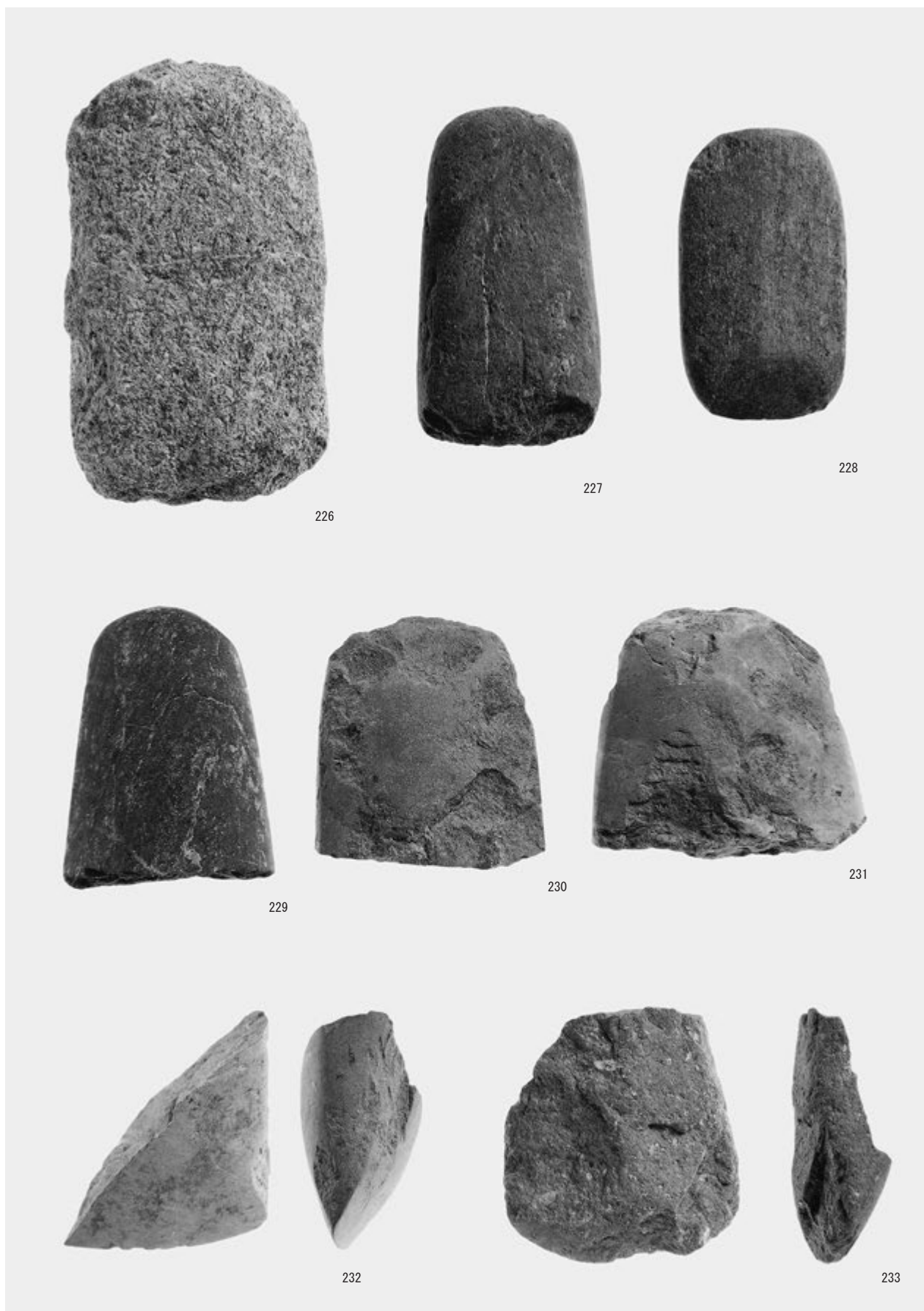
Ⅶ, Ⅷ 類 土 器



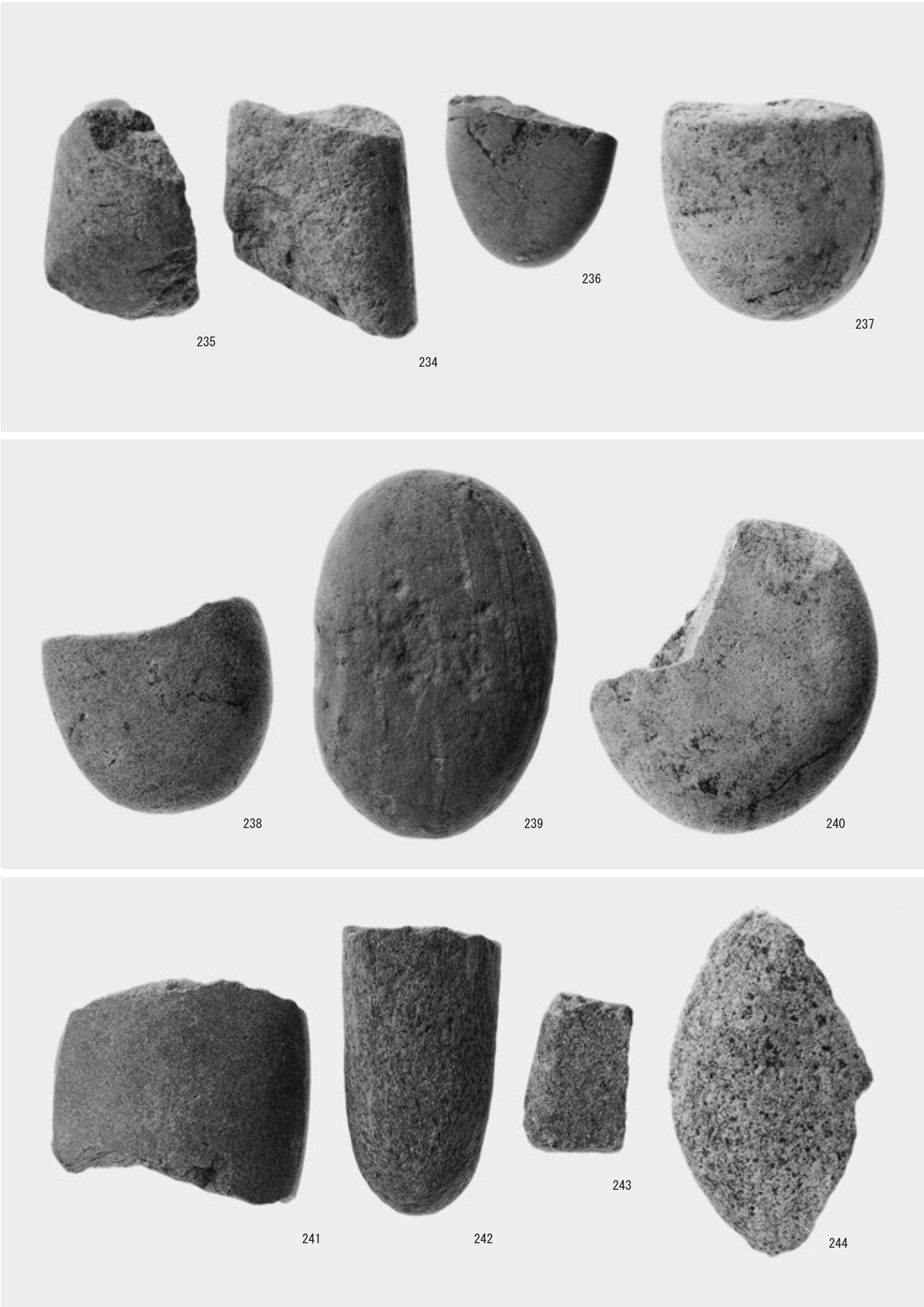
Ⅸ類，補修孔，底部(1)



底部 (2), その他の土器



石 器 (1)



石 器 (2)

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（182）

主要地方道伊仙天城線道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅰ）

カメコ遺跡

発行年月日 2014 年 3 月

発 行 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899－4318
鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森 2 番 1 号

印 刷 有限会社 国分新生社印刷
〒899－4301 鹿児島県霧島市国分重久 627-1
TEL 0995-45-4880 FAX 0995-45-6979

